

# ハ ン ザ ン バル 平安山原B遺跡

— キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 (平成14・15年度) —

2008 (平成 20) 年 12 月

沖縄県 北谷町教育委員会



卷首図版 1 平安山原B遺跡航空写真

C-13



C-15



C-16

C-17



C-18



C-14



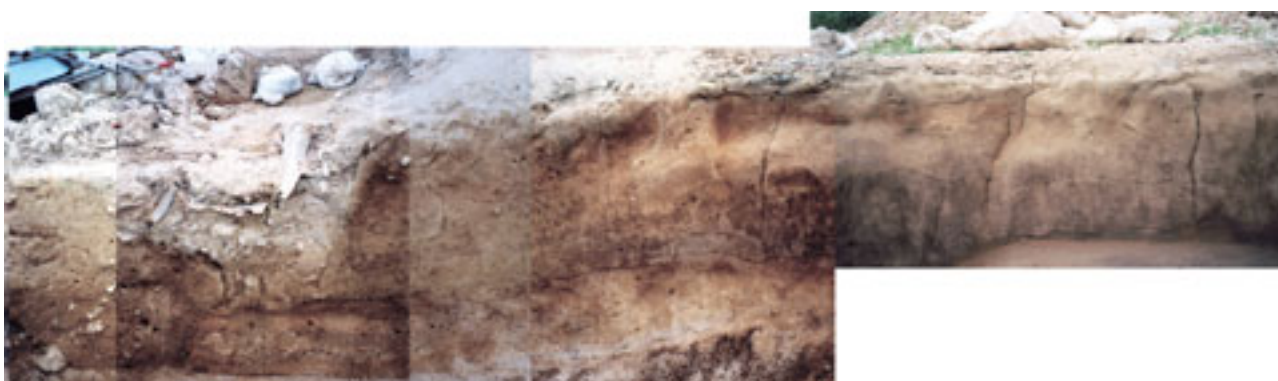
C-15

C-16



C-17

C-18



C-18

C-19



C-19

C-18



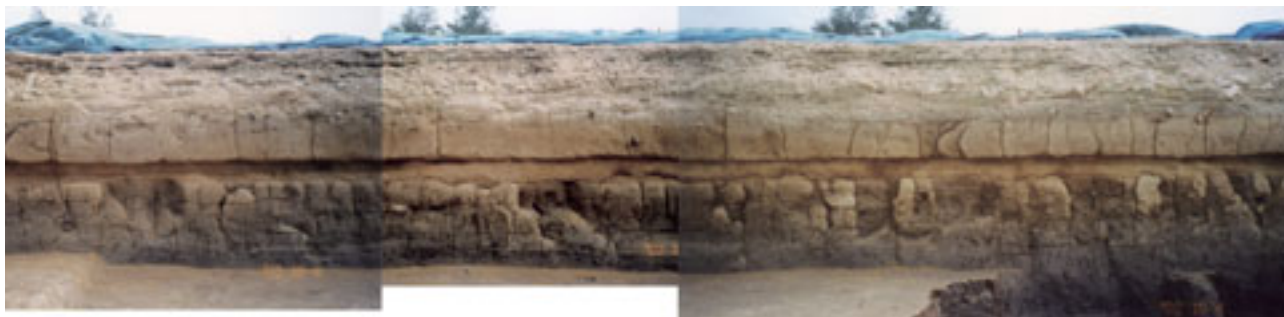
C-17

C-16



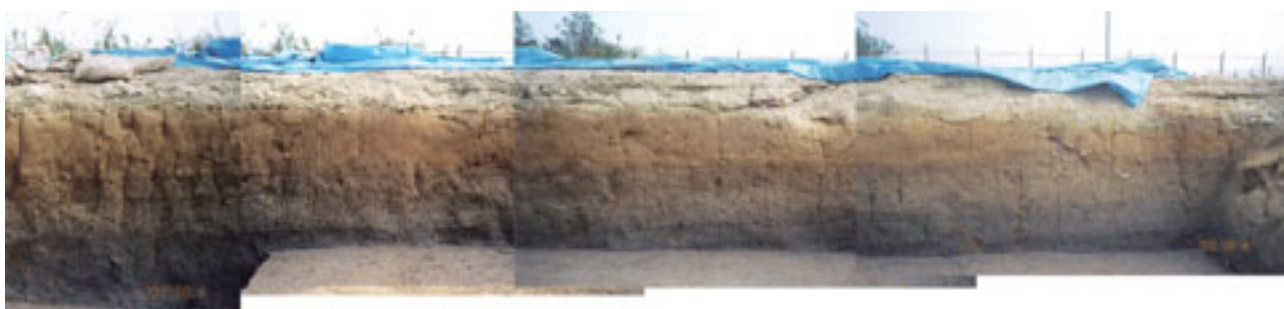
C-15

C-14

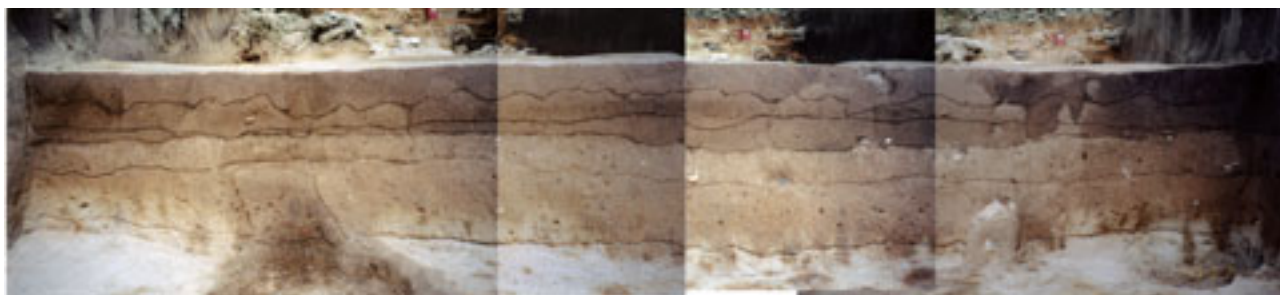


C-14

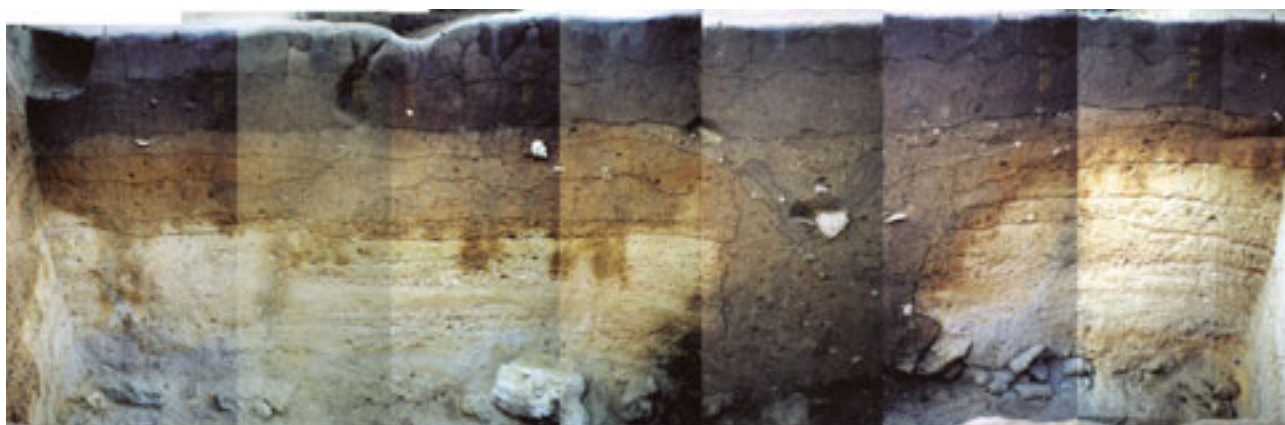
C-13



C-17 東壁



C-18 西壁



C-13 西壁





井戸上面検出状況



井戸周辺検出状況



井戸及び敷石 (第11図)



井戸への階段



洗い場



井戸内側



高床式建物址 (東側より)



高床式建物址 (検出時)



柱穴半裁 (柱穴No. 3)



柱穴完掘状況 (黄褐色混貝粘質砂層面)



柱穴完掘状況 (枝サンゴ層面)





橙褐色粘質土層面



黄褐色混貝粘質砂層面



ジュゴン検出状況 C-17 (第17図)



縄文晩期系土器 C-17 (第22図36)



大当原式土器 C-18 (第19図11)



面縄前庭式土器 C-18 (第23図46)



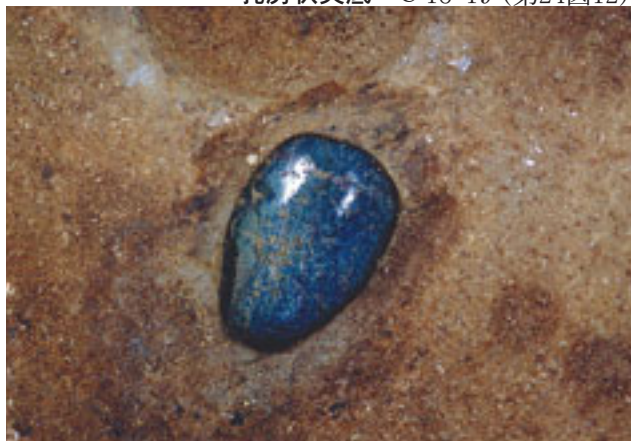
縄文晩期系土器 C-17・18 (第20図18)



乳房状尖底 C-18・19 (第24図12)



石斧 C-17 (第27図1)



敲き石 C-17 (第28図8)



青磁 (第31图 4)



染付 (第32图 1)



土器 (第18图 4)



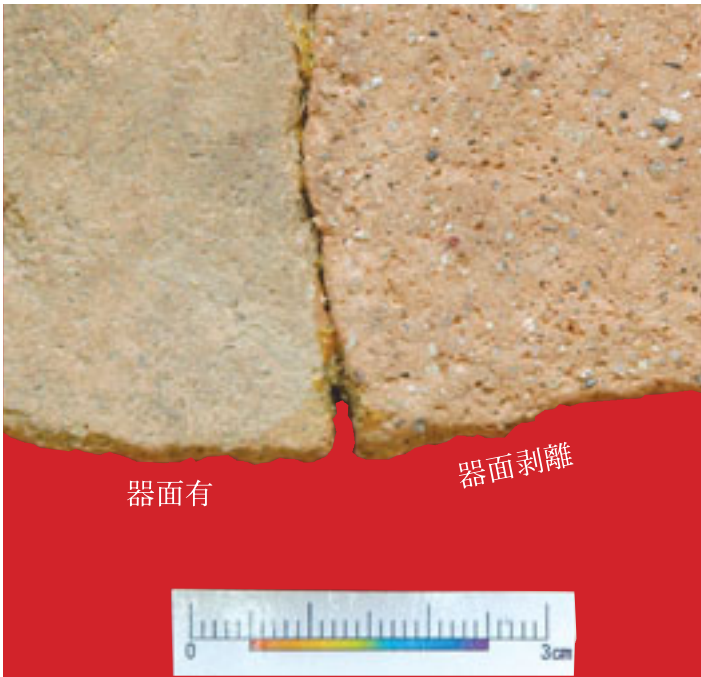
復元土器 (第22図37)



復元土器 (第22図36)



近世土器 (第18図1・2、点線部分に貼付)



弥生式土器 (右の拡大写真)



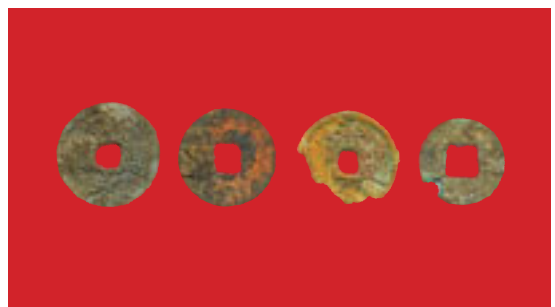
弥生式土器 (破線部分は左に拡大) (第23図45)



石斧 (第27図)



貝製品 (第25図)



銭貨 (第45図)

# 本文目次

巻首図版  
はじめに  
例言

第一章	調査に至る経緯	1
	第1節 調査に至る経緯	1
	第2節 調査体制	1
第二章	遺跡の位置と環境	3
第三章	調査の方法と成果	10
	第1節 調査の方法	10
	第2節 調査の経過	11
	第3節 層序	18
	第4節 遺構	27
	1. 井戸	27
	2. 高床式建物址	29
	3. 溝状遺構	31
	4. ピット群	32
	5. 落込み遺構	32
	6. ジュゴンの頭骨	35
	第5節 出土遺物	36
	1. 土器	36
	2. 貝製品	64
	3. 骨製品	64
	4. 石器	65
	5. 白磁	74
	6. 青磁	74
	7. 染付	76
	8. 沖縄産施釉陶器	78
	9. 沖縄産無釉陶器	83
	10. 陶質土器	91
	11. 本土産陶磁器	92
	a. 近世陶磁器	92
	b. 近・現代磁器	94
	12. 瓦・煉瓦	95
	13. 円盤状製品	97

第四章	自然遺物	98
	第1節 脊椎動物遺体	98
	第2節 貝類遺体	104
第五章	まとめ	119
付篇	『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』補遺3	127
	1. 千原遺跡	127
	2. 平安山原A遺跡	127
	3. 平安山原B遺跡	127
	4. 伊礼原D遺跡	128

## 図版目次

卷首図版1	平安山原B遺跡航空写真		図版19	石器1(石斧)	69
卷首図版2	試掘トレンチ北壁(1)		図版20	石器2(球状石器・敲き石・くぼみ石・石皿)	71
卷首図版3	試掘トレンチ北壁(2)		図版21	石器3(敲き石・チャート)	73
卷首図版4	試掘トレンチ南壁		図版22	白磁	74
卷首図版5	試掘トレンチ東壁・西壁		図版23	青磁	75
卷首図版6	井戸(C-17)		図版24	染付	77
卷首図版7	高床式建物址(C-17・18)		図版25	沖縄産施釉陶器	82
卷首図版8	C-17・18遺物検出状況(東側より)		図版26	沖縄産無釉陶器1	89
卷首図版9	遺物検出状況		図版27	沖縄産無釉陶器2	90
卷首図版10	青磁・染付・土器		図版28	陶質土器	91
卷首図版11	土器		図版29	近世陶磁器	93
卷首図版12	弥生式土器・石斧・貝製品・銭貨		図版30	近・現代磁器	94
図版1	平安山原集落周辺	9	図版31	瓦・煉瓦	96
図版2	井戸検出状況	28	図版32	円盤状製品	97
図版3	柱穴検出状況(橙褐色粘質土層(北側より))	29	図版33	イノシシ・ウシ	102
図版4	柱穴完掘状況 (黄褐色混貝粘質砂層(北西より))	30	図版34	サカナ・トリ・ジュゴン	103
図版5	溝状遺構(左:検出面 右:掘り下げ後)	31	図版35	貝類1(巻貝)	112
図版6	ピット群(左:黒褐色土層面 右:橙褐色粘質土層面)	32	図版36	貝類2(巻貝)	112
図版7	落込み遺構(左:断面 右:遺物検出状況)	32	図版37	貝類3(巻貝)	113
図版8	ジュゴン頭骨(上面)	35	図版38	貝類4(二枚貝)	113
図版9	ジュゴン頭骨(側面)	35	図版39	貝類5(二枚貝)	114
図版10	土器1(口縁部-I・III類)	47	図版40	貝類6(ヤコウガイ)	114
図版11	土器2(口縁部-III・IV・V類)	49	図版41	C-19石灰岩塊検出状況	115
図版12	土器3(口縁部-V類)	51	図版42	C-16下層確認	116
図版13	土器4(口縁部-V類)	53	図版43	遺物検出状況	117
図版14	土器5(口縁部-V類)	55	図版44	発掘作業風景	118
図版15	土器6(口縁部・胴部-V・VI・VII類)	57	図版45	銭貨	130
図版16	土器7(底部)	63	図版46	簪・キセル	130
図版17	貝製品	64	図版47	千原遺跡 試掘No.30南壁	131
図版18	骨製品	64	図版48	平安山原A遺跡 試掘No.12西北壁	132
			図版49	伊礼原D遺跡 試掘No.62東壁	133

# 挿図目次

第1図 平安山原B遺跡の位置	5	第25図 貝製品	64
第2図 北谷町の遺跡	6	第26図 骨製品	64
第3図 試掘ポイント 『キャンプ桑江試掘調査』(2005)	8	第27図 石器1(石斧)	68
第4図 グリッド設定	17	第28図 石器2(球状石器・敲き石・くぼみ石・石皿)	70
第5図 南壁土層断面	19	第29図 石器3(敲き石・チャート)	72
第6図 北壁土層断面	21	第30図 白磁	74
第7図 出土遺物分布(C-17・18橙褐色粘質土層～ 黄褐色泥貝粘質砂層)	23	第31図 青磁	75
第8図 C-19東壁土層断面	25	第32図 染付	77
第9図 C-18西壁土層断面	25	第33図 沖縄産施釉陶器	81
第10図 C-13西壁土層断面	25	第34図 沖縄産無釉陶器1(すり鉢)	86
第11図 C-17北側の井戸(平面・断面図)	28	第35図 沖縄産無釉陶器2(鉢・火炉・瓶・壺)	87
第12図 1号高床式建物址	29	第36図 沖縄産無釉陶器3(壺)	88
第13図 2号高床式建物址	30	第37図 陶質土器	91
第14図 溝状遺構(平面・断面図)	31	第38図 近世陶磁器	93
第15図 黒褐色土層面ピット(平面・断面図)	33	第39図 近・現代磁器	94
第16図 橙褐色粘質土層面ピット(平面・断面図)	34	第40図 瓦・煉瓦	96
第17図 ジュゴン頭骨出土状況	35	第41図 円盤状製品	97
第18図 土器1(口縁部-I・III類)	46	第42図 C-16・C-17における 貝類遺体生息場所類型組成	106
第19図 土器2(口縁部-III・IV・V類)	48	第43図 平安山原B遺跡遺構・層別遺物出土一覧	120
第20図 土器3(口縁部-V類)	50	第44図 試掘No.12・No.30・No.54-B・No.64の位置	129
第21図 土器4(口縁部-V類)	52	第45図 銭貨	130
第22図 土器5(口縁部-V類)	54	第46図 簪・キセル	130
第23図 土器6(口縁部・胴部-V・VI・VII類)	56	第47図 千原遺跡 試掘No.30南壁	131
第24図 土器(底部)	62	第48図 平安山原A遺跡 試掘No.12西壁	132
		第49図 伊礼原D遺跡 試掘No.62東壁	133

# 表目次

表1 北谷町遺跡一覧	7	表17 沖縄産無釉陶器出土量	84
表2 県内掘り抜き井戸出土一覧	28	表18 沖縄産無釉陶器観察一覧	85
表3 1号高床式建物址柱穴計測一覧	29	表19 陶質土器出土量	91
表4 2号高床式建物址柱穴計測一覧	30	表20 近世・近現代陶磁器出土量	92
表5 土器(口縁部)出土量	40	表21 瓦・煉瓦出土量	95
表6 土器(口縁部・胴部)観察一覧	41	表22 サカナ出土一覧	98
表7 土器(胴部)出土量	45	表23 トリ出土一覧	98
表8 土器(底部)観察一覧	61	表24 イノシシorブタ出土一覧	100
表9 土器(底部)出土量	62	表25 イノシシorブタ歯牙出土一覧	100
表10 石器 層序別出土量	66	表26 ウシ・ウマ出土一覧	101
表11 石質別分類状況	66	表27 ジュゴン出土一覧	101
表12 石器観察一覧	67	表28 巻貝類の出土量	107
表13 青磁出土量	74	表29 二枚貝類の出土量	109
表14 染付出土量	76	表30 陸・淡水産貝類の出土量	111
表15 沖縄産施釉陶器出土量	79	表31 タカラ貝類の出土量	111
表16 沖縄産施釉陶器観察一覧	80	表32 銭貨観察一覧	128



# はじめに

北谷町教育委員会では、平成7年度から平成16年度まで返還跡地と関連地域を含め約40.5haを文化庁の補助を受け、キャンプ桑江北側地区の埋蔵文化財の試掘及び範囲確認調査を進めてまいりました。その結果、キャンプ桑江北側地区において10遺跡と6遺物散布地が発見されております。

本報告書である平安山原B遺跡は平成9年度の試掘調査で確認され、平成14年度から15年度にかけて行った範囲確認調査を収録したものです。

今回の範囲確認調査の対象となった区域は、調査開始時期は米軍基地として機能していたため、基地内施設に影響のない部分を調査しています。その結果、調査区には戦前まで使用していたと思われる井戸や近世及び弥生時代相当期の文化層が確認されました。

特に、試掘調査時に発見された近世のサターヤー（砂糖小屋）窯跡と今回の井戸の発見で戦前の平安山集落の一端を窺い知ることができましたことは、本町の戦後の基地接収で苦渋を強いられた地元住民からすると大変貴重で重要な成果が上げられ、喜びを与えるものと考えております。また、平安山集落の前進となる近世の遺構や更に、弥生時代相当期の包含層が確認されたことは本地域が古い時代から住みやすい環境であったと考えられます。このように、新しい時期や古い時代の遺物や遺構の出土により、集落の成り立ちを解明する資料が得られたことは大変喜ばしいことであります。

今回の調査は平安山原B遺跡の範囲を確認するための調査であり、全容は分かっていませんが、来る、区画整理事業で本遺跡は本調査の対象となっており、今後の調査の手掛かりとなった重要な調査であったと考えています。

今回、調査で判明したことを報告書として刊行することとなりましたが、本書が文化財保護への御理解と認識を深める一助となり、また北谷町の歴史を考える研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々の御理解とご協力を賜りました方々に対し、心からの謝意を表します。

平成20年12月

北谷町教育委員会  
教育長 比嘉 秀夫

# 例 言

1. 本報告書は「キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業」として文化庁の補助を受けてキャンプ桑江北側返還に伴う範囲確認調査、平成14・15年度に実施した『平安山原B遺跡』試掘調査の成果をまとめたものである。
2. 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の1/2,500地形図（昭和54年測量）を元に北谷町役場都市計画課が作成したものである。本報告の方位は磁北をさす。
3. 遺物の同定等については、下記の方にご協力をいただいた。（敬称略）記して感謝申し上げます。  
石 質 大城 逸朗（北谷町文化財審議員：理学博士）
4. 出土遺物の一部を実測業務委託した。  
文化財サービス株式会社
5. 本報告書は、東門研治が中心になり、島袋春美ほかの協力を得て編集を行った。執筆分担は下記のとおりでである。

第一章・第三章 第1～4節	東門 研治
第二章・第三章 第5節1	秋本 真孝
第三章・第4節6・第5節1～3・5～13	島袋 春美
第三章・第5節4	上地千賀子
第四章	島袋 春美
第五章	東門 研治
付篇	島袋 春美

6. 遺物洗浄・接合・実測・復元・集計・写真撮影・図面整理・トレース・図版作成等の資料整理は下記の人員で行った。

上間真寿美	豊里 初江	東 順子	照屋 元子	佐久間クリエ	山城小百合
稲嶺恵理奈	西原 美草	仲村渠恵子	東恩納里花	大城 光	曾木 菊枝
細川 愛	知念 栄子	上江洲陽子	蔵本奈々絵	名嘉間弥生	渡口沙里恵

7. 本遺跡の遺物の注記は下記のとおりでである。尚、遺物台帳は別添の「CD」に収録した。

・遺物台帳例

遺物No.	遺跡名	トレンチ	層序	日付
222	平安山原B	c-18	赤褐色砂層	030206

・注記例

→

H14平B222 c-18赤褐色砂層 030206
---------------------------------

8. 本書に掲載した発掘調査に関する写真、実測図などの記録および出土遺物全ては北谷町教育委員会に保管している。

# 第一章 調査に至る経緯

## 第1節 調査に至る経緯

平安山原B遺跡は、キャンプ桑江北側返還に伴う区画整理事業の事前調査として、文化庁の補助を得て平成7年度から平成9年度の3年間行い、10遺跡と6遺物散布地が発見され、本遺跡は平成9年度に発見された<sup>(註1)</sup>。

その後、試掘調査の成果を踏まえ、区画整理事業及び諸開発事業とのより円滑な事業計画を行うために、平成10年度から平成17年度にかけて範囲確認調査の計画を行い、各々の遺跡の範囲と性格を詳細に把握することに努めた。なお、調査対象となった遺跡については『伊礼原B遺跡』に報告したとおりである<sup>(註2)</sup>。平安山原B遺跡は平成14・15年度の調査となった。

範囲確認調査を実施した当時は未だ米軍基地として機能していたため、基地内への立ち入り及び発掘調査の許可を得る必要があることから対象年度毎に申請の手続きを行い、許可が得られた後に調査を実施した。平安山原B遺跡の調査期間は平成14年7月26日から平成15年3月26日までである。

今年度は平安山原B遺跡と小堀原遺跡・北谷城の資料整理を行い、報告する。

### <参考文献>

- 註1. 中村愿・東門研治ほか『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－ 北谷町文化財調査報告書第23集 北谷町教育委員会 2005年3月
- 註2. 中村愿・松原哲志ほか『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業（平成10～14年度）－ 北谷町文化財調査報告書第27集 北谷町教育委員会 2008年3月

## 第2節 調査体制

### 1. 範囲確認調査の組織

本補助事業による調査体制は以下のとおりである。

事業主体	北谷町教育委員会	
	教育長	瑞慶覧 朝 宏 (平成14～19年度)
	同	比 嘉 秀 夫 (平成20年度)
事業総括	教育次長	伊 礼 喜 正 (平成14～16年度)
	同	阿波根 進 (平成17・18年度)
	同	謝 花 良 継 (平成19・20年度)
	文化課長	嘉手納 昇 (平成14年度)
	社会教育課長	幸 地 清 (平成15・16年度)
	同	大 城 操 (平成17～20年度)

調査総括	文化係長	中 村 愿 (平成14～19年度)
	同	嘉陽田 朝 栄 (平成19・20年度)
調査員	主任主事	東 門 研 治 (平成14～20年度)
	同	山 城 安 生 (平成20年度)
	主 事	松 原 哲 志 (平成18～20年度)
調査補助員	嘱 託	松 原 哲 志 (平成14・15年度)
	臨 時	比 嘉 光 彦 (平成14年度)
		仲 田 浩 二 (平成15年度)

## 調査作業員

(平成14・15年度)

安里 盛保	天久 和彦	平良 宗二	高江洲安廣	仲間 勝
牧志 宗保	仲村 幸有	根間 平雄	松本 文喜	山川 守真
屋良 朝正	吉田 昌博	(以上北谷町シルバー人材センター)		

## 資料整理員

(平成19年度)

嘱 託	上間真寿美	佐久間クリエ	島袋 春美	豊里 初江	照屋 元子
	西原 美草	東 順子	山城小百合		
臨 時	新川美和子	池原恵梨香	稲嶺恵梨奈	大城 光	大城 梨乃
	曾木 菊枝	仲里 知子	仲村渠恵子	仲村渠春樹	比嘉 美絵

(平成20年度)

嘱 託	上地千賀子	上間真寿美	佐久間クリエ	島袋 春美	曾木 菊枝
	豊里 初江	照屋 元子	西原 美草	東 順子	山城小百合
臨 時	稲嶺恵梨奈	大城 光	渡口沙里恵	仲村渠恵子	

## 調査協力及び助言

ポール 宜野座	(在沖海兵隊基地施設部不動産事務所長)
クリス・ホワイト	(在沖海兵隊基地環境保全課 自然・文化財保護官)
平 敷 兼 直	(在沖海兵隊基地環境保全課 自然・文化財保護係)
エリック・ウィリアムズ	(在沖海兵隊基地環境保全課 考古学専門員)
喜友名 朝 重	(在沖海兵隊基地施設営繕部部長)
盛 本 勲	(沖縄県教育委員会)

## 第二章 遺跡の位置と環境

### 1. 位置

平安山原B遺跡の在する北谷町は沖縄本島中部に位置し、県庁所在地の那覇市から約20km北東に所在している。町の総面積は13.62km<sup>2</sup>で、南北約6 km、東西約4.3kmと長方形である。北は嘉手納町、東は島のほぼ中央を境として沖縄市と北中城村、南は宜野湾市に接している。西は東シナ海に面している<sup>(註1)</sup>。町西部の海岸低地には、南部の那覇市と北部の名護市を結ぶ主要幹線道路である国道58号線が通っている。また北谷町は県道23・24・130号線によって中部の沖縄市とも結ばれており、重要な交通の要所となっている<sup>(註2)</sup>。人口約27,000人あまりで第三次産業を主とした町である。北谷町役場の緯度経度はそれぞれ、北緯26度19分12秒、東経127度45分49秒である<sup>(註3)</sup>。

本遺跡は現在の北谷町役場の北西側に位置する。遺跡の周辺には木製の櫛や箆の出土で著名な低湿地の伊礼原遺跡（2007）や伊礼原B・D・E遺跡（2008）が存在している。戦時中の米軍航空写真を見ると、本遺跡には、丘陵地から水田が広がっていたことがわかる<sup>(註4)</sup>。

### 2. 地理的環境

北谷町の地形は、町西部の東シナ海に沿った海岸低地と標高40～120mのなだらかな台地、丘陵の発達する東部から構成されている。周辺市町村との行政境界となっているこれらの台地、丘陵面は西の海岸低地に向かって傾斜している。台地と海岸低地の接する地域では、所々那覇石灰岩（琉球石灰岩）の露頭のみられる急崖が形成されている。また町の南部を東西に流れる白比川上流域の玉上地区では浸食崖の発達した開析谷がみられる。町内に分布する地質は、新第三系の島尻累帯に属している那覇層群の砂質シルト層、シルト質砂層、砂層、那覇石灰岩、海浜堆積物からなっている。これらの地質のうち、砂質シルト層とシルト質砂層は白比川上流の台地基部にみられる。砂層は桑江、吉原以北の台地、丘陵の所々に分布している。これらの地層を基盤として、台地、丘陵の大部分は那覇石灰岩に覆われている<sup>(註5)</sup>。東側は標高100mの石灰岩台地で沖縄市に隣接し、北側は国頭礫層と隆起石灰岩が露胎する標高10～20mの微高地が続き、嘉手納町に至る。西側の海岸線は海生沖積土層からなる低地である。東側の沖縄市や南側の宜野湾市側の海岸段丘は隆起石灰岩台地であることから保水性が悪く、段丘下には所々に湧水を排出し、特に沖積世平野部の近くでは多く、戦前まではそれを源とする水田が広がり、北谷町から宜野湾市までの沖積世平野部に連続して存在していた。特に北谷町南側に位置する字北谷地域（現在のキャンプ・ズケラン）一帯は戦前までは沖縄本島の三大美田の一つされている北谷ターブクァ（北谷田圃）と呼ばれる田園風景が広がっており、往時には風光明媚な景色が見られたであろう。

### 3. 歴史的環境

海岸段丘の縁辺部や湧水近くには遺跡が点在（第2図）し、特に宜野湾市に所在する米海軍普天間飛行場の丘陵上部の西側縁辺部（オープン・サイト）や麓は顕著で、数十箇所の遺跡が集中している<sup>(註6)</sup>。北谷町域では北側の古い石灰岩の残りといわれる円錐形のカルスト残丘が点在し、その一つである砂辺集落背後の丘陵部一帯には遺跡（砂辺貝塚・クマヤー洞穴遺跡・サーク原遺跡・サー

ク原貝塚・カーシーノボントン遺物散布地・浜川御願遺跡)が集中し、南側では北谷城の丘陵部一帯の遺跡(北谷城・北谷城第7遺跡・玉代勢原遺跡・長老山遺跡)がそれらにあたり知られている。

キャンプ桑江のある平坦部は略北西方向から南東部方向への一直線上を境として北東部は標高約30mの海岸段丘の丘陵部が連なり、南西部は標高10m前後の小段丘を介して沖積世平野部の麓に至る。ここは桑江断層<sup>(註7)</sup>といわれ湧水の所在するラインでもある。旧キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で段丘の麓から沖積世平野部にかけての一帯に、北側から千原遺跡・平安山原A遺跡・平安山原B遺跡・平安山原C遺跡・伊礼原遺跡・伊礼原D遺跡・伊礼原E遺跡・小堀原遺跡・後兼久原遺跡の遺跡が確認できた。

この沖積世平野部は戦後の米軍によって削平や客土が施され、当地域の現状は一見すると標高数メートルの低平な平野部であると見受けられるが、石灰岩の岩塊が所々に露頭がみられる。試掘調査の成果や戦前の地形図、戦中の米軍航空写真(図版1)などから丘陵部の形状や河川を追って旧地形を復元すると石灰岩微高地や河川の流路が確認でき、それらに伴う海岸線の形成過程である砂丘の発達上部に戦前の集落の配置も位置づけられ、旧地勢の様相の一旦が垣間見ることができ<sup>(註8)</sup>。先史時代の遺跡ではクマヤー洞穴を先駆けとして伊礼原遺跡などがある。クマヤー洞穴は貝塚時代前期前半に位置づけられる条痕文土器からグスク時代に至る遺物が確認されており、特に宇佐浜式期の改装人骨が多数検出されたことは注目される。伊礼原遺跡は平安山原B遺跡南東方の沖積低地に位置し、2002年度の発掘調査では沖縄諸島で最古の土器とされるヤブチ式・東原式土器などの爪形文土器が出土し、次いで曾畑式土器、室川下層式土器、面縄前庭式土器、カヤウチバンタ式土器、宇佐浜式土器、弥生式土器、滑石製石鍋、カムイヤキ、玉縁口縁白磁、青磁、華南三彩、天目茶碗、瑠璃釉などグスク時代の遺物が出土している。沖縄諸島の先史時代編年体系が網羅できるほどの各型式が多く存在しており、生活の場として息の長い遺跡であったことがうかがわれる。また、近接の伊礼原D遺跡からも、貝塚時代後期～グスク時代、近世、近代までの遺構・遺物が出土しており、本遺跡と様相が似ていると考えられる。

平成13年のキャンプ桑江北側地区返還による区画整理事業の緊急発掘調査によって、記録保存の対象となった。

## 《引用・参考文献》

註1. 北谷町役場『北谷町の植生 -みどり豊かなまちづくりのために-』1986年

註2. 北谷町役場『北谷町勢要覧』1982年

註3. 国土地理院 <http://watchizu.gsi.go.jp/mapsearch.html>

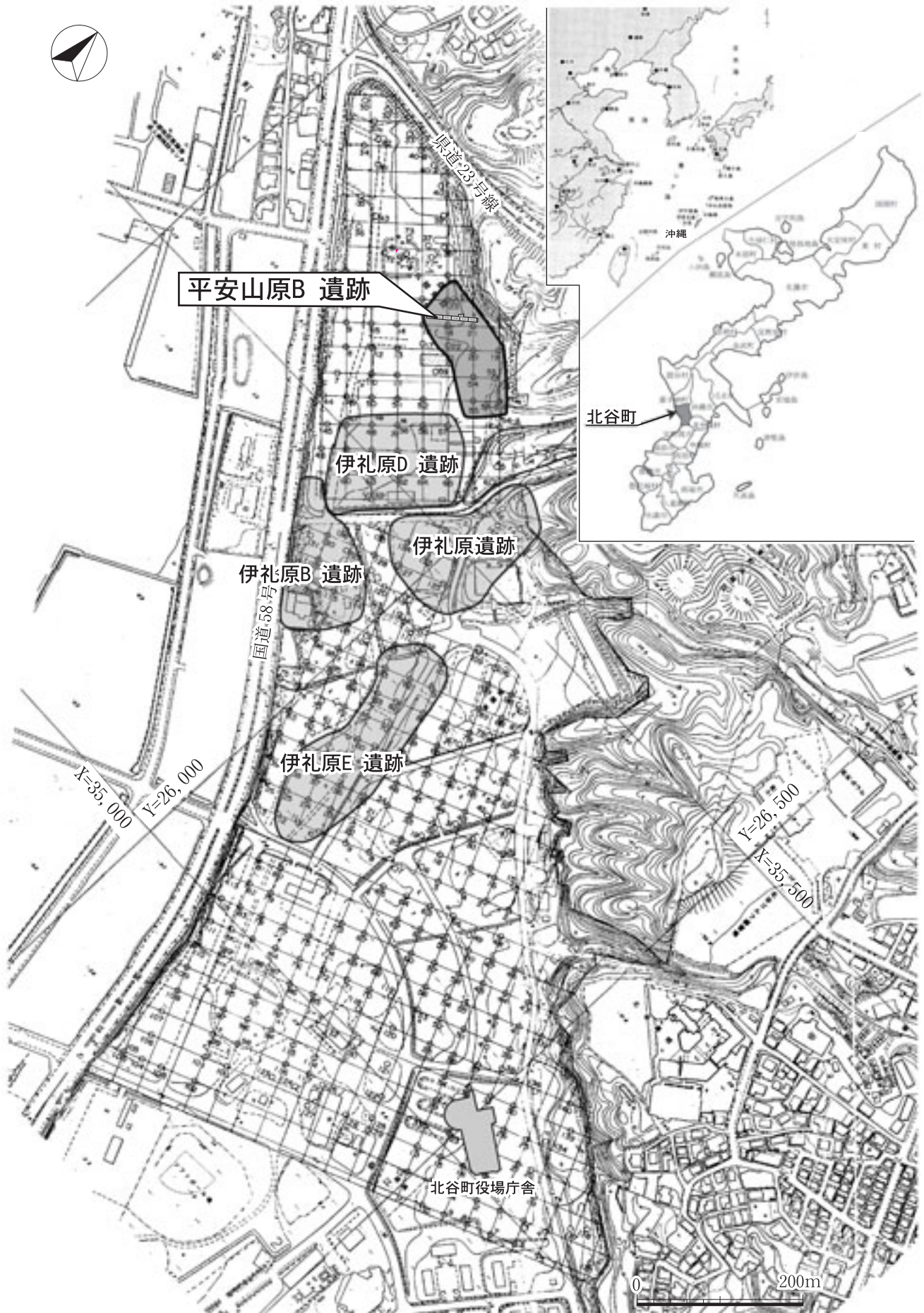
註4. 北谷町教育委員会『北谷町の地名 -戦前の北谷の姿-』2006年

註5. 地域創造研究所『コザ市総合開発計画調査報告書』1973年

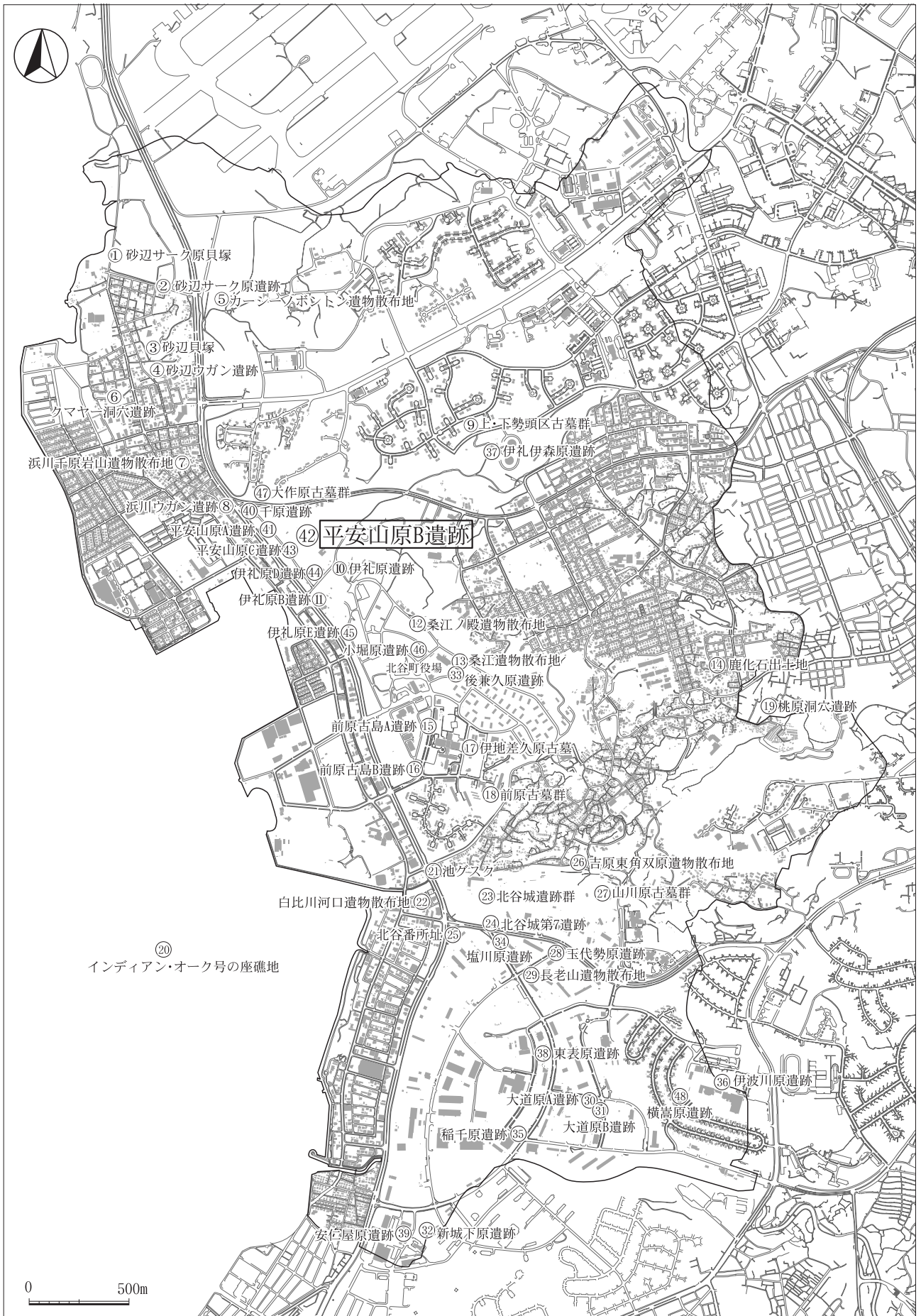
註6. 宜野湾市教育委員会『土に埋もれた宜野湾』1989年

註7. 松田順一郎「伊礼原遺跡砂丘区の堆積物・埋没地形と中央区・南区にみられた古地震痕跡」『伊礼原遺跡-伊礼原B遺跡ほか発掘調査-』北谷町教育委員会 2007年

註8. 北谷町教育委員会『キャンプ桑江返還に伴う試掘調査-伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業-』2005年



第1図 平安山原B遺跡の位置



第2図 北谷町の遺跡



表1 北谷町遺跡一覧

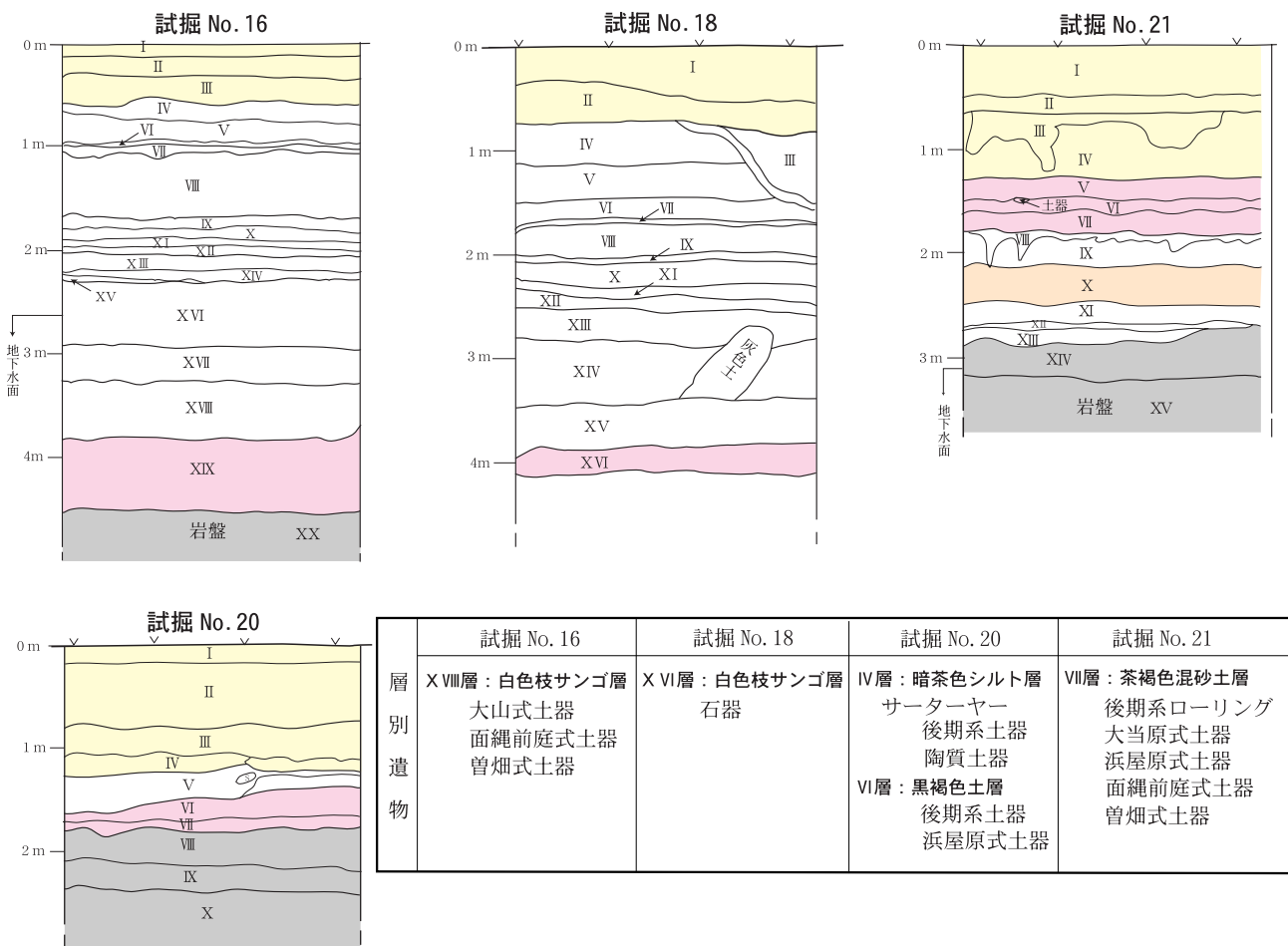
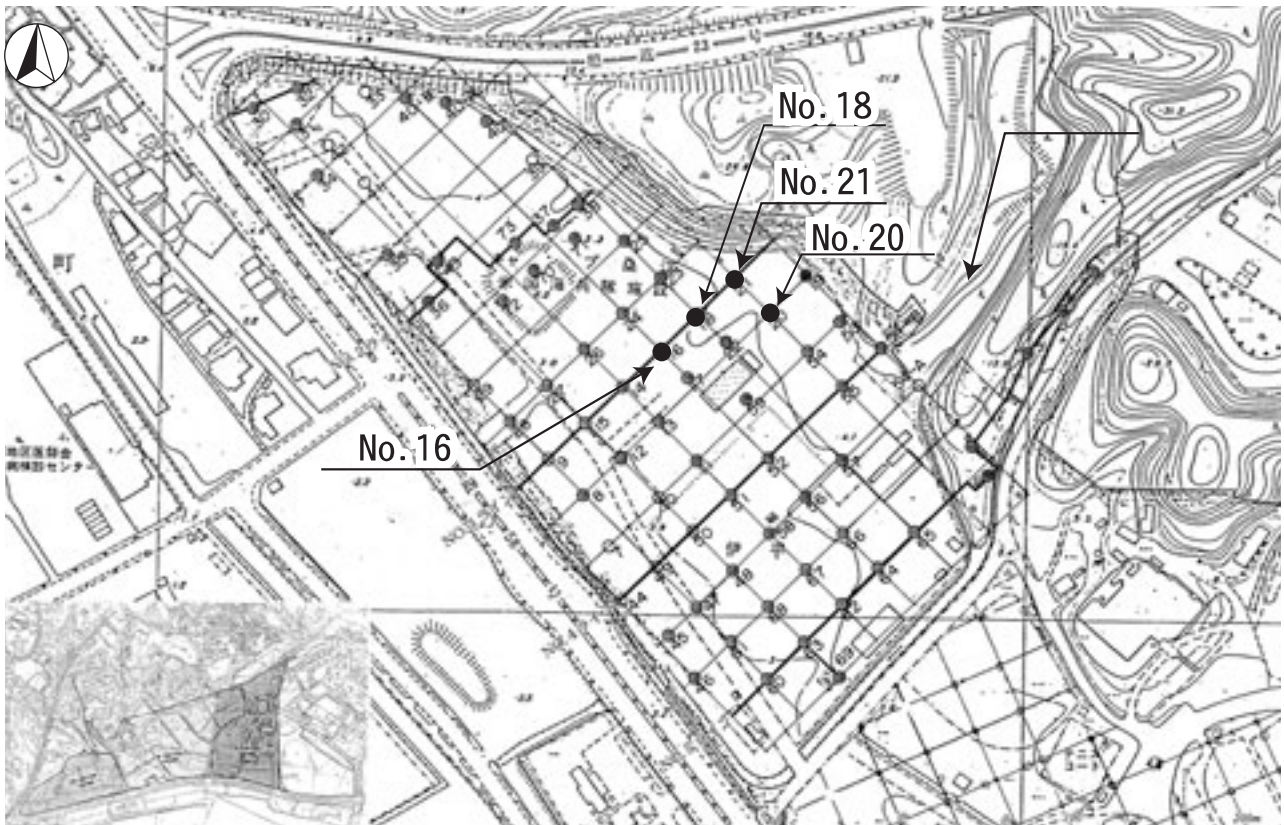
	遺跡名	時期	所在地
1	砂辺サーク原貝塚	前期	字砂辺差久原
2	砂辺サーク原遺跡	後期～近世	字砂辺加志原
3	砂辺貝塚	後期～グスク	字砂辺村内原
4	砂辺ウガン遺跡	後期～グスク	字砂辺加志原
5	カーシーノボントン遺物散布地	グスク	字砂辺加志原
6	クマヤー洞穴遺跡	前期～グスク	字砂辺村内原
7	浜川千原岩山遺物散布地	後期	字浜川浜川千原
8	浜川ウガン遺跡	後期	字浜川千原
9	上・下勢頭区古墓群	近世	字上勢頭平安山伊森原・伊礼伊森原・下勢頭平安山下勢頭原
10	伊礼原遺跡	前期～近世	字伊平伊礼原
11	伊礼原B遺跡	近世・近代	字伊平伊礼原
12	桑江ノ殿遺物散布地	後期～近世	字桑江小堀原
13	桑江遺物散布地	後期	字桑江後兼久原
14	鹿化石出土地	旧石器	字吉原栄口原・桃原
15	前原古島A遺跡	近世	字桑江桑江原
16	前原古島B遺跡	近世	字桑江桑江原・前原
17	伊地差久原古墓	近世	字桑江伊地差久原
18	前原古墓群	近世	字桑江前原
19	桃原洞穴遺跡	旧石器	字吉原東新川原
20	インディアン・オーク号の座礁地	近世	字北谷地先
21	池グスク	後期	字吉原東宇地原・西宇地原
22	白比川河口遺物散布地	グスク	字北谷西表原
23	北谷城遺跡群	後期～近世	字大村城原
24	北谷城第7遺跡	後期～近世	字大村城原
25	北谷番所址	後期～近世	字北谷北谷原
26	吉原東角双原遺物散布地	グスク	字吉原東角双原・西角双原
27	山川原古墓群	近世	字大村山川原
28	玉代勢原遺跡	後期～近世	字大村玉代勢原
29	長老山遺物散布地	後期～グスク	字大村玉代勢原
30	大道原A遺跡	後期	字北谷大道原
31	大道原B遺跡	後期	字北谷大道原
32	新城下原遺跡		
33	後兼久原遺跡	グスク～近世	字桑江小字後兼久原、字桑江小字小堀原
34	塩川原遺跡	後期	字北谷塩川原
35	稲千原遺跡	前期	字北前稲千原
36	伊波川原遺跡		字北前横嵩原・伊波川原
37	伊礼伊森原遺跡	後期	字上勢頭伊礼伊森原
38	東表原遺跡		字北谷東表原
39	安仁屋原遺跡		字北前安仁屋原
40	千原遺跡	後期	字伊平千原
41	平安山原A遺跡	後期	字伊平平安山原
42	平安山原B遺跡	後期～近世	字伊平平安山原
43	平安山原C遺跡		字伊平平安山原
44	伊礼原D遺跡	後期～近世	字伊平伊礼原
45	伊礼原E遺跡	後期～近世	字伊平小字伊礼原
46	小堀原遺跡	後期	字桑江小堀原
47	大作原古墓群	前期～近世	
48	横嵩原遺跡	後期	字北前横嵩原

北谷町文化財調査報告書 第28集 『伊礼原D遺跡』(2008)の表1 北谷町遺跡一覧を改変

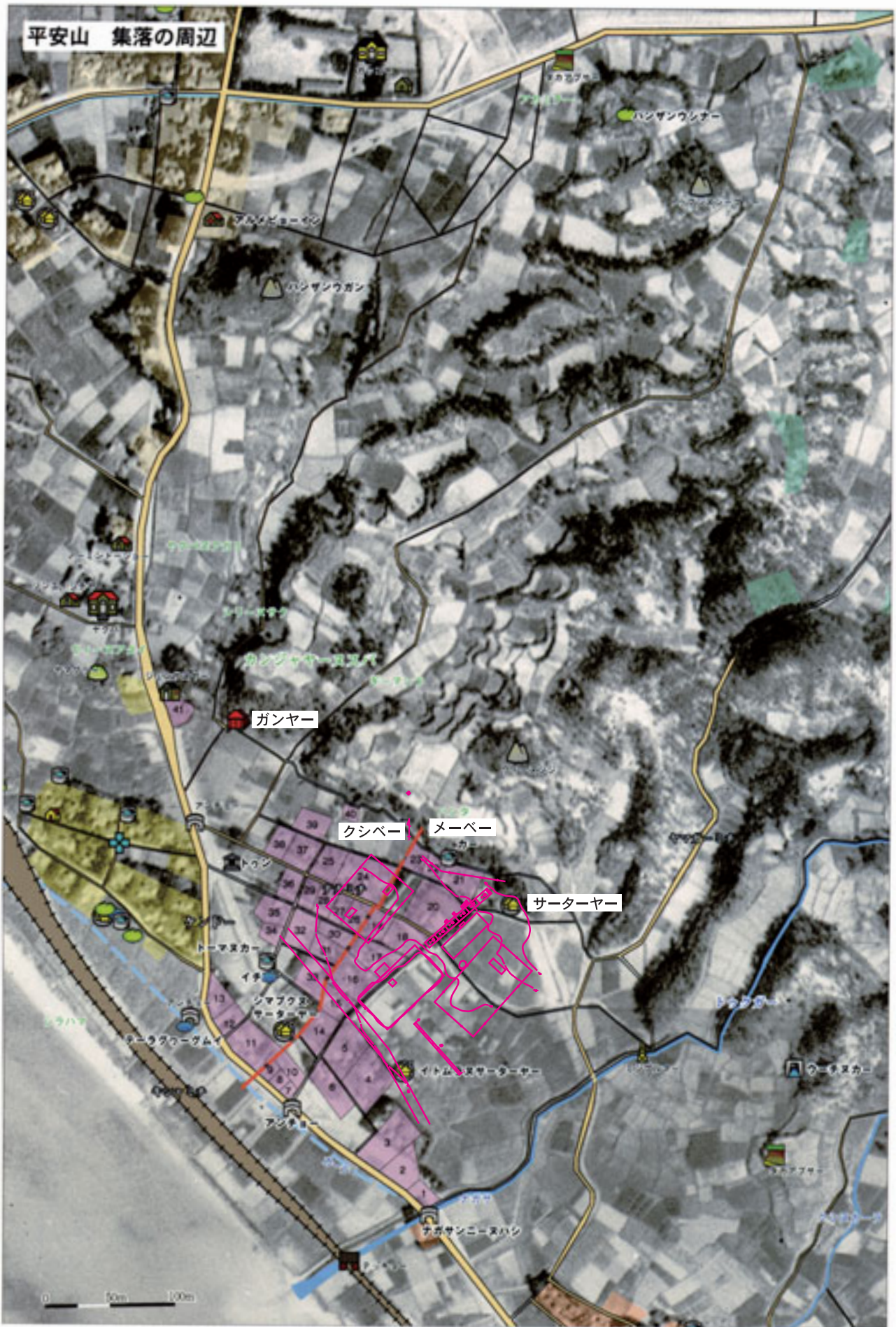
## 《参考文献》

- ①中村愿・田場勝也ほか 『北谷町の遺跡－詳細分布調査報告書－』北谷町文化財調査報告書 第14集 北谷町教育委員会 1994年  
 ②中村愿・東門研治・島袋春美 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年3月  
 ③中村愿・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか 『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡「キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業(平成10～14年度)』北谷町文化財調査報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年3月

\*番号は位置図に付随



第3図 試掘ポイント『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』(2005)



図版 1 平安山集落の周辺 (1945年2月28日撮影)『北谷町の地名』(2006)

## 第三章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

範囲確認調査は、第一章でも述べたとおり、試掘調査<sup>(註1)</sup>の成果を踏まえて来る区画整理事業及び諸開発事業等の調整が円滑に行われるよう詳細に遺跡の性格や範囲を把握するために実施された。

試掘調査では近世のサーターヤー（砂糖小屋）の窯跡と近世及び弥生時代相当期の包含層が確認された。その範囲が南北で約70m、東西に約45mに及んでいると想定された。そこで、範囲確認調査は米軍基地施設等に影響がない区域を選定し、丘陵側から海岸側に向かって、つまり、東西方向に5m×70mのトレンチを設け（第4図）、遺跡の立地及び性格、範囲を把握することとした。

グリッド設定は、東西を算用数字（13～19）、南北をアルファベット（C）で表し、5m×10mを単位とする枠をトレンチに被せ設定した。

調査は、バックホウによる表土掘削を行い、近世の遺構の確認を行った。これは、戦前当該地域の北西側に平安山集落が存在していたためである。米軍基地接收に伴い造成されているため、遺構の残存状況の確認とその規模等を把握し、本調査の対象に含めるかどうかの判断にするために行った。その後は、手掘りによる調査で、近世及び弥生時代相当期の包含層掘削を行うこととした。その際、試掘で確認できなかった遺構の有無と種類、堆積状況、遺物密度などを把握することを目的に行った。

今回の調査では、戦前まで使用していたと思われる井戸が確認された。保存状況は良いほうで、形状及び規模などの情報が得られた。周辺からは近・現代磁器や沖縄産陶器が出土し、取り上げを行った。この遺構の存在は、試掘で確認されたサーターヤーの位置と方向から、戦前の集落跡の配置が確認できる貴重なものであった。

近世の堆積を掘り下げていくとC-18・17グリッドより大小の柱穴が検出された。ほぼ丘陵側に位置していることがわかった。柱穴は高床式建物址と想定されるもので、2棟重複した状態であった。特徴としては直径60～70cm大の柱穴プランと40cm大の柱穴プランに分けられ、前後関係が示される図化を行った。出土遺物は僅少であった。

弥生時代相当期の包含層からは、直径80cm、深さ約1mの落ち込みが確認されたが、詳細な性格は不明である。中からはやや大きめのシャコガイやクモガイなどと土器が含まれていた。他に遺構は確認されなかった。出土遺物はC-19から18グリッドにかけて土器及び貝殻が出土した。C-19は岩盤や岩の部分やC-18に遺物は集中していることが判明した。また、C-19では縄文晩期の土器も含まれていることが判明し、丘陵部及び周辺に本体が存在する可能性がある。その後、弥生時代相当期以前の包含層の有無を確認するため、下層の砂層を掘下げたところC-16から西側で縄文後・晩期土器が数点確認されている。本調査では縄文後・晩期も視野に入れ調査にあたりたい。また、C-19の岩盤下は海砂が堆積し西側に広がり、C-13の西壁下でも海砂層は確認された。その間では縄文期の遺物は出土したものの遺構は不明であった。壁面実測・写真撮影を行い、C-13でバックホウによる下層調査を行い、その後埋め戻しを行って調査を終了した。

#### <参考文献>

註1：中村愿・東門研治ほか『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－  
北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年

## 第2節 調査の経過

平安山原B遺跡は平成14年7月から平成15年12月まで調査を行った。第1節でも述べたように、設定場所は米軍施設に影響のない場所を設定し、尚且つ、遺跡の立地を把握するため丘陵側（東）から海岸方向（西）に幅5m、長さ70mのトレンチを設定した。トレンチは東側から10m間隔にグリッドを設けC-18~13とした。しかし、C-18の東側（丘陵）に岩盤が確認され、立地及び堆積状況を把握するために約1m×5m拡張しC-19とした。

当該地域は米軍による埋土があるため、先ず、戦前の集落まで重機掘削を行った。しかし、本トレンチ内では米軍による攪乱もあり遺構は確認されなかった。しかし、C-17・16の北壁に切り石が略水平に設置されているのが確認できたことから、遺構を把握するため北側へ拡張した。遺構は戦前まで使用していたと思われる井戸であることが判明した。井戸は、井戸へ上がる階段及び溜池が存在したが、東西南北の一部を米軍の基地建設の際に破壊されたと思われる。しかし、現存する範囲からおおよその規模は確認できる。井戸内は米軍による廃棄物が井戸口の上面近くまで及んでおり、その除去作業を行った。約1m下より小銃弾などが見つかったため、危険を伴うと判断し除去作業を中止した。井戸内の断面図以外の図面作成を行った。周辺からの出土遺物は現代磁器及び沖縄産陶器類であった。

トレンチ内は手掘りによる堀下げを行った。C-19からC-17は出土遺物が多く出土した。特にC-18西側からC-17にかけて集中している。出土遺物の時期は弥生時代相当期であった。また、丘陵側のC-19は岩が岩盤の状況下、転石かを確認していたところ、弥生時代相当期に混じって縄文晩期の土器も見られた。遺構は、4本柱の高床式建物址と想定されるもので、2棟重複した状態であった。特徴としては直径60~70cm大の柱穴プランと40cm大の柱穴プランに分けられ、前後関係が示されるものであった。当初、グスク時代の遺構と思われたが、改めて検出状況及び出土遺物を見ても近世の可能性も出てきた。本遺構の詳細は今後の本調査に委ねたい。本遺構を掘下げていくと、黄褐色粘質土層より直径80cm、深さ約1mの落込みがC-18の畦にかかって検出され、畦の西壁で断面が観察できるよう調査を行った。遺構内からは貝や弥生時代相当期の土器が出土し、当該期に比定されるものと解した。

C-17からC-16にかけては、上述した井戸の階段と広場が広がっていた可能性がある。本遺構の造成は弥生時代相当期の層まで達している。ただ、弥生時代相当期の層の堆積は本グリッドまでのようで、北側から南側へ緩やかな傾斜していく様相を持っていることから、トレンチ南側に広がっているであろう。出土遺物も本地域までの広がりである。下層は海砂の白砂層で、C-17の西側では本層上面からジュゴンの頭骨が検出された。図面作成後、砂ごと取上げを行った。

C-16からC-13では戦前の地層を掘下げていくと、カワニナを含む地層が見られる。水田の可能性も考えられる。グスク期又は近世の時期と思われる。遺構や遺物は見られない。下層は海砂の白砂層が続く。遺構は見られず、遺物は弥生時代相当期の土器や縄文時代後・晩期の土器が混在して出土する。断面図作成及び写真撮影を行い終了した。

この様に、本トレンチの調査では、丘陵側（東側）と海側（西側）とで堆積が異なっていることが解り、丘陵側で確認された遺構はトレンチの南北に拡がると思われる。海側は戦前とカワニナを含む地層の堆積がどこまで及ぶのか、また、その性格については把握できなかった。

## 調査日誌

(平成14年)

- 7月26日 ・ユンボによる掘削作業。約35m（全長60m）掘り進む。
- 7月29日 ・トレンチの掘削作業（04）、4×4m×2本の掘削（07）（04）の2台、磁気探査
- 7月30日 ・エレベーションの設置作業。
- 8月1日 ・グリッド設定。壁面清掃。
- 8月2日 ・トレンチ東側、黄色土層及び黒褐色土層の掘り下げ。分層。  
・グリッド設定。（簡略図有り）
- 8月5日 ・南北壁面の清掃、写真撮影。
- 8月6日 ・トレンチ東側、礫除去作業。平面清掃。
- 8月7日 ・トレンチ内グリッド設定。平面清掃。写真撮影。
- 8月8日 ・pitのプランをおさえ、写真撮影。プランや平面図作成（1/20）、壁面清掃。  
・平面清掃。
- 8月9日 ・トレンチ北井戸の露出作業、井戸内の掘り下げ。
- 8月12日～14日 ・トレンチ北井戸の露出作業、井戸内の掘り下げ。
- 8月15日～16日 ・井戸周辺掘り下げ。C-17・18 柱穴半裁作業。
- 8月19日 ・井戸周辺掘り下げ。C-17・18 柱穴半裁作業。
- 8月20日 ・C-17・18 柱穴半裁作業。C-14・15 南北壁面清掃。
- 8月21日 ・C-17・18 柱穴半裁作業。C-13 北壁・平面清掃。
- 8月26日 ・C-13・14 壁面清掃。柱穴半裁作業。
- 8月27日～28日 ・C-13・14 壁面清掃。C-18・17 柱穴内清掃。
- 8月28日～29日 ・C-17・18 柱穴断面写真撮影。柱穴断面分層。C-13・14 壁面清掃。
- 9月2日 ・C-13 南壁の清掃。柱穴の断面実測。
- 9月3日 ・柱穴の半裁平面実測。断面実測。完掘作業。
- 9月9日 ・C-19～17 壁面、平面の清掃。流れ込んだ土砂の除去。
- 9月10日 ・C-17・18 壁面、平面清掃。C-19 南壁の分層。
- 9月11日 ・C-17・18 柱穴の完掘作業。C-19北 東隅の客土除去。約1.5×1mの範囲
- 9月12日 ・C-17・18 表面削り。柱穴の完掘実測。写真撮影。分層。
- 9月13日 ・壁面の割付け作業。C-17・18 表面削り。
- 9月17日 ・C-17 南北壁面清掃。
- 9月18日 ・C-13～15 平面、壁面清掃。
- 9月19日 ・C-15・16 の壁面清掃。C-17～16 分層。
- 9月20日 ・C-17・18 壁面分層。C-16・15 壁面、平面清掃。
- 9月24日 ・C-16 床面清掃。C-15 壁面清掃。C-18 北壁の分層作業。
- 9月25日 ・C-15 南北両壁面の清掃、南壁の分層。C-19 東壁及び、C-19～17 南壁清掃、写

真撮影。柱穴№.6、7の完掘作業。

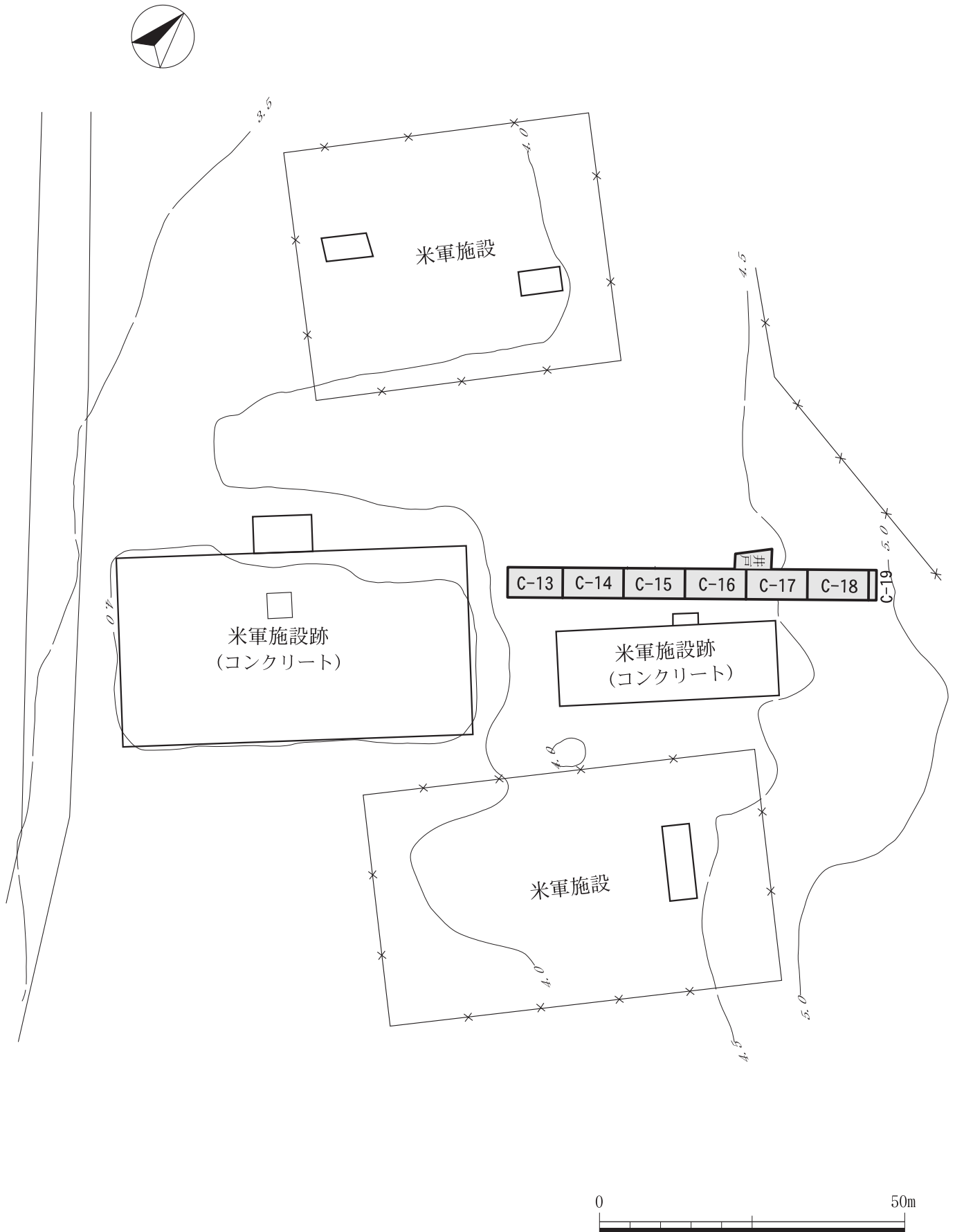
- 9月26日
  - ・C-14 カワニナ層の掘削(15~20cm程度)。pit №.19の柱穴内土と壁面の照合作業。
  - ・完掘後、全体状況の写真撮影、平面実測。C-19~18 南北壁面の割り付け作業。
- 9月27日
  - ・C-19~18 南壁と北壁の実測。C-14 カワニナ層の掘削。
- 9月30日
  - ・C-14 カワニナ層の掘削。C-17 北壁の分層作業。C-18 北壁の実測。
- 10月1日
  - ・C-14 カワニナ層の掘削。C-17 北壁面の分層。
- 10月2日
  - ・C-13、15 カワニナ層の掘削。C-19 東壁の壁面実測。
  - ・C-16 北壁の分層作業。
- 10月3日
  - ・C-13、15 カワニナ層の掘削。C-13と14の間に40cm×40cm程度のサブトレンチを設置。C-19~13まで南壁の分層。
- 10月4日
  - ・C-18~13 南壁の清掃、写真撮影。割り付け。
  - ・C-13 西壁の清掃後、写真撮影。カワニナ層の掘削。
- 10月7日
  - ・C-15 カワニナ層の掘削。北側の茶褐色部分で土器片が2点出土した。
- 10月9日
  - ・トレンチ北側井戸の西側に敷石の検出作業。
- 10月11日
  - ・C-17 南壁の実測。C-15 カワニナ層の掘削。C-16 北壁の分層。
- 10月15日
  - ・水抜き作業。C-16 南壁の実測。C-15 カワニナ層の掘削。
- 10月16日
  - ・C-16・15 南壁の実測。トレンチ北井戸を西側へ拡張。
  - ・C-15 カワニナ層の掘削。
- 10月21日
  - ・トレンチ北側の井戸、西側に拡張。C-15 カワニナ層の掘削
  - ・C-16~14 南壁の実測。C-15 北壁の分層。
- 10月22日
  - ・C-16 カワニナ層の掘削。C-13 南壁及び西壁の実測。
  - ・C-14~13 北壁の分層。井戸西側へ拡張、範囲確認後清掃、写真撮影。
- 10月23日
  - ・北壁の分層作業、清掃。C-16 カワニナ層の掘削。
  - ・井戸北側 石の検出。
- 10月28日
  - ・C-17~13 北壁の清掃、写真撮影、割り付け。
  - ・C-18・17 黒褐色土層掘り下げ、くびれ平底片出土。
- 10月29日
  - ・C-18 黒褐色土層の掘り下げ。
  - ・C-17 マンガン直上層(仮)の剥ぎ取り、北壁の実測。
- 10月31日
  - ・C-18 黒褐色土層の掘り下げ。C-16 北壁の実測。
- 11月1日
  - ・C-18 黒褐色土層の掘り下げ。C-16 北壁の実測。
- 11月5日
  - ・C-18 黒褐色土層の掘り下げ。C-18・17 畦掘り下げ、平面実測(1/20)
  - ・C-17 マンガン直上層の剥ぎ取り。C-16 北壁の実測。
- 11月6日
  - ・C-18 土器、石斧の写真撮影。黒褐色土層の掘り下げ。
  - ・C-17 黒褐色から貝混じりへ西へ掘り下げ。C-15~13 北壁の実測。
  - ・C-17~16 南壁遺物撮影、取り上げ。
- 11月7日
  - ・C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17 黒褐色混貝土層掘り下げ。
  - ・C-13 北壁の実測。
- 11月8日
  - ・C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17(東) 黒褐色粘質土層を掘り下げ、橙褐色粘質土層の露出。平安山原地区周辺の平面図作成(1/300)

- 11月11日～12日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17 黒褐色粘質土層と黒褐色混貝土層の掘り下げ。遺跡周辺の(1/300)地形測量作業。
- 11月13日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-18 橙褐色粘質土層 平面清掃、写真撮影。
- 11月14日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17 橙褐色粘質土層上面の土器片等の平面実測。C-18～17 柱穴の図面に追加実測。
- 11月15日 ・ 井戸周辺 清掃後、写真撮影、測量。C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ、平面実測。C-17平面実測。C-19 橙褐色粘質土層の掘り下げ。
- 11月18日 ・ C-19・C-18 橙褐色粘質土の掘り下げ。井戸周辺測量。  
・ 橙褐色粘質土の盛土から遺物探し。
- 11月20日 ・ C-17～19の平面清掃、土器等の写真撮影。
- 11月21日 ・ C-17・18 柱穴の写真撮影及び実測、半裁作業。  
・ 橙褐色粘質土層上面の土器の取り上げ。
- 11月22日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の土器片実測。
- 11月25日 ・ C-18 盛土より遺物探し。橙褐色粘質土の掘り下げ。  
・ C-17 柱穴の断面実測と半裁作業。
- 11月26日 ・ C-18・17の平面清掃。柱穴完掘、平面実測。
- 11月27日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-16 黄褐色のカワナ層の掘り下げ。  
・ C-17 黒褐色混砂層 ポイント測量。
- 11月27日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17 灰褐色粘質土の掘り込みの平面実測、写真撮影。C-16 茶褐色粘質土の掘り下げ。
- 11月29日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17 砂層より獣骨検出。灰褐色粘質土の掘り込みの四分割掘り下げ。C-16 茶褐色粘質土層の掘り下げ。
- 12月2日～3日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。C-17 灰褐色粘質土の掘り込み四分割作業。獣骨の写真撮影。黄褐色混貝粘質砂層出土の遺物平面実測。
- 12月4日～6日 ・ C-18 橙褐色粘質土の掘り下げ。C-17 黄褐色混貝粘質砂層 土器・貝の取り上げ。  
・ 灰褐色粘質土の写真撮影、掘り下げ。
- 12月9日～10日 ・ C-18 橙褐色粘質土の掘り下げ。C-17黄褐色混貝粘質砂層の貝取り上げ。  
・ 灰褐色粘質土の掘り込み部完掘。平面実測、写真撮影。茶褐色粘質土の掘り取り。
- 12月11日～12日 ・ C-18 橙褐色粘質土の掘り下げ、土器の平面実測。C-17 黄褐色混貝粘質砂層 土器の平面実測と取り上げ。石器写真撮影。
- 12月13日 ・ C-18 橙褐色粘質土の掘り下げ、土器の平面実測。
- 12月16日～17日 ・ C-18 橙褐色粘質土の掘り下げと、土器の平面実測、遺物の写真撮影。  
・ C-17 茶褐色粘質土 遺物の写真撮影。黄褐色混貝粘質砂層の貝取り上げ。
- 12月18日～19日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ。
- 12月24日～26日 ・ C-18 橙褐色粘質土層の掘り下げ、平面清掃、遺物実測、写真撮影。
- (平成15年)
- 1月8日 ・ C-19 橙褐色粘質土層 土器実測。



- 1月9日
  - ・C-18 橙褐色粘質土層下掘り下げ。柱穴の半裁、完掘、写真撮影、実測。
  - ・C-18～17にかけて サブトレンチ a・c の設定、掘削。C-19の下場実測。
  - ・C-17 混貝粘質砂層の掘り下げ。
- 1月10日
  - ・C-18 黄褐色混貝粘質砂層 土器、貝等の実測。サブトレンチ b の設定及び掘削。
  - ・C-17 黄褐色混貝粘質砂層の掘り下げ。
- 1月14日
  - ・C-18 黄褐色混貝粘質砂層 遺物の平面実測。サブトレンチ b の所見書き及び写真撮影。C-17 黄褐色混貝粘質砂層の掘り下げ。サブトレンチ c の写真撮影。
- 1月15日
  - ・C-18 黄褐色混貝粘質砂層の遺物実測、写真撮影。土器数点接写。
  - ・C-17 黄褐色混貝粘質砂層 掘削、実測。ジュゴン露出作業、写真撮影。
- 1月16日
  - ・C-17 黄褐色混貝粘質砂層の掘り下げ、平面実測。ジュゴンの頭骨の露出作業、実測。
- 1月17日
  - ・C-18 黄褐色混貝粘質砂層の遺物取り上げ、掘削。
  - ・C-17 黄褐色混貝粘質砂層 遺物の実測。ジュゴンの頭骨の残存状況確認作業。
- 1月20日
  - ・C-18 黄褐色混貝粘質砂層 遺物の実測、写真撮影。
  - ・C-17 黄褐色混貝粘質砂層の写真撮影。バインダーを用い、ジュゴン頭骨の補強作業。
- 1月21日
  - ・C-18 黄褐色混貝粘質砂層 遺物実測と写真撮影。西側畦に沿って試掘穴を設ける。(1m幅) C-17 黄褐色混貝粘質砂層 遺物取り上げと掘削作業。ジュゴン頭骨の断面実測 (1/5) (S～S')。C-16サブトレンチ d・e の写真撮影と所見書き。
- 1月22日
  - ・C-18 赤褐色粗砂層の掘り下げ (畦沿いの試掘トレンチのみの掘削)。
  - ・C-17 黄褐色混貝粘質砂層の掘り下げ。ジュゴン頭骨の断面実測
- 1月23日
  - ・C-18 赤褐色粗砂層の掘り下げ、ポイント実測と写真撮影。
  - ・C-17 ジュゴン頭骨の正面図作成開始。マンガン直上層 遺物の実測と取り上げ。黒褐色粘質土層面 柱穴実測、写真撮影。
- 1月24日
  - ・C-18 赤褐色粗砂層→サンゴ層→白砂細砂層にかけて掘削作業。
  - ・C-17 柱穴の半裁。赤褐色粗砂層 遺物の実測取り上げ。
- 1月27日
  - ・C-18 枝サンゴ層の掘り下げ。土器出土、写真撮影。C-17 柱穴の半裁。
- 1月28日
  - ・C-18 畦沿いの試掘掘り下げ。
  - ・C-17 半裁後、柱穴の断面実測及び写真撮影。ジュゴン頭骨の正面図完成。
- 1月29日
  - ・C-17 柱穴の完掘作業。マンガン直上層の掘り下げ。ジュゴン頭骨の見通し図作成。
- 1月30日
  - ・C-18 畦沿いの試掘トレンチの壁面清掃。
  - ・C-17 柱穴の完掘作業。枝サンゴ直上層の掘り下げ。ジュゴン頭骨取上げ準備。
- 1月31日
  - ・C-18 割り付け及び南壁の実測。C-17 枝サンゴ直上層の掘り下げ。ジュゴンの頭骨取り上げ。柱穴完掘の平面実測。C-16 黒褐色カワニナ層の掘り下げ。
- 2月3日
  - ・C-18 畦沿いのトレンチ断面実測、写真撮影。C-17 枝サンゴ直上層の掘り下げ (黄白色砂層)。柱穴完掘写真撮影。C-16 黒褐色カワニナ層の掘り下げ。
- 2月4日
  - ・C-19 橙褐色粘質土層下を掘り下げ。C-18 畦沿いの試掘穴東壁の実測。
  - ・C-17 黄白色砂層 (マンガン直下層) の写真撮影及び柱穴の平面実測。黄白色砂層の掘り下げ。
- 2月5日
  - ・C-19 混砂礫層面まで掘り下げ。C-18 畦沿い試掘トレンチの落ち込み (?) 部の接写。C-17 柱穴実測、写真撮影。赤褐色粗砂層の掘り下げ。

- 2月6日 ・C-18 橙褐色粘質土層下の白砂を掘り下げ（主に東側）  
 ・C-17 赤褐色砂層の掘り下げ。サイトDGを用いて、井戸の実測図起こしを行う。
- 2月7日 ・C-18 赤褐色砂層の掘り下げ。  
 ・C-17 枝サンゴ層の遺物実測と写真撮影。枝サンゴ層の掘り下げ。
- 2月10日  
 ～12日 ・C-18 枝サンゴ層の掘り下げ。C-17 枝サンゴ層の遺物実測及び掘り下げ。
- 2月13日 ・C-19 東西南壁の分層、割り付け。C-18 赤褐色砂層から枝サンゴ層 遺物の実測。  
 南壁に沿ってトレンチ設置、掘り下げ。井戸の平面実測。
- 2月14日  
 ～17日 ・C-19 西壁断面実測。C-19～18境の畦取り壊し作業。  
 ・C-18 南壁沿い試掘トレンチ掘り下げ。井戸の実測。
- 2月18日 ・C-19 東壁の断面実測。C-18 畦上の遺物実測。南壁沿いのトレンチ清掃。
- 2月19日 ・C-19 畦の取り壊し。C-18 南壁沿いトレンチ写真撮影。  
 ・C-17 東壁の清掃。井戸の実測。
- 2月20日 ・C-19 畦取り壊し。C-18 北壁の清掃。C-17 枝サンゴ層の掘り下げ。
- 2月21日 ・C-19 畦取り壊し。C-17 東壁の写真撮影、実測。枝サンゴ層の掘り下げ。
- 2月25日 ・C-19 畦取り壊し、炭取り上げ。C-16 黒褐色カワニナ層の掘り下げ。
- 2月26日 ・C-19 畦取り壊し、土器等の写真撮影。C-19～18 南壁写真撮影。  
 C-17 東壁の断面実測。C-16 黒褐色カワニナ層の掘り下げ。
- 2月27日 ・C-19 畦内の遺物実測。C-18 北壁写真撮影。C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 2月28日 ・C-19～18 南北壁面の実測。C-16 カワニナ層の掘り下げ。井戸の実測。
- 3月3日 ・C-19～18 南壁の実測。C-16 カワニナ層の掘り下げ。井戸の実測。
- 3月5日 ・C-19～18 南壁の実測。C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 3月6日 ・C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 3月10日 ・C-17 枝サンゴ層下の白砂層 遺物をポイント実測。  
 ・C-16 黄褐色カワニナ層の掘り下げ。井戸の平面実測終了。
- 3月11日 ・C-18～17畦 掘り下げ。C-17 枝サンゴ層下の白砂層遺物取り上げ。  
 ・井戸の断面実測。
- 3月12日 ・C-18～17畦 掘り下げ。C-17 南壁に沿って幅1m程のトレンチ掘りを行う。
- 3月13日 ・C-17 南壁沿いトレンチ掘削。獣骨、土器等写真撮影。C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 3月14日 ・C-18～17 畦の掘り下げ。C-17 南壁写真撮影、割り付け。  
 ・C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 3月17日 ・C-18～17畦 掘り下げ。C-17 壁の実測。北壁写真撮影、割り付け。  
 ・C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 3月19日  
 ～20日 ・C-18～17畦 掘り下げ。C-16 カワニナ層の掘り下げ。平面清掃後写真撮影。
- 3月24日 ・C-18～17畦 掘り下げ。C-16 カワニナ層の掘り下げ。
- 3月25日 ・C-18～17畦 掘り下げ後、写真撮影。柱穴の平面実測。  
 ・C-16 砂層上面、南壁の清掃、写真撮影。
- 3月26日 ・C-18～17 畦橙褐色粘質土の掘り下げ。柱穴の完掘作業。



第4図 グリッド設定

## 第3節 層序

平安山原B遺跡は、試掘調査の成果から凡その範囲を想定した。今回はより具体的な範囲と遺跡の性格を把握することを目的として行った。そこで、調査地を設定するにあたって、試掘調査での大まかな範囲の略中央部を行うことで、層厚及び遺構、遺物などの密度を把握することができると計画したが、機能している米軍施設があったため、影響の無い区域を選定せざる負えない状況であった。その結果、北側に米軍が利用していない広場がありそこに設定することとした。幸い、選定した場所は、より丘陵側に接する部分で立地及び旧地形を把握するのに適していると判断し、実施することとした。

層序は丘陵側から南西方向へ緩やかに傾斜している。つまり、トレンチの北壁側が丘陵の麓で小高い地形を成し、南西へ緩やかに傾斜し、そこに包含層が堆積している。トレンチの南側約10m前後に試掘調査時のサターヤー（砂糖小屋）が地山（岩盤）近くで確認されているが、その間は緩やかな窪地を成していると考えられる。

今回の調査では、近世及び弥生時代相当期の包含層はC-18～C-16まで堆積が確認できた。その先からC-13までは近世の時期と思われるカワニナを含んだ堆積があり、緩やかに西側へ傾斜している。C-13・14グリッド間では、カワニナ層と海砂の白砂層の境で軽石が分布する状況が見られた。

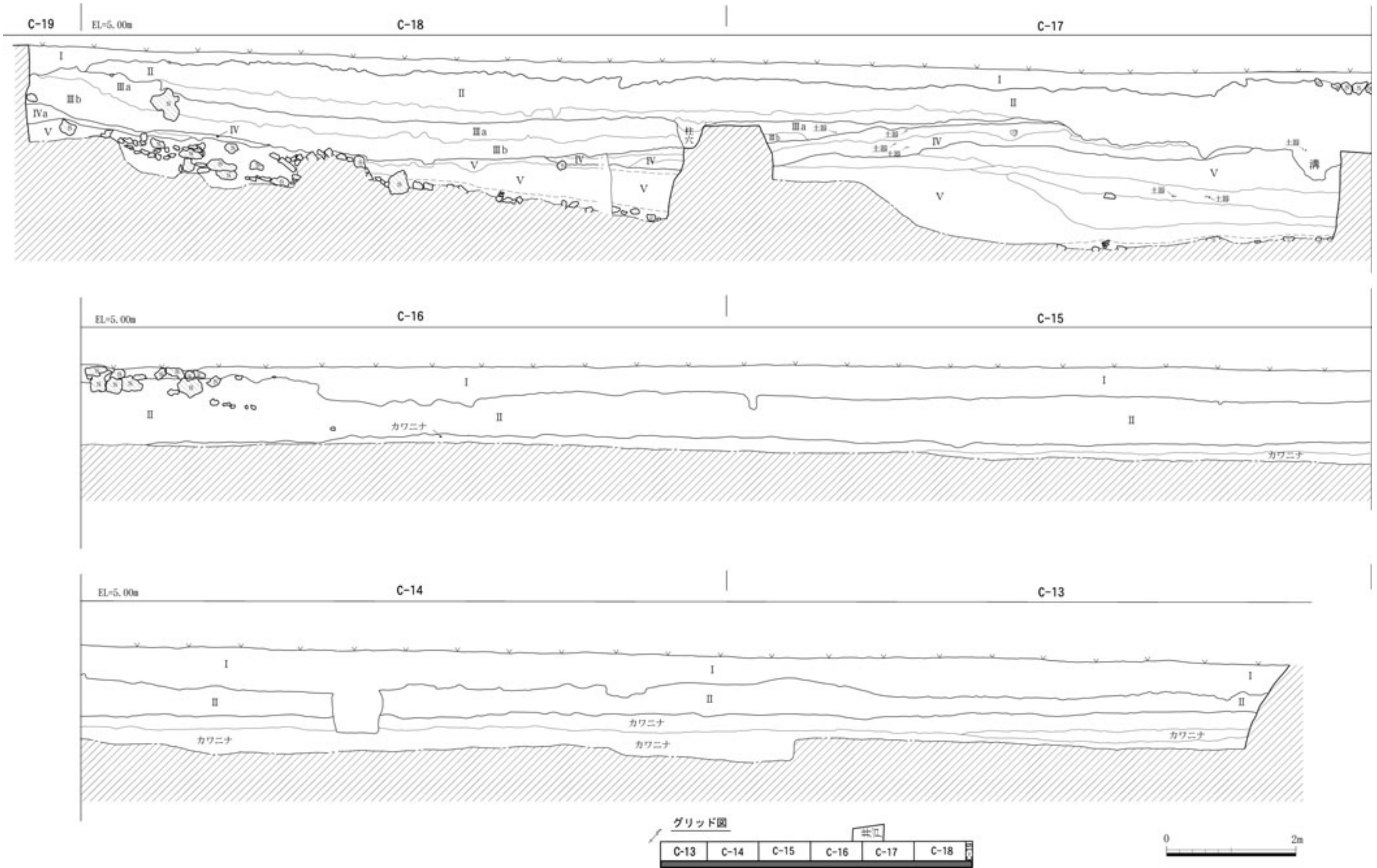
### I層 客土

米軍の基地建設の際に整地され、上部はコーラルの礫層、下部は砂混じりの茶褐色土である。部分的に廃棄物処理のための廃棄土坑見られる。その廃棄土坑は包含層を破壊している部分もある。試掘調査時、丘陵麓近くは岩盤が平坦に削平されている状況であった。戦前に小高い丘陵が存在していたと思われる。層厚は、丘陵側は10～30cmと薄く、C-16～13は30～50cmとやや厚い。集計表や本文では①層と表記する。

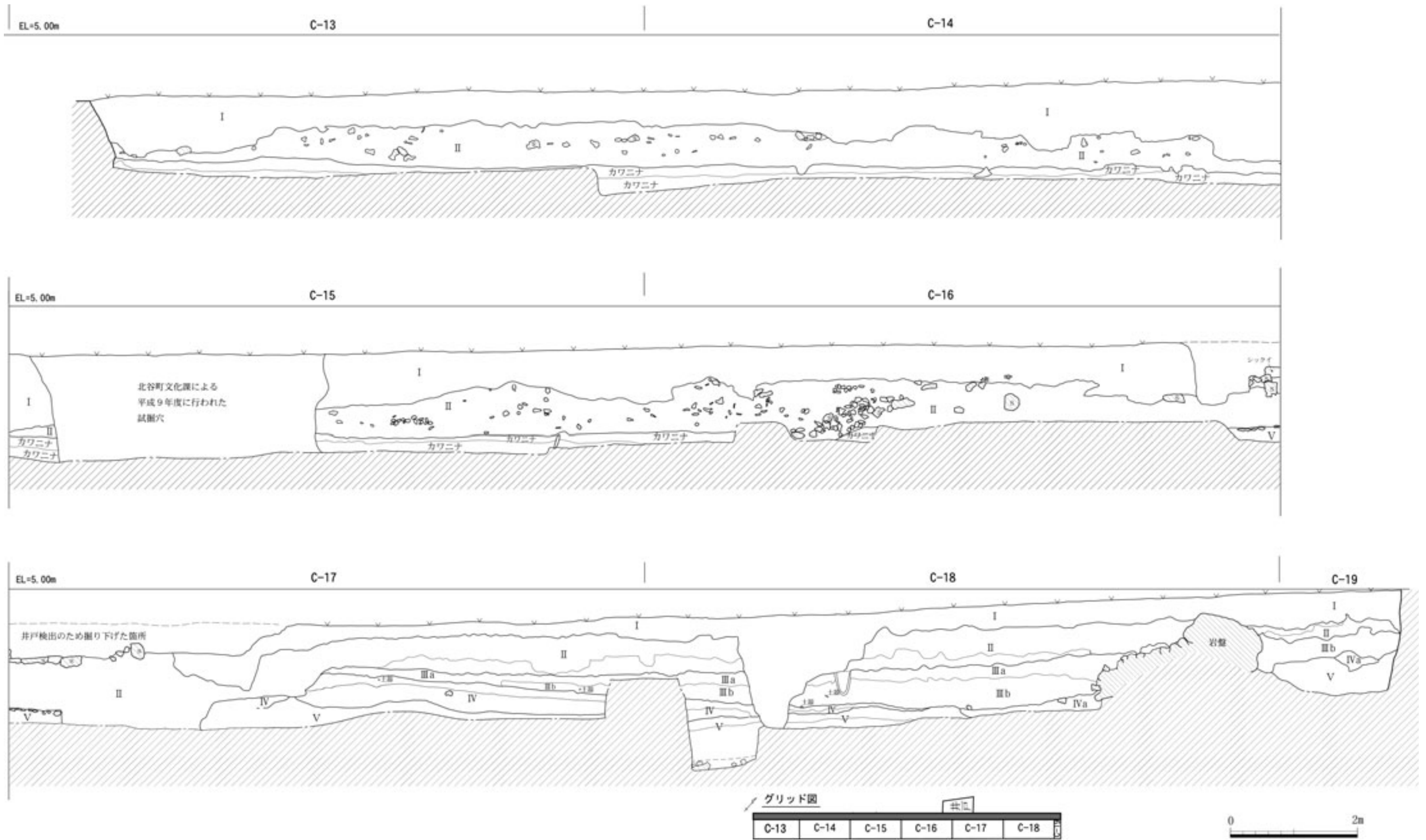
### II層 茶褐色土層：近世～戦前

米軍基地建設以前の平安山集落を形成していた頃の堆積層と思われる。本層は遺構が確認できる粘質土層と淡水産のカワニナやマルタニシが確認できる粘質砂層に分けることが出来る。前者は全面に広がる。丘陵側では礫を含んでいることから、恐らく東側の丘陵を若干削り整地したと推測される。しかし、西側は米軍による掘削が顕著である。後者はC-17の西側から前者の下部で堆積し、西側に広がっていくようである。地形的に17ラインから西側に緩やかな傾斜面を成し、カワニナなどの淡水産の貝が棲息できる窪地となっていると推測される。

丘陵側では、C-17・16トレンチ北側で掘り抜き井戸が検出され、その周辺からは近・現代磁器や沖縄産陶器が出土する。また、その下部では、C-18・17境辺りのⅢa層上面で検出された高床式建物址及び柱穴群とC-17西側の溝遺構がある。高床式建物址及び柱穴群は、当初グスク時代と思われていたが、同時期の遺物がかかなり少なく、近世の遺物がやや多いので近世としたい。しかし、試掘調査では周辺でグスク期の遺物が確認できることから、グスク時代まで遡れる可能性もある。詳細については今後の本調査で明らかにして行きたい。層厚は粘質土が約20～60cm、粘質砂が10～40cmである。集計表や本文では、②層と表記する。

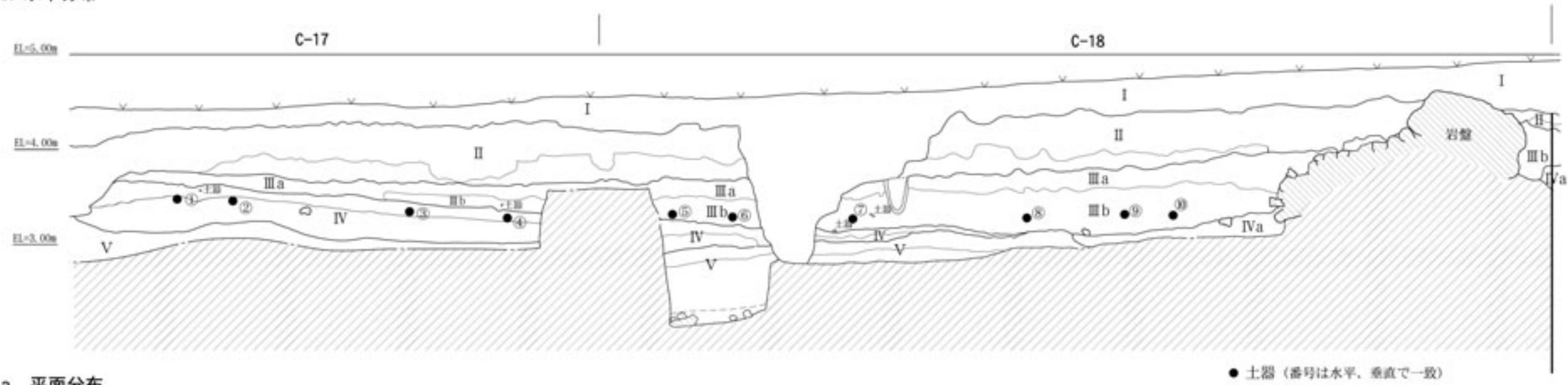


第5図 南壁土層断面

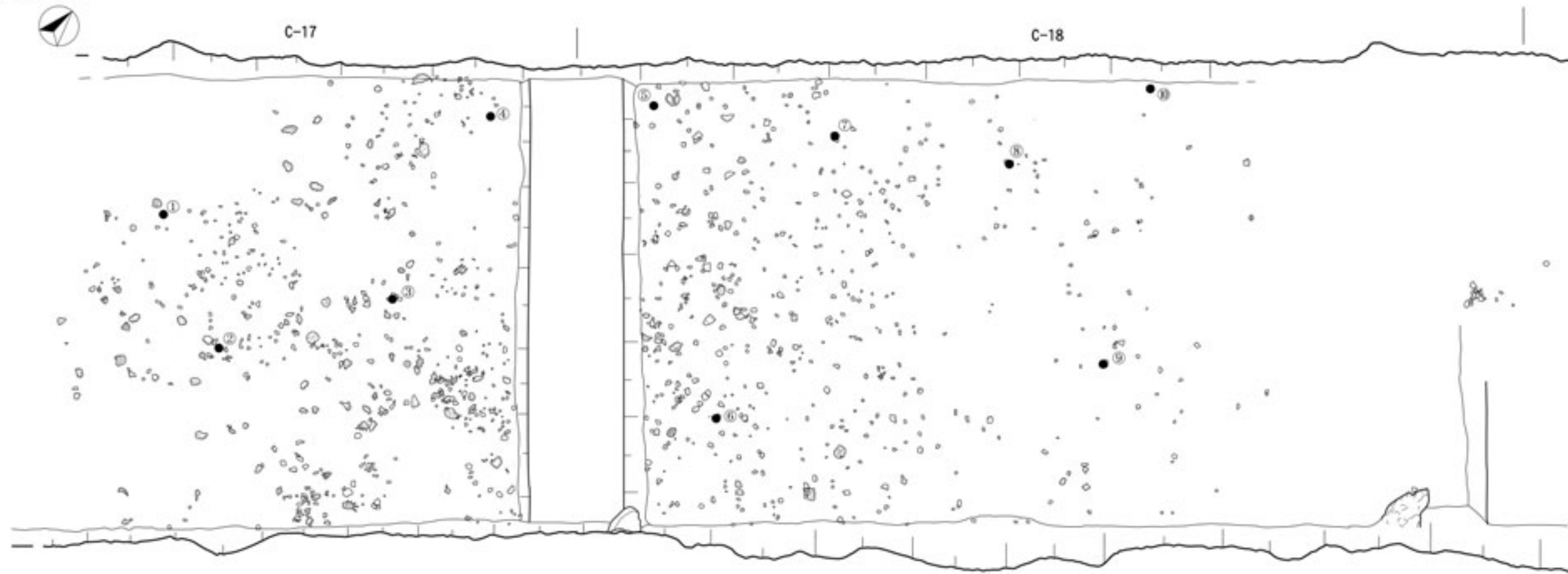


第6図 北壁土層断面

b. 水平分布



a. 平面分布



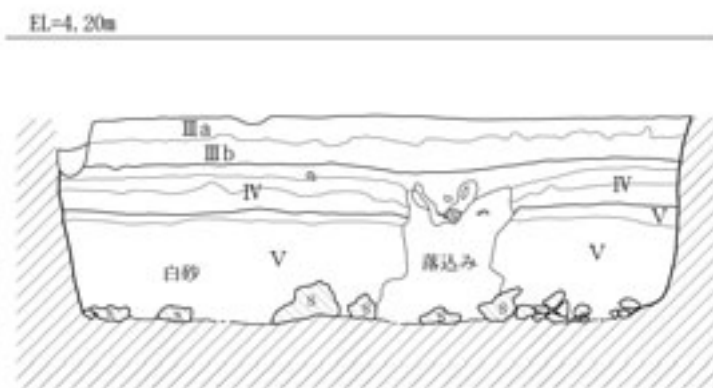
グリッド図



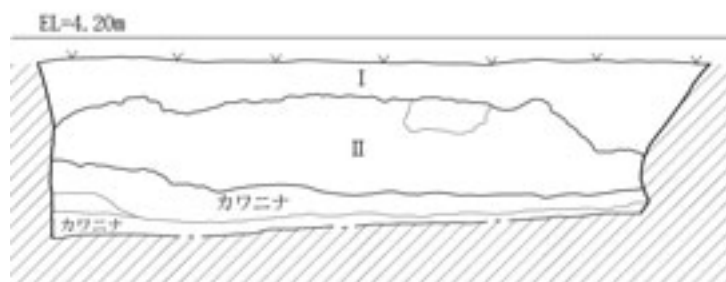
第7図 出土遺物分布 (C-17・18橙褐色粘質土層～黄褐色混貝粘質砂層)



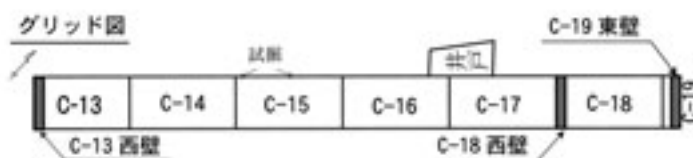
第8図 東壁土層断面 (C-19)



第9図 西壁土層断面 (C-18)



第10図 西壁土層断面 (C-13)





### Ⅲ層 褐色粘質土層：弥生時代相当期

本層は色調より黒褐色粘質土層と黄褐色粘質土層に分けられ、前者をⅢ a、後者をⅢ bとした。

#### Ⅲ a層：黒褐色粘質土層

Ⅲ a層の堆積は、丘陵側から西側に向かって緩やかに傾斜をなし、西端部はやや盛り上がりC-17の西側で途切れる。C-18の中央部は浅い窪みをなす。遺構はC-17・18で直径約14cmの柱穴群が確認されたが建物プランや規則性は確認できず、詳細は不明である。遺物はC-18から西側に(第9図)に集中し、くびれ平底土器や弥生時代相当期の乳房尖底土器が出土する。層厚は約30cmである。

集計表や本文では③ a層と表記する。

#### Ⅲ b層：黄褐色粘質土層・橙褐色粘質土層

丘陵側及び北西側から南西側に向かって緩やかに傾斜し、南西端部でやや盛り上がる。よって、Ⅲ a層同様C-18中央部で浅い窪みをなしている。堆積はC-17の東側で途切れる。遺構はC-18・17畦の西壁で落ち込みが確認された。遺構の性格等は不明である。出土遺物はⅢ a層同様の分布状況(第9図)である。窪地や傾斜での出土であるため部分的にはⅢ a層のレベルと一緒になる。弥生時代相当期の尖底土器が出土する。本層とⅢ a層は時期的には大差はないと思われる。層厚は30~50cmである。

集計表や本文では③ b層と表記する。

### Ⅳ層 黄褐色混貝粘質砂層：弥生時代相当期

本層は海浜砂の堆積によるもので、Ⅲ b層の粘質土の影響を受け黄色味を帯びている。土器や獣骨などが散見される。丘陵から堆積して、C-18で浅い窪みを成す。C-17の西側まで堆積が確認されている。C-17からC-13までは、近世期のカワニナを含む土層が上面に堆積し、本層との境にマンガンが散在している状況である。弥生時代相当期の土器を含む。下部に行くに従い砂が粗くなり、色調も黄褐色と赤褐色が見られる。

集計表や本文では④層と表記する。

### Ⅴ層 黄白色砂層・枝サンゴ層

C-19・18の丘陵側の岩盤を覆い、C-17中央西側より西側へ傾斜して拡がっていく。C-17西側からは白みを帯びてくる。本層は上部の白砂にサンゴ枝や礫を密に含み、その下部は粗砂と細砂の互層で堆積を成す。前者は北西側から南西側に拡がる様相で、西側には拡がらないようである。層厚は10~20cmである。出土遺物は弥生時代相当期の土器と縄文時代(面縄前庭式土器・面縄東洞式土器・宇佐浜式土器など)が見られる。後者は丘陵より西側に向かって厚く堆積していく。層厚は10cm~約1mである。最下部になると5~60cm大の礫が見られる。礫は西側に傾斜して散在する状況であることから、丘陵側からの転石と思われる。海岸側には枝サンゴ層を形成する。

集計表や本文では⑤層と表記する。

## 第4節 遺 構

### 1. 井 戸 (第11図、図版2)

井戸は出土遺物及び地籍併合図、北谷町史、地名調査から戦前に使用されていたものと考えられる<sup>(註1・2)</sup>。本遺構は平安山集落の北東側に位置し、地名調査の屋号地図<sup>(註3)</sup>を見てみると、丘陵の麓に大和島小(屋号ヤマトウシマグラー)があり、そこに井戸があると記されている。しかし、これまでの試掘調査で確認されたサターヤーと今回の井戸の配置関係からすると、井戸は、丘陵及びサターヤーより西側に位置している。これらのことを考慮すると大和島小(屋号ヤマトウシマグラー)の井戸ではなく、その南西隣に接する祝女殿内小(屋号ヌンドウルチグラー)の可能性がある。所有者については今後の調査で明らかにしていきたい。

本遺構は掘り抜き井戸である。米軍の基地接収に伴い、東西南北に破壊を受けている。現存する面積は約16m<sup>2</sup>である。東側から西側に緩やかに傾斜している。井戸内からは米軍に関する廃棄物、危険なものでは小銃弾などが見つかった。危険物の出土に伴い安全を考慮し、底までの除去は行わなかった。このことから、井戸内の断面図作成は行わなかった。本調査の際に再度調査を行う予定でいる。

井戸は、前面に敷石による広場を有し、南側に階段、北側に溜池を持つ。井戸口枠は約30～50cm角の切り石を円形に配し、直径約80cmである。井戸正面の半径枠の縁は幅約10cm、高さ約1cmの段差を有している。また、井戸背面部は枠の上に大型の切り石が半円形状に積まれている痕跡が残る。上部の構造は把握できないが、切り石が積まれていたと考えられる。また、正面部の井戸口枠の内縁に紐ズレ痕が見られる。このことから、桶などに紐を括り付け直接汲み上げていたと思われる。また、井戸口枠に接する南北には木柱を建てる痕跡は見られないので、滑車を設置していたかどうか不明である。

井戸内は上面から下部に向かって幅を広げる構造で、切り石で積まれている。深さは約2.45m。

広場の敷石は最大で幅約60cm、長さ約1.9m、厚さ約15cmの板状の1枚の石灰岩が敷かれている。この様にサイズは異なるものの板状の石灰岩を数枚敷いて作られている。

溜池は現存状況で「コ」字状を呈している。枠は長さ約1m、高さ約40cm、幅約15cmの石板を配し、内側には(漆喰・セメント)が塗布されている。深さは約15cm。本来は長方形を呈していたと思われる。

階段は溜池に接し南に位置している。段数及び階段の長さなどは不明である。階段を有することは意識的に井戸の施設を高くしたと考えられる。なぜ階段を有するのか、周辺に屋敷などの施設が皆無なので比較できないのは残念である。今後の本調査で明らかにしていきたい。

ここ数年本町で行っている発掘調査で井戸の発見が相次いでいる。時期的には近世から戦前にかけての掘り抜き井戸である。本町の事例と各市町村で確認された掘り抜き井戸の事例を表2にまとめた。

### <引用・参考文献>

註1：『北谷町史 第3巻』民俗下 北谷町史編集委員会 1994年

註2・3：名嘉順一・東恩納みさき・八田夕香 『北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』

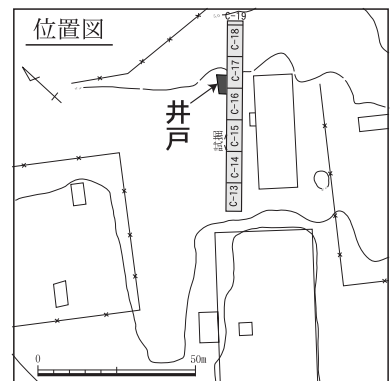
北谷町文化財調査報告書 第24集 北谷町教育委員会 2006年

表2 県内掘り抜き井戸出土一覧

遺跡名	形状	内径・外径	深さ	時期	特徴	出土遺物	出典
御細工所跡	だ円 (円柱形)	2m		戦後	石積み	青磁碗・白磁皿・染付碗・貝製品・水道ポンプの鉄パイプ	那覇市教育委員会 1991年
湧田古窯跡(IV)	円形	内径 1.2m	3.5m	新しい	琉球石灰岩、2層面から掘り込まれている	煙管(火皿・吸口)・鉄パイプ・板ガラス・プラスチック・土管	沖縄県教育委員会 1999年
南風原町の遺跡(松川井泉)	円形袋状	一段目 3m内外 二段目 5m内外	5m	200~300年前 (首里王府時代)	石灰岩を利用し、野面積みの石で二段に分けて積み上げ		南風原町教育委員会 1993年
石川市伊波城跡北西遺跡	円形	外形 1.35m 内径 0.96m			琉球石灰岩		石川市教育委員会 1996年
伊礼原遺跡	隅丸方形形状	90cm四方	0.8~1.6m		琉球石灰岩	ゴホウラ・土器片 犬の骨一体分	北谷町教育委員会 2007年
喜名番所跡					詳細不明		読谷村教育委員会 1997年
勝連城跡					詳細不明		勝連村教育委員会 1976年



図版2 井戸検出状況



----- 囲まれているのは漆喰が用いられている箇所  
 - - - - - 枝サンゴや小形の貝、砂利等が使用されている箇所

第11図 C-17北側の井戸 (平面・断面図)

## 2. 高床式建物址

高床式建物址は2基確認され重複している。C-18・17の第Ⅱ層で検出された。共に4本柱であるが柱穴の直径に差異が認められる。建物の長軸及び短軸の方向は同様に、柱間に差異が認められる。以下、各々の詳細を述べる。

### A. 1号高床式建物址（第12図、図版3）

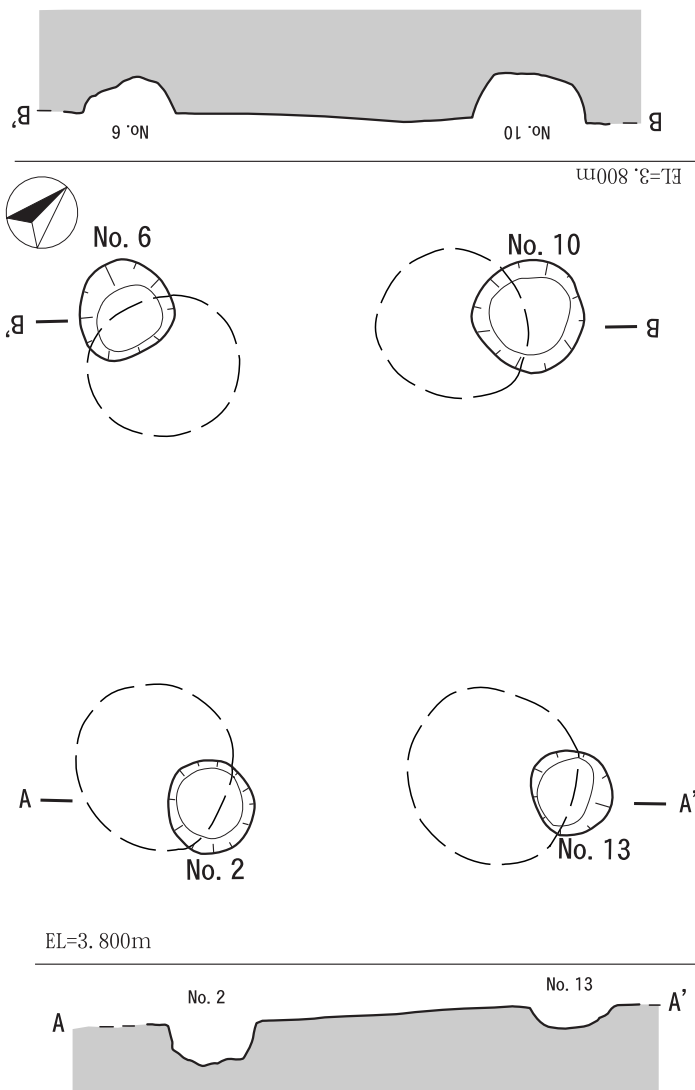
1号高床式建物址は調査トレンチの丘陵C-18・17に位置している。建物の柱穴の直径は約40cm～60cm大を有する。建物の長軸はやや東西向で、短軸はやや南北向きである。柱間は前者が約2.60m、後者は約2.00mの4本柱で構成される。本遺構は、第2号高床式建物址と切り合い関係から新しいことが判明した。

柱穴内からの出土遺物は土器で、柱穴内の覆土は茶褐色土であることを考慮すると第Ⅱ層の遺構で近世期の所産と思われる。

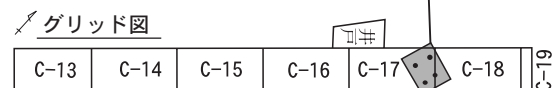
表 3

1号高床式建物址柱穴計測一覧

柱穴No.	計測値 (cm)		
	長 軸	短 軸	深 さ
2	49	46	20
6	50	50	20
10	58	56	25
13	45	45	15



図版 3 柱穴検出状況  
橙褐色粘質土層（北西より）



第12図 1号高床式建物址

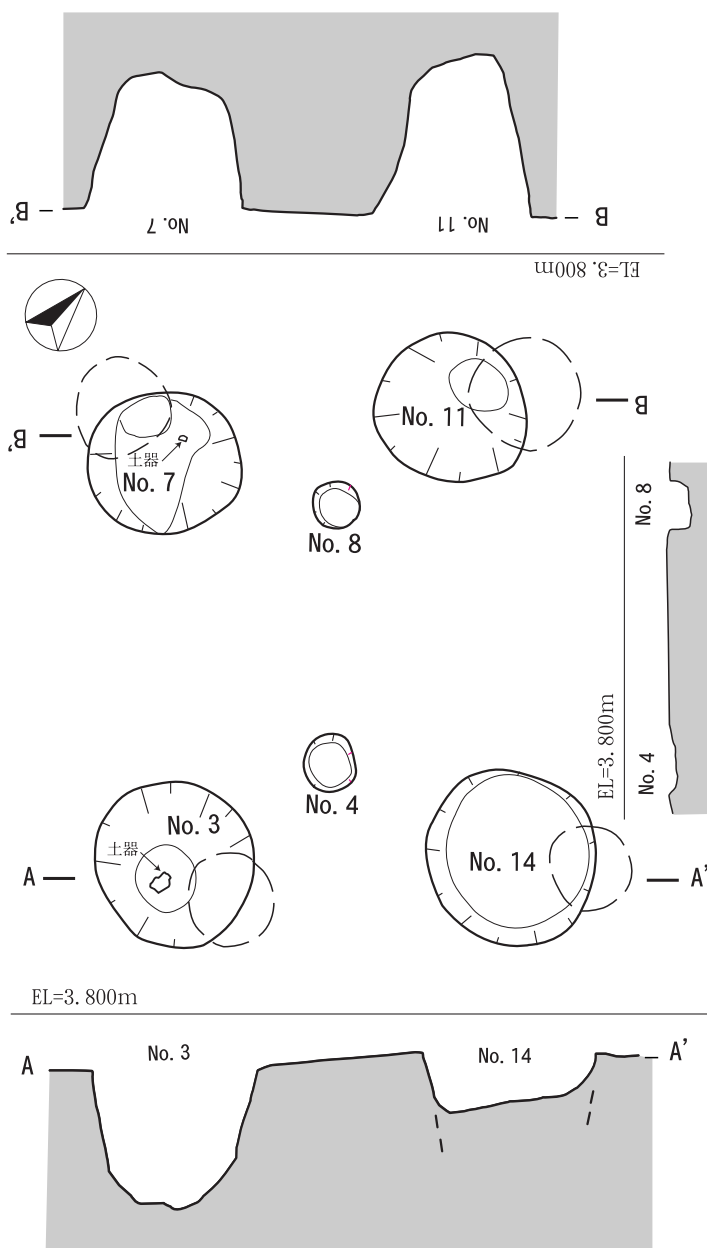
B. 2号高床式建物址 (第13図、図版4)

2号高床式建物址は1号高床式建物址と同じC-18・17に位置している。1号高床式建物址とは柱穴の直径と柱間に差異が見られた。柱穴の直径は約70~90cm大で、柱間は長軸が約2.20m、短軸は約1.80mの4本柱で構成される。本遺構は、第1号高床式建物址との切り合い関係から古いことが判明した。また、建物の中央部に2本の中柱になるような柱穴が見られ、2本とも直径が約25cm、深さは5cm・10cmとなっている。本遺構と関わりがあるのかは判然としなかった。柱穴内からの出土遺物は土器で、覆土は茶褐色土で近世期の所産と思われる。

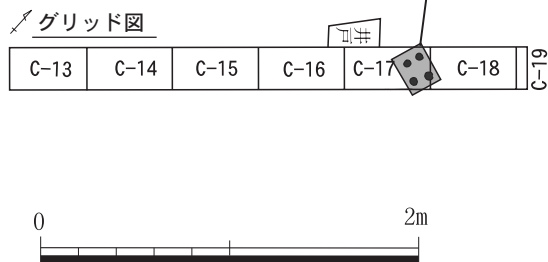
表4

2号高床式建物址柱穴計測一覧

柱穴No.	計測値 (cm)		
	長軸	短軸	深さ
3	85	83	70
7	80	74	70
11	82	80	80
14	92	90	30



図版4 柱穴完掘状況  
黄褐色混貝粘質砂層 (北西より)



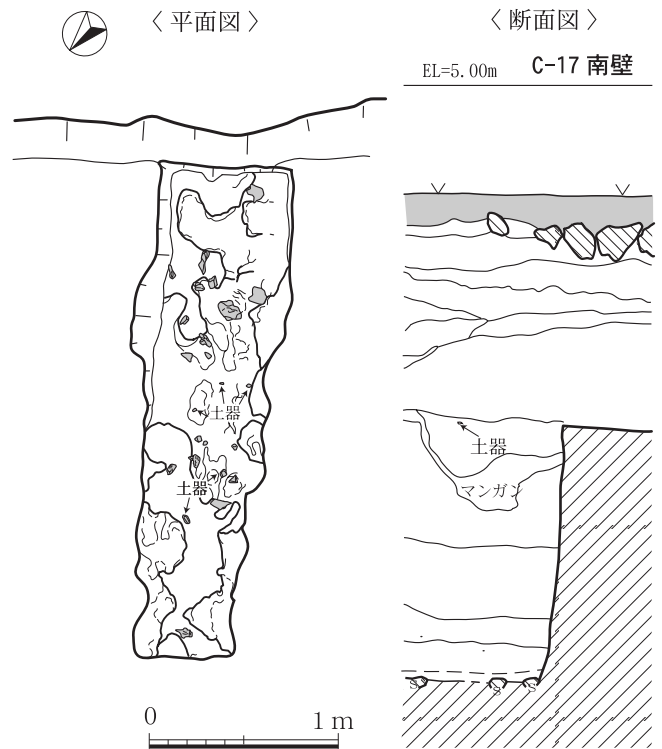
第13図 2号高床式建物址

### 3. 溝状遺構 (第14図、図版5)

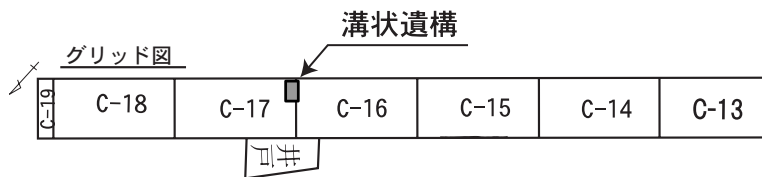
本遺構は、C-17グリッド南西角側に位置し、南壁から南北に延びる。しかし、北側は下層調査のため枝サンゴ層まで掘削を行い北側は把握していない。溝の幅は50~70cm、深さ約45cmである。黄褐色砂層(第IV層)を掘り込んでいる。溝の内部は、淵に所々石灰岩が配置されている様相が伺える。茶褐色砂でマンガンを含んでいる。

本遺構は北側先には井戸があることから、井戸水を利用するための何らかの水路であろうか。トレンチ掘りのため全体像が把握できなかった。

今後の本調査で、井戸・溝・サーターヤーとの時期差の有無、位置関係、性格などを明らかにして行きたい。



第14図 溝状遺構 (平面・断面図)



図版5 溝状遺構 (左:検出面 右:掘り下げ後)

#### 4. ピット群 (第15図、図版6)

ピット群は、C-17・18グリッドに分布し、黒褐色土層（第Ⅲa層）と橙褐色粘質土層（第Ⅲb層）で見られた。その状況は第15・16図に示した。第15図は黒褐色土層（第Ⅲa層）で検出されたもので、第1・2号高床式建物址付近と東側に分布する。柱穴No.4と8は前述した第2号高床式建物址に関わる可能性もあるが判然としなかった。他のピット群は建物プランや規則性は見られなかった。柱穴のサイズは直径約20～46cmで、深さは5～17cmである。柱穴内部は上層の茶褐色土であることから、第Ⅲa層の時期である。

第16図は橙褐色粘質土層（第Ⅲb層）で検出されたもので、グリッドの境に集中している。建物プランや規則性は判然としなかった。柱穴のサイズは、柱穴No.6のみ大きく直径約23cmで、他は直径約11～14cmに収まる。深さは約3～14cmと浅い。前者の柱穴群に比し小さめである。柱穴は第Ⅲb層の時期と考えられる。これら柱穴群はトレンチ掘りのため、全体への拡がり把握出来なかった。今後の本調査で明らかにしていきたい。



(北東より)



(南東より)

図版6 ピット群 (左：黒褐色土層面 右：橙褐色粘質土層面)

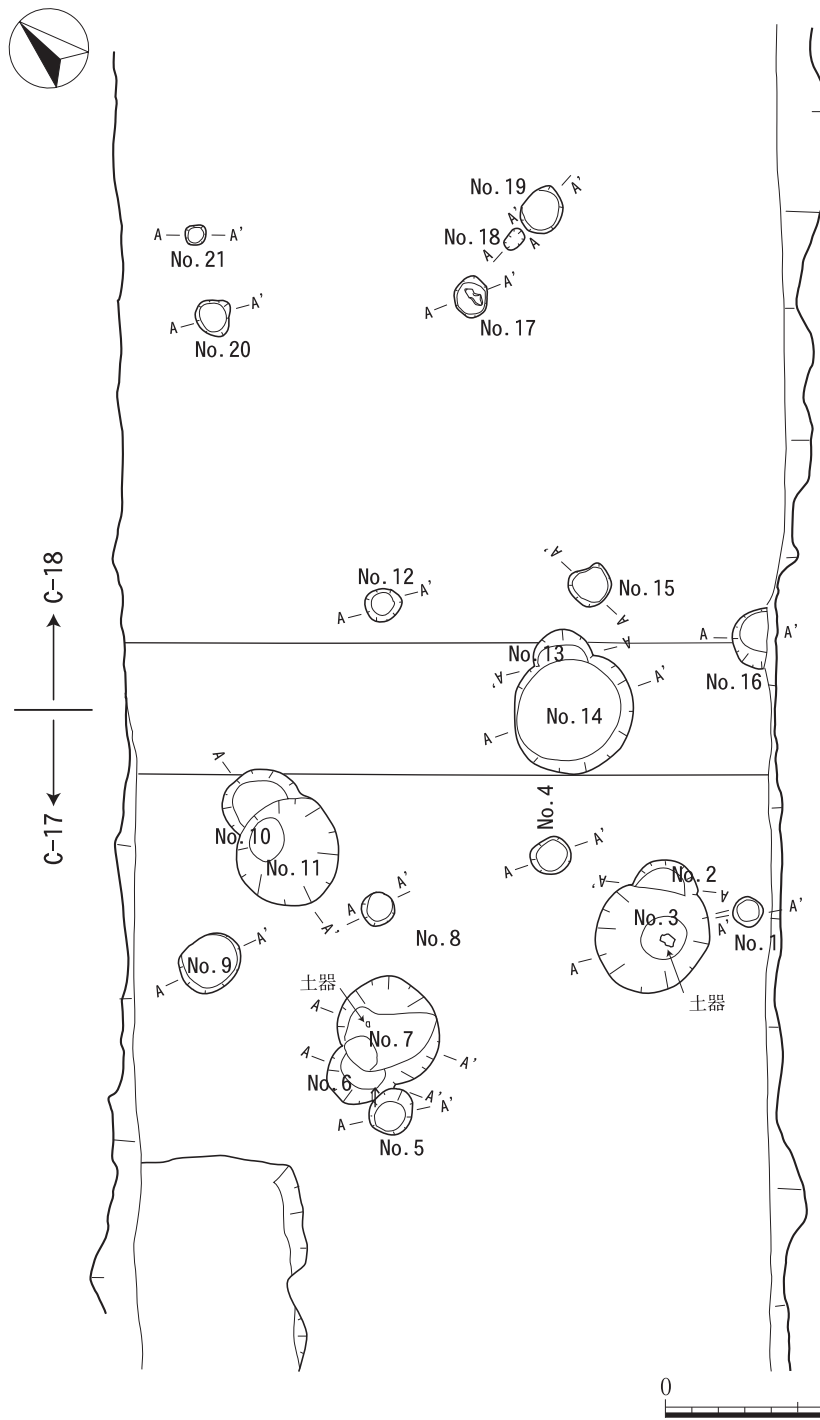
#### 5. 落込み遺構 (第16図、図版7)

本遺構は、C-18グリッド西壁で下層調査を行うために掘り下げを行った。その際、黄褐色混貝粘質砂層（第Ⅳ層）より確認された。落込みは、枝サンゴ層下の礫が確認できた面まで達していた。直径及び深さは約1mを呈する。形状は上端部から中位にかけて窄まり、底に向かって拡がる。底面はフラット状を呈する。内部は混貝砂層で枝サンゴも含まれている。上方部にはシャコガイや土器片がまとまっていて、下部に行くに従い小さめの貝片や枝サンゴが堆積している。本遺構の半部は地層観察畦にかかっているため、今回の調査では保存して埋め戻しを行った。そのため、全体像や性格については把握できなかった。

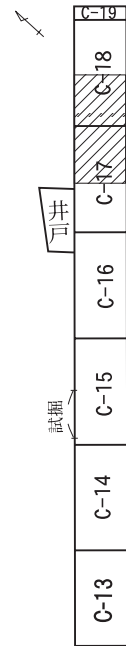


図版7 落込み遺構 (左：断面 右：遺物検出状況)

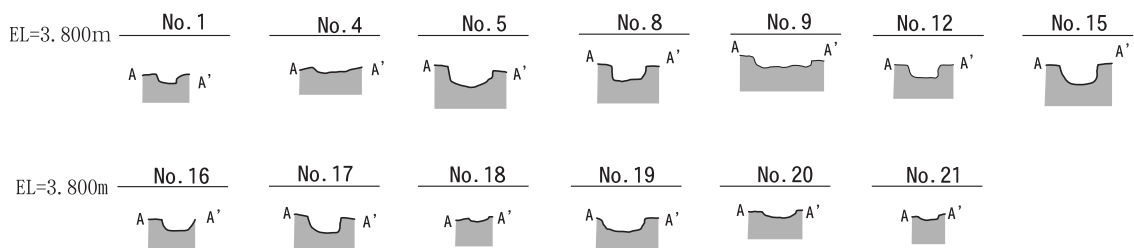
<平面図>



グリッド図



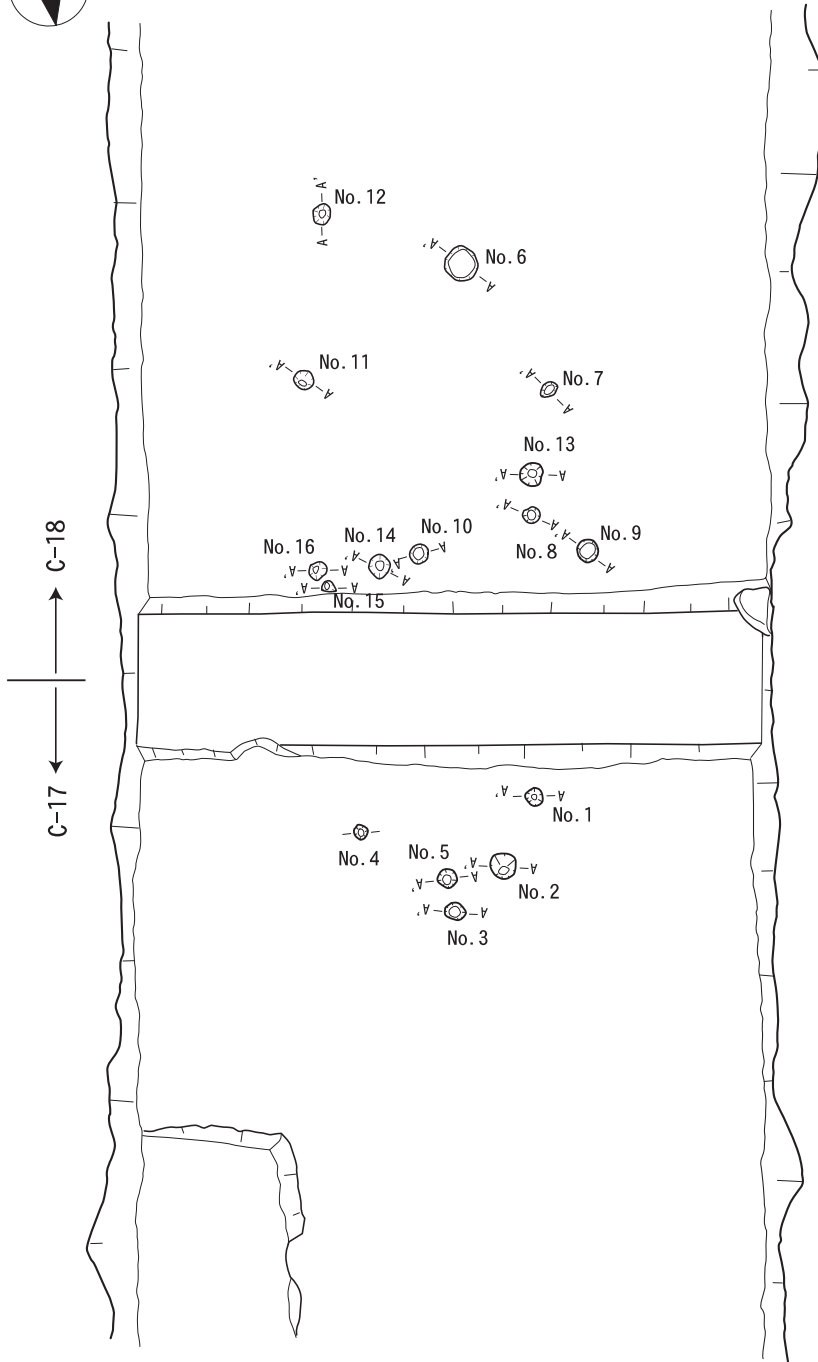
<断面図>



第15図 黒褐色土層面ピット (平面・断面図)



<平面図>



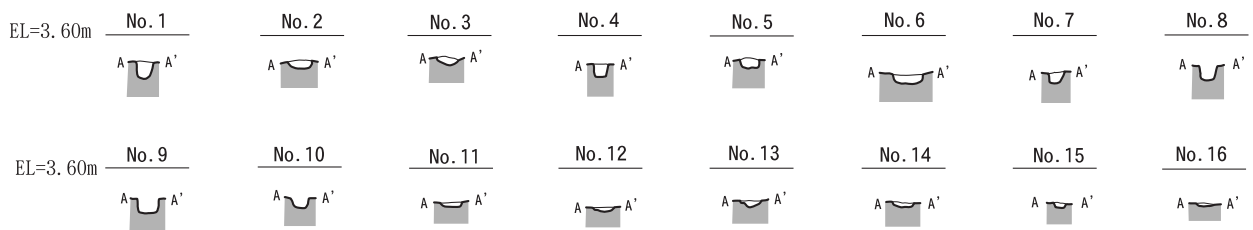
グリッド図



C-18  
↑  
C-17  
↓



<断面図>



第16図 橙褐色粘質土層面ピット (平面・断面図)

## 6. ジュゴンの頭骨

第17図に示したようにC-17で頭骨が検出されている。

その他にもC-16・17・18でも頭骨が出土した。(表27参照)

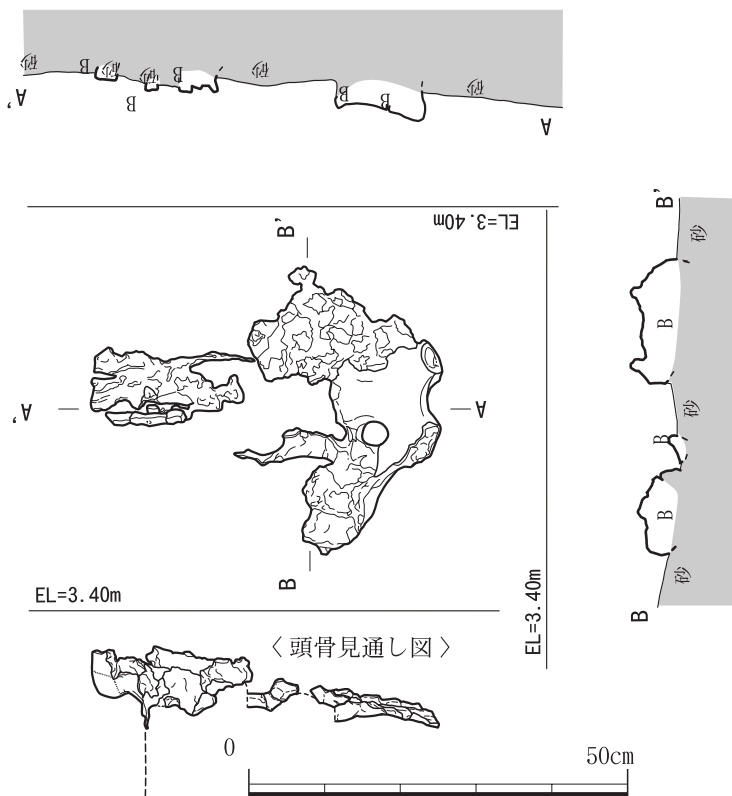
いずれも頭骨で、第17図に示した頭骨の一連の破片と考えられる。

出土はC-16で黒褐色カワニナ層であるが、C-17・18では黄白色粗砂層(第IV層)である。縄文晩期に相当すると思われる。ジュゴンの頭骨は弥生相当期でうるま市の平敷屋トウバル遺跡で多数出土しているが、他の遺跡では見られないため、本遺跡のジュゴン頭骨は自然検出か判然としない。

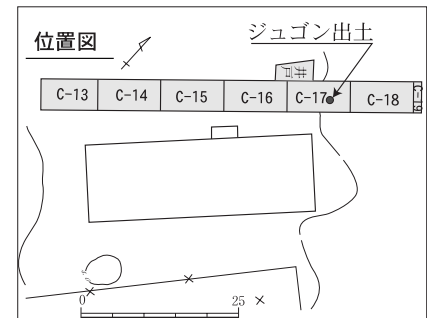
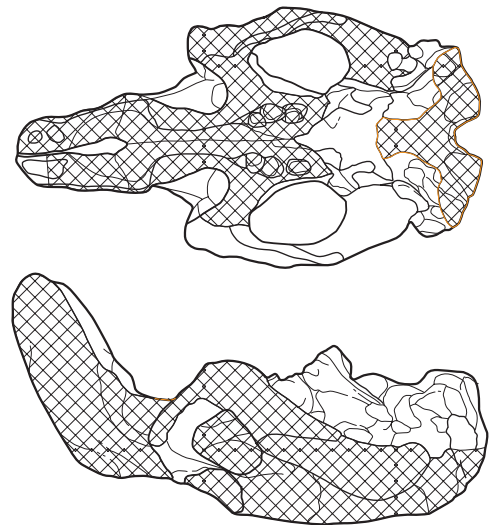
### <参考文献>

- ・金子浩昌・島袋洋・金城亀信・上原静他 『平敷屋トウバル遺跡』—ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書—沖縄県文化財調査報告書 第125集 沖縄県教育委員会 1996年

### <ジュゴン頭骨平面・断面図>



### <ジュゴン頭骨検出部分>



第17図 ジュゴン頭骨出土状況



図版8 ジュゴン頭骨(上面)



図版9 ジュゴン頭骨(側面)

## 第5節 出土遺物

本遺跡の出土遺物は、土器、石器、貝製品、骨製品、近世・近代の青磁、染付、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、本土産陶磁器などの人工遺物と骨や貝などの自然遺物である。以下、それぞれについて述べる。

### 1. 土器

本遺跡では、総数1,896点の土器片が出土した。内訳は、口縁部106点、胴部1,763点（重量12,117.56g）、底部27点で、出土量は少ない方である。層別に見ると近世に相当する黒褐色カワニナ層、マンガン直上、黒褐色マンガン層（②層）から266点。グスク期に相当する黒褐色・橙褐色粘質土層（③a・b層）から702点、混貝粘質砂層（黄褐色）、赤褐色細砂層（④層）から462点、枝サンゴ層（⑤層）から6点出土している。

口縁部、胴部、底部と各部位毎に分けて報告する。

#### 1) 口縁部

口縁部の器形は鉢・甕形と壺形の2種類に大別される。壺形は（図44・45）2点のみである。

鉢・甕形は口縁部は断面の形、形状、胎土、焼成などの特徴を勘案し、Ⅰ類（近世土器）、Ⅱ類（グスク系土器）、Ⅲ類（後期系土器）、Ⅳ類（大当原式土器）、Ⅴ類（浜屋原式・縄文晩期系土器）、Ⅵ類（弥生系土器）、Ⅶ類（縄文中・後期土器）とこれまで報告されてきた土器型式に沿うように分類した。

- Ⅰ類：近世土器 ————— (図1～3)
- Ⅱ類：グスク系土器 ————— (図4)
- Ⅲ類：後期系土器 —————
  - aタイプ (図5)
  - bタイプ (図6)
  - cタイプ (図7・9・10)
  - dタイプ (図8)
- Ⅳ類：大当原式土器 ————— (図11～12)
- Ⅴ類：浜屋原式土器・晩期系土器
  - aタイプ (図13・14・16・17)
  - bタイプ (図15)
  - cタイプ (図18)
  - dタイプ (図19～26)
  - eタイプ (図28)
  - fタイプ (図27)
  - gタイプ (図29～31)
  - hタイプ (図32)
  - iタイプ (図40)
  - jタイプ (図39)
  - kタイプ (図33～38)
- Ⅵ類：弥生系土器 —————
  - aタイプ (図41)
  - bタイプ (図42・43)
  - cタイプ (図44・45)
- Ⅶ類：縄文中・後期土器 —————
  - aタイプ (図47)
  - bタイプ (図46)
  - cタイプ (図48)

## I類：近世土器（図1～3）

図1は口縁部で外反し、稜を成すものである。第18図1と2（巻首図版11）に示したように厚さ約4mmの粘土板の片側に接着をよくするため、櫛状のもので幅2mmの深い溝を外面の粘土板には縦位、内面の粘土板には横位に施すものである。内外面の粘土板を貼り合わせて土器を製作する。今回、沖縄で初めて確認された製作法であろう（泥貼付塑法）。器厚は8mmと若干厚く、内面は指痕が顕著である。図3も胎土や器面調整から同一個体と思われる。

現時点では、図示した3点のみである。

## II類：グスク系土器（図4）

2点出土した。全体の1.8%である。

図4は口縁部は角を呈し、胴上部では若干「く」に湾曲し、口縁は外反する。胴下部は内側に大きく湾曲するようで、グスク土器の底を想起させる。しかし、裏面には指圧痕が見られ、胴部の厚さ積み痕の為、均一ではない。胎土に石英や透明粒の粗い粒を少量混入し、やや砂質、焼成良好。本遺跡ではグスク土器の底部は出土してなく、口縁部も明瞭な角を呈すること、胴部の厚さが不均一、胴下部にグスク系土器の削りが見られないことから、後期土器の要素も残すが、器形（巻首図版10）から一応、グスク系土器（II類）とした。

胴部の出土は16点（155.1g）である。

## III類：後期系土器（図5～10）

16点出土した。全体の15.1%である。

「く」の字に湾曲し、外反するもので、器面は指で調整され、焼成が良く、胎土に角閃石を含まないものをIII類とした。

aタイプ：図5は口径25.8cmの深鉢で、断面は丸、口縁部は外反する。胎土は泥質でアバタを呈する。器厚は7mmで、均一ではない。焼成は良好。

bタイプ：図6は口径が12.8cmと小ぶりで、口縁部の断面は舌状で、「く」字状に湾曲し、さらに内傾するものである。

cタイプ：口縁部が「く」字に湾曲し、外反するもので、図7は口径14.4cm、図9は口径17.6cm、図10は口径13.6cmを測り、湾曲は図7が強く、図9・図10の順に緩くなる。器面調整をみると図7は内外面とも指圧痕が顕著、図10は泥質や白粒を含む。図9は口唇部は丸味を帯び、湾曲もゆるく、明黄褐色、弥生系の土器の要素もみられるが、口縁の形状からここに含めた。

dタイプ：図8は口径13.4cmの碗状で、「く」の湾曲が緩く、口縁部はあまり外反しない。口縁部から約5cm下部まで、黒褐色を呈する。器面調整は内外面とも湾曲の部分に指痕が顕著に残る。

図6～8は「く」状に湾曲し、胎土も酷似する。破片で復元を試み、傾きは3点とも異なるが、後期土器の出土は口縁の不定形なことなどを勘案すると同一個体の可能性も考えられる。

胴部は、117点（627.8g）である。

## IV類：大当原式土器（図11～12）

19点出土した。全体の17.9%を占める。

口縁部は不定形で、胴部の厚さは輪積み痕が残り、均一でなく、底部は尖底になる。

胎土に赤色粒や石英などを混入するものをIV類とした。

図11は口径21.2cm、器高14.8cmの小降りの乳房状尖底土器である。口縁は不定形の円で、口縁は舌状を呈し、やや外反する。器厚は5～7mmと不均一で、輪積みあとが両面に残り、縦位に強い指ナデが見られる。

図12は口唇部が内傾するものであるが、小破片の為、口径は復元できない。口縁部断面は舌状を呈し、器面調整は内外面とも指痕が明瞭に残る。

胴部の出土量も357点（3,202.81g）である。

#### V類：浜屋原式・縄文晩期系土器（図13～40）

48点出土した。全体の45.3%を占め、最も出土量が多い。

口縁部は断面は角や丸を呈するもので、胴部とほぼ同じ、厚さで、胎土は角閃石や透明粒など鉱物系の混和材を多く含み、器面調整が丁寧である。既存の浜屋原式土器や縄文晩期系土器に近い特長を持つグループである。

aタイプ：器形は僅かに外反するもの（図13・14・16・17）で、口径19.6cm～29cmの深鉢である。

図17は口径24.6cmの深鉢で、口縁部は角を呈し、やや外反する。器面の外面は指ナデ、内面は指圧痕で砂質を呈する。

bタイプ：大きく反る（図15）

図15は口径が最も小さく、口縁部は緩やかに外反し、胴部はやや膨らむようで、角閃石を大量に含み、黒色を呈するもので、胎土は浜屋原式土器に近い。

cタイプ：「く」字に湾曲するもの（図18）

図18は口径25.4cmの深鉢で、口縁は内外面から指で調整し、胴部から緩やかに湾曲し、外反する。宇地泊兼久原貝塚出土の土器に類似し、底部は小ぶりの不安定な平底とが想定される。

dタイプ：鉢形で、「ハ」状に開くもの（図19・20・21・22・23・26）、直口するもの（図24・25）。

外面の器面は丁寧で、内面は指痕が顕著に残る。浜屋原式土器に近い。

eタイプ：口径23.2cmで、口唇部は僅かに外反（図28）する。胴部で湾曲し、底部は乳房状尖底が想定される。浜屋原貝塚出土の土器に酷似する。

fタイプ：内湾する（図27）もので、口縁部断面は丸くなる。内湾させるために外面は縦位に指痕が見られる。

gタイプ：アサガオ状に外反するもの（図29・30・31）

いずれも口縁断面は角をなし、アサガオ状に外反する。図30は口径15.4cm、焼成はかなり良い。図31は外反が強く、口縁部は内縁がやや凸状を呈する。胴部に湾曲が見られ、蓋の可能性も考えられる。

hタイプ：図32は口径21cmで、胴上部で「く」字状に湾曲し、浅鉢になる。湾曲のため、肥厚帯のようにも見られる。類例は伊礼原遺跡（2007）（第29図1）に見られる。

iタイプ

図40は口径20.2cmの深鉢で、肩部で「く」字状に湾曲し、口縁は外反する。口縁は突起の部分が残り、リボン状突起の口縁が想定される。口唇部は幅5mmの玉縁となり、肩部には二叉の工具で沈線文を湾曲部分に囲繞し、さらに、斜めにも施すようである。混和材には白色粒、角閃石を含む。器厚は薄い。阿波連浦貝塚のVI層出土の土器に酷似し、伊礼原遺跡（2007）（第83図3）でも出土する。

## j タイプ

図39は口径15.2cmの口唇部が舌状を呈し、直口の筒状の深鉢である。混和材に石英、白色粒を多量含むのが特徴である。器面調整は内外面とも丁寧で、厚さ6mmとやや薄い。C-18南壁の礫層上部で出土である。

## k タイプ：(図33～38)

口径12.6cm～14.2cm、高さ12cm～14cmの小ぶりの深鉢形土器である。底部は底径が3cmの小ぶりの平底が考えられる。胴上部で「く」に湾曲し、やや外反する。その為、口縁部下約2cmの部分に稜をなすものである。図38の現存部分の資料では、やや内傾するものである。

胴部の出土は、351点(3,910.63g)である。

## VI類：弥生系土器(図41～45)

5点出土した。全体の4.7%を占める。胴部に厚さ3mm、外面に磨きの確認できるものが、4点出土する。他にも混和材に角閃石、透明粒などを多量混入し、巻首図版12に示したように器面がはがれた胴部も見られる。そのほとんどは黄褐色混貝粘質砂層の出土である。

## a タイプ：逆「L」字状

図41は逆「L」字状に外反する浅鉢。口径20cmで、口縁部直下に径5mmの孔を両面から穿孔する。内面に指痕が見られる。明赤褐色、砂質、器厚は8mmと厚手で、底部に細くなる。伊礼原D遺跡で類例がある。

## b タイプ：三角形・内湾

図42は口縁断面が三角形を呈し、内湾する。口径13cmの小降りの深鉢である。内外面とも指ナゲで調整されているが、特に内面も口唇部近くは指痕が顕著で、内湾を作り、肥厚部は積み痕が明瞭に見られる。混和材に赤色粒、透明粒を混入、砂質で器厚は6mmと薄い。

図43は口縁部が三角形に肥厚し、厚さは15mmと大きく、直口で、口径は19cmを測る。壺の可能性も考えられる。肥厚の頂部に幅広の沈線文を圍繞する。外面は肥厚部が刷毛目で調整され、内面は器面がはがれる。混和材は黒色粒や石英などを混入する、中には4mmの大きさの石英も含まれる。器厚は5mmと均一で、焼成はかなり良く、新しい時期の土器とも考えられるが一応、ここに含めておく。

## c タイプ：壺

図44と45の2点である。いずれも口縁部は欠落する。

図44は胴部で外面にヘラ磨き様の調整痕が認められ、内面は器面の保持が悪い。混和材に角閃石、赤粒、透明粒を多量混入し、砂質である。器厚は7～10mmと不均一で壺の頸部の部分と考える。外面は一部、赤味を帯び、丹塗りの可能性も考えられる。

図45は最小胴径が22cm、器厚10mmを測ることから大型の壺の頸部と考える。

角閃石、赤色粒、透明粒などの粗粒を多量混入し、砂質である。巻首図版12に示すように器面が残っている部分ではこれらの混和材は確認できないが、器面がはがれている部分では、混和材が明瞭に見られる。器色は内外面は明黄～橙褐色、内部は明灰色のサンドイッチ状を呈する。弥生系の移入土器と考える。

胴部の出土は、40点(589.07g)である。

Ⅶ類：縄文中・後期土器（図46～48）

縄文中～後期に属するものをⅦ類とした。出土は枝サンゴ層で図示3点のみの出土である。面縄東洞式土器（aタイプ）、面縄前庭式土器（bタイプ）、室川下層式土器（cタイプ）などである。

aタイプ：面縄東洞式土器

図47は外面に押し引き文を二条施すもので、口縁部は直口で肥厚し、胴部の厚さは7mmと薄くなる深鉢と思われる。砂質で、文様や口縁部の形状から面縄東洞式土器に分類される。

bタイプ：面縄前庭式土器

図46は、器厚0.5cmと薄く、ローリングを受ける。口唇部は舌状で、口縁部は外反する壺形である。文様は凸帯文を口縁部とほぼ平行に貼り付け、さらに篋で刻目文を施し、胴上部には沈線文を羽状に施すものである。器面は内外面とも保持が悪い。胎土に石英、白色粒、赤色粒、砂利を多量に混入。

cタイプ：室川下層式土器

図48は胴部で厚さが10mmと厚手である。外面に幅広の沈線文でやや鋸歯状に文様を施すものである。混和材は粗い石英が多量に混入する。現段階では室川下層式土器の範疇に分類されるが、焼成の良さから弥生系土器の可能性も否定できない。小破片で一応、ここに分類する。

表5 土器（口縁部）出土量

土器分類		Ⅰ		Ⅱ		Ⅲ		Ⅳ				Ⅴ				Ⅴa Ⅴb		Ⅵ				Ⅶ		合計	グリッド 合計			
		外	内	外	内	外	直	内	傾	不	外	直	L	内	傾	不	直	直	外	直	L	内	傾			外	直	
c-16	黒褐カワニナ層	②				1		4								1									7	8		
c-16サブ	灰茶褐色粘性砂層					1																			1			
c-17	マンガン直上	②																							2	33		
	黒褐色土層	③a	1																						1			
	黒褐色混貝土層	③b							1																		1	
	橙褐色粘質土層漸移									1																	4	
	黄褐色混貝粘質土層									2																		12
	黄褐色混貝粘質砂層	④																										4
	赤褐色砂層				1				1																			2
	黄白色砂層																											1
南壁沿いトレンチ内シルト層上部のサンゴ層																										1		
枝サンゴ層	⑤																									1		
南壁																										1		
c-18.17畦	橙褐色粘質土層	③b		1	3	3																				10	18	
	黄褐色混貝粘質砂層	④																								2		
	黄白色混貝粘質砂層																									2		
	掘込内畦混貝砂質			1	1																					3		
c-18.17	dot上げ																									1		
c-18	岩盤付近残土	③b																								1	23	
	橙褐色粘質土層					1		4	2																			14
	橙褐色粘質土層下白砂層	④a						1																				1
	黄褐色混貝粘質砂層	④																										3
	赤褐色粘砂層																											1
	南壁																											1
赤褐色砂～枝サンゴ								1																		1		
枝サンゴ層上面																										1		
井戸周辺	表採																									1	1	
不明	橙褐色粘質土層					1		1																		3	23	
不明・盛土	不明					1		1																		20		
合計			2	2	8	7	1	10	7	1	1	23	16	1	2	1	5	11	1	1	1	2	1	1	1	106	106	
種別別合計			2	2	16			19				48				11	1	5				2						

表6 土器（口縁部・胴部）観察一覧

第図 図版	挿図 番号	分類	分類 サブ	口径 (cm)	器厚 (cm)	観 察 事 項	出 土 地
第 18 図 ・ 図 版 10	1	I		38	1	口唇は角状、外反し、稜をなす鉢形。外面：丁寧、内面：指押痕。板状。石英、やや少。砂質。焼成非常に良い。内外面：明橙褐色。近世。	C-17・③a層 黒褐色土層、台285
	2	I		—	0.4	胴部、図1の外面、接合、巻首図版11参照。板状。透明粒。内外面：明橙褐色。	不明・③b 橙褐色粘質土層、 台78
	3	I		25	0.8	口唇は角状、外反し、稜をなす。外面：丁寧、内面：指圧痕。積み痕あり。角閃石、透明粒。砂質。焼成非常に良い。内外面：明橙褐色。図1と同一か。	不明 不明、台55
	4	II		24	0.9	口唇は角状、胴部で緩やかに張り、口縁部はやや外反する。底部は広底か。外面：輪積みの稜、内面：指押痕。輪積み幅6cm。石英、透明粒。少量。粗粒。やや砂質。焼成良好外面明黄～赤褐色。	C-18・17・④層 堀り込み内、台422
	5	III	a	25.8	0.8	口唇は丸味、口縁部は口唇直下を指で押し、くびれて外反し、稜をなす。外面：ハケナデ、内面：指押痕。輪積み幅2.8cm。アバタ。石英、赤色粒少量。泥質。焼成良好。外面：明灰褐色、内面：赤褐色。	C-18・17・③b層 橙褐色粘質土層、 台278
	6	III	c	12.8	0.8	口唇は舌状、「く」字状に口縁部は内傾し、わずかに稜をなす。外面：ハケ、内面：指押痕。積み痕有。赤色粒、透明粒。砂質焼成良好。内外面とも明赤褐色。8と胎土が酷似。	不明・③b 橙褐色粘質土層、 台85
	7	III	b	14.4	0.8	口唇は舌状、胴部は「く」字状に湾曲し、口縁部は外反し、稜をなす。外面：ハケナデ、内面：指押痕。口縁部と肩部を接合した輪積み。赤色粒。泥質。グスク土器？	C-18・17・③b層 橙褐色粘質土層、 台278
	8	III	d	13.4	0.8	碗状。口唇は丸味、肩部にくびれが残る。やや外反し、稜をなす。内外器面に指圧痕。胴下部に有。赤粒。やや泥質。焼成良好内外面：明灰茶色。6と胎土が酷似。	不明 不明、台351
第 19 図 ・ 図 版 11	9	III	c	17.6	0.9	口唇は丸味、湾曲は弱く、口縁部は外反し、稜をなす。角閃石、赤色粒。	不明・③b 橙褐色粘質土層、 台275
	10	III	c	13.8	0.8	口唇は角状、胴部の湾曲はゆるやかで、口縁部はやや外反する。外面：指ナデ。内面：指押し。積み幅約2.5cm。透明粒。泥質焼成良好。外面：明灰褐色、内面：明黄褐色。宇地泊兼久原14図4（鉢IIc）	C-17・④層 赤褐色砂層、台408
	11	IV		21.2	0.6	口唇は舌状口縁部はやや外反している。積み痕。	C-18・④a層 橙褐色粘質土層下の 白砂層上面、台76
	12	IV		—	0.8	口唇は舌状を口縁部は内傾する。	北側井戸 表採、台8
	13	V	a	26.5	0.7	口唇は丸味口縁部はやや外反する。厚みは均一。角閃石。	不明 平面清掃、台1
	14	V	a	26.4	0.6	口唇は角状、緩やかに湾曲し、やや外反し、稜が見られる。積み痕有。角閃石、透明粒。	不明 不明、台390
第 20 図 ・ 図 版 12	15	V	b	19.6	0.8	口唇は角状、大きく反ることから、胴下部で膨らむようである。内外面：指圧痕。外器面共に指痕が見られる。角閃石、透明粒、白色粒砂質。焼成良好。外面：暗灰褐色、内面：明褐色。	C-18・④層 黄褐色混貝粘質砂 層、台184
	16	V	a	24	0.7	口唇は角状、胴部は少し膨らみ、口縁部はやや外反する。外面指ナデ。内面指圧痕→明瞭。積み痕が見られる。角閃石、透明粒、白色粒。砂質。焼成良好。内外面：暗茶褐色。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質砂 層、台129



第図 図版	挿図 番号	分類	分類 サブ	口径 (cm)	器厚 (cm)	観 察 事 項	出 土 地
第 20 図 ・ 図 版 12	17	V	a	24.6	0.7	口唇は角状、内縁はやや強く、僅かに屈曲口縁部はやや外反する。外面指ナデ。内面指圧痕→明瞭。積み痕が見られる。透明粒、石英、角閃石、赤色粒。砂質。焼成良好。内外面：明灰褐色。胴下部にあり、底部近くは赤くなる。	C-18・17・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台279
	18	V	c	25.4	0.7	口唇は丸味、弱い「く」の字状の屈曲、口縁部はやや外反する。積み痕が見られる。白色粒。伊礼原遺跡砂丘区第84図10。	C-18・17・④層 黄白色混貝粘質砂層、台423
第 21 図 ・ 図 版 13	19	V	d	29	0.9	口唇は舌状、内面に膨らみ、口縁部は直口する。保持積み痕で膨らむ、有。透明粒、角閃石。砂質焼成良好。指頭痕、口唇部は細かい。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質土層、台110
	20	V	d	—	0.7	口唇は角状、口縁部は直口する。保持輪積みの痕が残る。アバタ、石英。砂質焼成良好。内面：指痕。	C-17・⑤層 枝サンゴ層、台229
	21	V	d	—	0.8	口唇は角状で口縁部は直口する。透明粒、赤色粒。砂質。焼成やや悪い。内外面：暗灰～赤褐色。	不明 壁面清掃、台39
	22	V	d	15.8	0.7	口唇は角状でやや外反する。内面：指圧痕。積み痕有り。角閃石、透明粒を多量混入。砂質焼成やや良い。内外面：明灰～黄褐色。	不明 不明、台319
	23	V	d	17.2	0.6	口唇は丸味、口縁部は直口している。外面：ハケ横。角閃石、赤色粒（多量）。砂質焼成やや悪い。外面：暗灰褐色、内面：明褐色。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質土層、台110
	24	V	d	—	0.5	口唇は角状、口縁部は直口している。外面：ハケ目、内面：指圧痕。角閃石、白色粒。砂質焼成やや良い。有孔あり、径4mm、両面穿孔。	C-17・⑤層 枝サンゴ層下の白砂、台248
	25	V	d	—	0.7	口唇は角状、口縁部は直口している。内面：指圧痕。積み痕あり。角閃石、透明粒。砂質。焼成やや悪い、内外面：暗茶褐色。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台167
	26	V	d	16.6	0.7	口唇は舌状、口縁部はやや外反している。外面：ハケ目、内面：指圧痕。あり。角閃石、透明粒。砂質。焼成やや悪い。内外面：暗灰褐色。	C-17・②層 マンガン直上茶褐色粘質土層、台130
	27	V	f	17.4	0.7	口唇は丸味、口縁部は内湾する。外面：ハケ目、内面：指圧痕。輪積み。透明粒、角閃石。砂質。焼成良好内外面：暗灰褐色。	不明 不明、台406
28	V	e	23.2	0.6	口唇は角、胴部で膨らみを持ち、やや外反する。外面：ナデ、内面：ユビ。輪積み幅4cm。角閃石、透明粒。砂質。焼成良好。外面：暗赤褐色、内面：暗茶褐色。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台161	
第 22 図 ・ 図 版 14	29	V	g	19	0.8	口唇は角状、口縁部はアサガオ状に外反する。外面：指ナデ、口唇は積みが残る、稜をなす。内面：指圧顕著。積み痕あり。やや泥質。焼成やや良い。外面：明茶褐色、内面：明灰褐色。有り。	不明 不明、台353
	30	V	g	15.4	0.6	口唇は角状、口縁部はアサガオ状に外反する。積み痕あり。角閃石、白色粒。	C-17・⑤層 枝サンゴ層下の白砂、台248
	31	V	g	—	0.8	口唇は角状、内縁はやや強く、口縁部はアサガオ状に外反する。外面：ハケ、内面：指圧痕。積み痕あり。透明粒砂質。焼成良好。内外面とも明赤褐色。清水貝塚（89）第46図5	C-18・④層 赤褐色粘砂層、台189
	32	V	h	21	0.7	口唇は角状、内縁はやや強い、緩やかに「く」字に屈曲し口縁部は外反し、稜をなす。外器面：ナデ。内器面：指圧痕。積み痕あり。角閃石、透明粒。砂質。焼成良好。内外面：明黄褐色。	不明 不明、台357

第図 図版	挿図 番号	分類	分類 サブ	口径 (cm)	器厚 (cm)	観 察 事 項	出 土 地
第 22 図 ・ 図 版 14	33	V	k	12.6	0.6	口唇は丸味、「く」状に緩い湾曲口縁部はやや外反し稜をなす。内外面：指ナデ。積み痕あり。角閃石、少量。やや泥質。焼成良好。外面：暗茶褐色、内面：茶褐色。×	C-18・④層 南壁、台264
	34	V	k	12	0.7	口唇は角、僅かに屈曲し、口縁部はやや外反し、稜をなす。積み痕あり。角閃石。35と同一個体か。	C-18・17・④層 黄白色混貝粘質砂層、台424
	35	V	k	14	0.7	口唇は角、僅かに屈曲し、口縁部はやや外反し、稜をなす。積み痕あり。角閃石。34と同一個体か。	C-18・17・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台279
	36	V	k	14.2	0.7	口唇は角、僅かに屈曲し、口縁部は外反し、稜をなす。内面：指圧痕。積み痕あり。透明粒。砂質。焼成良好。内外面：明茶褐色。	C-18・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台407
	37	V	k	13	0.5	口唇は角状、内縁はやや強い、僅かに屈曲し、口縁部は直口している。内外面：指痕。積み痕あり。透明粒。砂質。焼成良好。内外面：暗黒褐色。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台167
	38	V	k	13	0.6	口唇は丸味、「く」字状が残存、口縁部は内傾するが、稜が見られる。外面：ナデ、内面：指押痕。積み痕あり。透明粒、少量。焼成良好。内外面：暗茶褐色。	C-18・17・④層 橙褐色粘質土層、台274
第 23 図 ・ 図 版 15	39	V	j	15.2	0.8	口唇は舌状、口縁部は直口する。外面：ナデ、内面：指圧痕。積み痕あり。白色粒多量。泥質。焼成やや良い。内外面：明茶褐色。	不明 不明、台265
	40	V	l	20.2	0.7	口唇は玉縁状「く」の字状に湾曲し、口縁部はやや外反している。外面：器面丁寧、沈線文の文様。内器面：指圧痕。積み痕あり。白色粒、角閃石。砂質。焼成やや悪い。内外面：明赤褐色、サンドイッチ状。	不明 不明、台0
	41	VI	a	20	0.9	口唇は逆「L」字状口縁部は逆「L」字状に外反している。外面：ナデ、内面：ユビ痕。積み痕あり。白色粒、角閃石。砂質。焼成やや良い。内外面：暗赤褐色。有孔、径6mm、両面穿孔。	C-17・②層 マンガン直上層、台186
	42	VI	b	13	0.7	口唇は逆「L」字状、内縁に尖る、胴部で若干膨み、口縁部は「L」字状に外反する。外面：保持良い。内面：ハガレ。積み痕あり。石英、黒色粒、透明粒、赤色粒多量混入。砂質。焼成やや良い。外面；暗茶褐色。弥生か。	C-17・④層 黄褐色混貝粘質砂層、台171
	43	VI	b	19.9	0.5	口唇は三角形に肥厚、口縁部は内傾。外面：ハケ目横、内面：ハガレ？。石英、粗い(6mm)、赤色粒？砂(硬)質。焼成非常に良い。肥厚部は暗灰褐色、他の内外面：は暗赤褐色。かなり硬く、土器でない？	C-17・⑤層 黄白色砂層(マンガン直下層)、台210
	44	VI	c	—	10	弥生。胴部外面：磨き？、内面：剥がれ。積み痕有、頸部の為、不均一。角閃石、赤粒、透明粒。多量。砂質。焼成良好。外面：赤を塗色？、内面は剥れて明褐色。類例：宇地泊兼久原遺跡	C-17・⑤層 南壁沿いトレンチ内シルト層上部のサンゴ層、台254
	45	VI	c	20.7	0.9	弥生。胴部積み痕有。角閃石、赤粒、透明粒。多量。砂質類例：宇地泊兼久原遺跡	台0
	46	VII	b	19.6	0.5	口唇は凸帯文により肥厚、口縁部は外反しており内外面とも保持悪い。ローリング有り。石英、チャート、赤色粒、金雲母。多量混入。砂質。焼成脆い。内外面：明灰褐色。類例：伊礼原遺跡。	C-18・⑤層 枝サンゴ層上面、台192
	47	VII	a	—	0.8	口唇は方形に肥厚、口縁部は直口している。外面：押し引き文。器面の保持悪い。ローリング。石英、チャート、透明粒多量混入。砂質焼成もろい。内外面：黒褐色。類例：伊礼原遺跡(砂丘)。	C-17・⑤層 枝サンゴ層直下、台253
	48	VII	c	—	11	胴部。室川下層式土器？外面に沈線文、不定形。石英多量。砂質。焼成ややもろい。内外面：暗褐色。類例：伊礼原遺跡(砂丘)。	C-18・19・③a層 黒褐色土層、台259

## 2) 胴部

胴部はC-15で4点、C-16で211点、C-17で512点、C-18・17畦で190点、C-18で482点、C-18・19で2点、C-19で6点、井戸周辺で15点、盛土・不明で341点の計1,763点(12,117.56g)出土した。出土地不明をのぞくと主にC-17とC-18で最も多く出土した。

## ・分類の方法

土器→胎土分析(角閃石、赤色粒、透明粒)→粒の大きさ→器厚→均一・不均→焼成悪・良について観察した。その結果、下記のように分類した。また、個数と重量も計測した。その結果、下記のように分類した。出土状況の詳細は表7に示した。

I類：混入物少量。器厚は5～8mm前後、硬質である。器面調整は良い。巻首図版11に示したように厚さ3mm程度の粘土板に片側に櫛状のもので深い溝を施し、両者を貼り付けるものである。内面と外面の2枚の年度内面の指ナデが明瞭。近世土器に類する。

II類：混入物少量、泥質。器厚が5mm前後の薄手、均一。焼成良好。明赤褐色。グスク土器に類する。

III類：石英や赤色粒などを含む、砂質。器厚は5mm前後の薄手、均一。焼成は良い。アカジャンガー式土器に類する。

IV類：石英や赤色粒を混入。やや泥質。器厚6～9mm前後、均一でない。内外面とも雑な器面調整、大当原式土器に類すると思われる。中には器面調整が丁寧のも見られ、V類に分類されるものも一部含まれる。

V類：角閃石や透明粒を多く混入。砂質。5～7mm、均一。暗灰～茶褐色。器面調整は丁寧、外面は指ナデ、内面は指押痕。浜屋原式土器や縄文晩期系土器に類する。

VI類：石英・角閃石・透明粒・赤色粒など鉱物系を多量混入。器厚は6mm、8mm。器厚はほぼ均一。橙褐色。弥生式土器などの搬入土器の類である。

VII類：チャート、石英などを多量混入。器厚は5mm前後、均一。ローリングを受ける。器面の保持悪い。

基本的には従来 of 型式に沿うように胴部の分類も行ったが、IV類の大当原式土器系とV類の浜屋原式・縄文晩期土器系の胴部は重なる部分も多い。

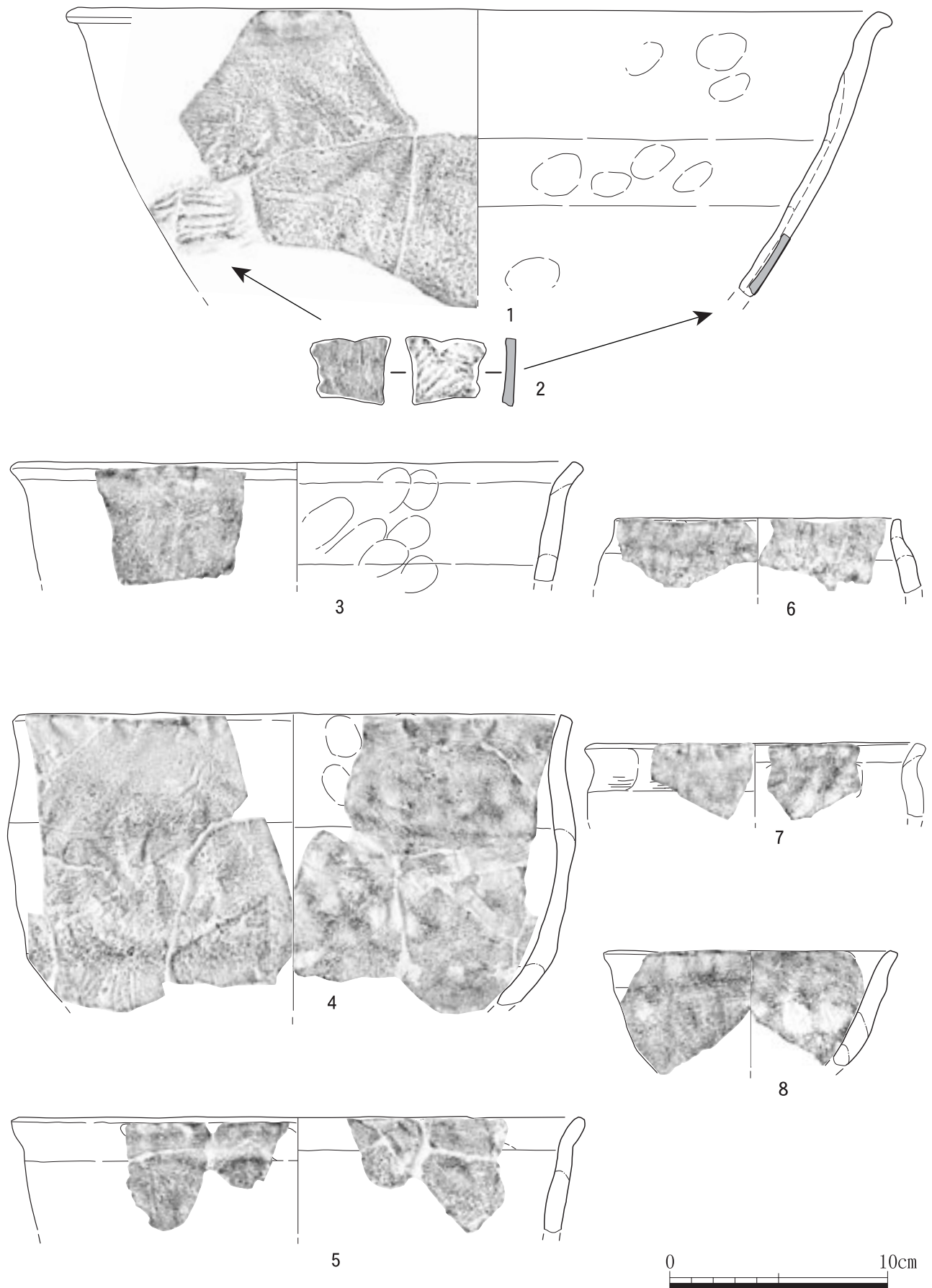
## 出土地別にみると

層別には③層645点(3,608.38g)、④層439点(3,714.21g)、②層254点(1,788.82g)が主な出土である。

胎土別にはV類が351点、IV類357点、III類117点で全体の46.8%が後期の土器で、IV類とV類の出土が多く、本遺跡の主体を示す。特にV類・IV類が全体の40.1%を占める。

表7 土器(胴部)出土量

グリッド	層序	土器分類										合計		グリッド合計 個数	重量(g)					
		II	III	IV	V	VI	VII	不明	個数	重量(g)	個数	重量(g)								
c-15	攪乱層																			
	茶褐色カワニナ層																			
c-16	茶褐色粘質土層																			
	黒(灰・黄・茶)褐カワニナ層																			
	マンガン直上																			
	マンガン直下																			
c-16サブ	壁面遺物No.2																			
	灰茶褐色粘質砂層																			
c-17	マンガン直上																			
	マンガン直下																			
	茶褐色粘質土層(黒褐色土)																			
	黒褐色混貝土層																			
	橙褐色粘質土層漸移																			
	黄褐色混貝粘質土層																			
	黒褐色混砂土層																			
	黄褐色混貝粘質砂層																			
	黄褐色砂層																			
	黄白砂																			
c-18・17畦	南壁沿いトレンチ内シルト層上部のサング層																			
	柱穴																			
	東壁																			
	南壁																			
	床・平・壁面清掃・不明																			
	黒褐色粘質土																			
	黄白色混貝粘質砂																			
	橙褐色粘質土層																			
	堀内赤褐粗砂																			
	堀込内畦混貝粘質																			
	柱穴No.14																			
	c-18	黒褐色粘質土																		
岩盤付近残土																				
橙褐色粘質土層																				
白砂層上面																				
黄褐色混貝粘質砂																				
赤褐色砂～枝サング																				
南壁礫層上部																				
西壁沿いトレンチ枝サング層上面																				
枝サング層																				
壁面清掃																				
c-18・19	西壁																			
	南壁																			
	畦掘り下げ時(白砂層)																			
	赤褐粗砂																			
c-19	橙褐色粘質土層																			
	白砂層																			
井戸周辺	壁面清掃・不明																			
	黄褐色粘質砂・壁面清掃・盛土・不明・表探																			
合計																				



第18図 土器1 (口縁部-I・Ⅲ類)

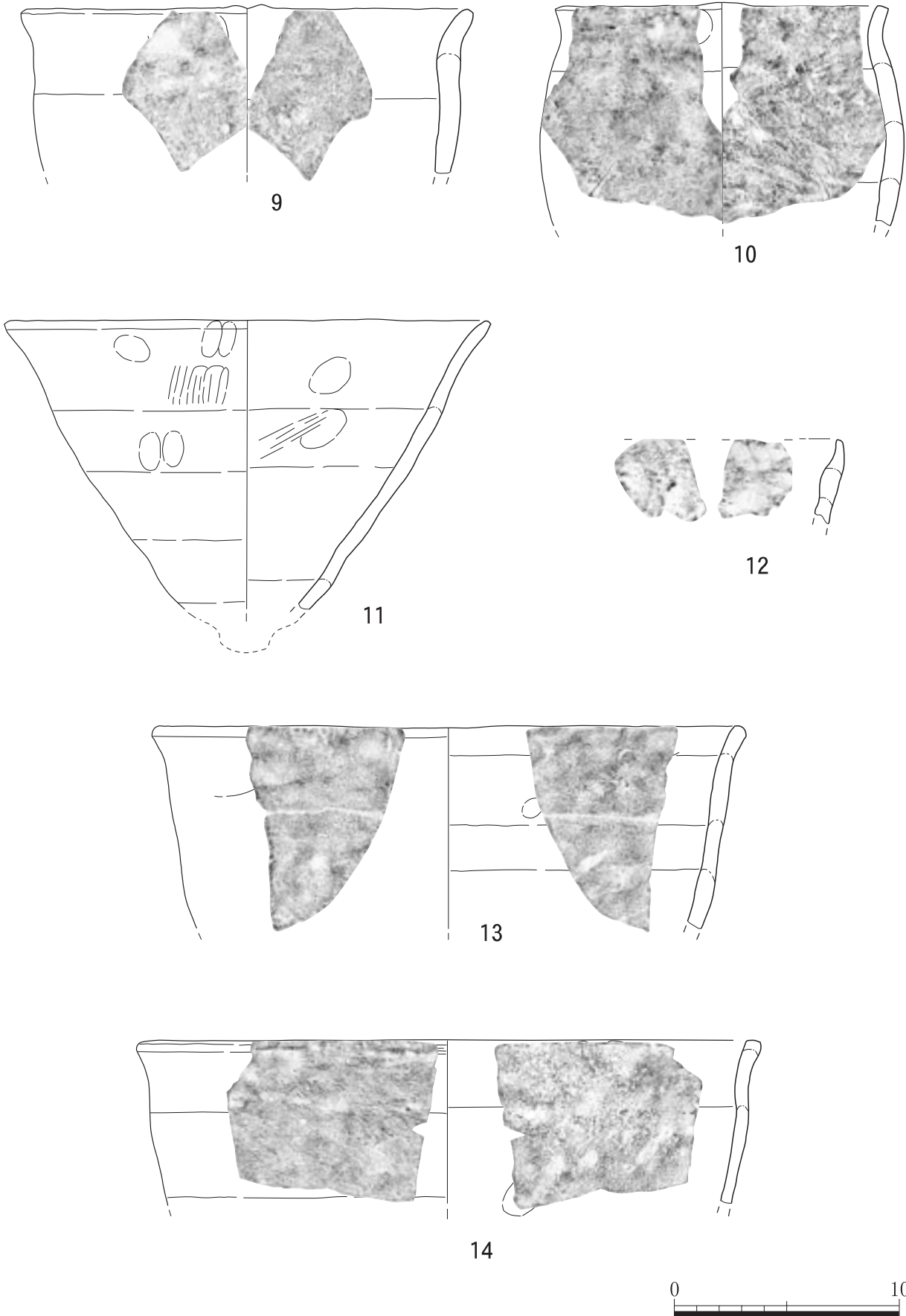


外面

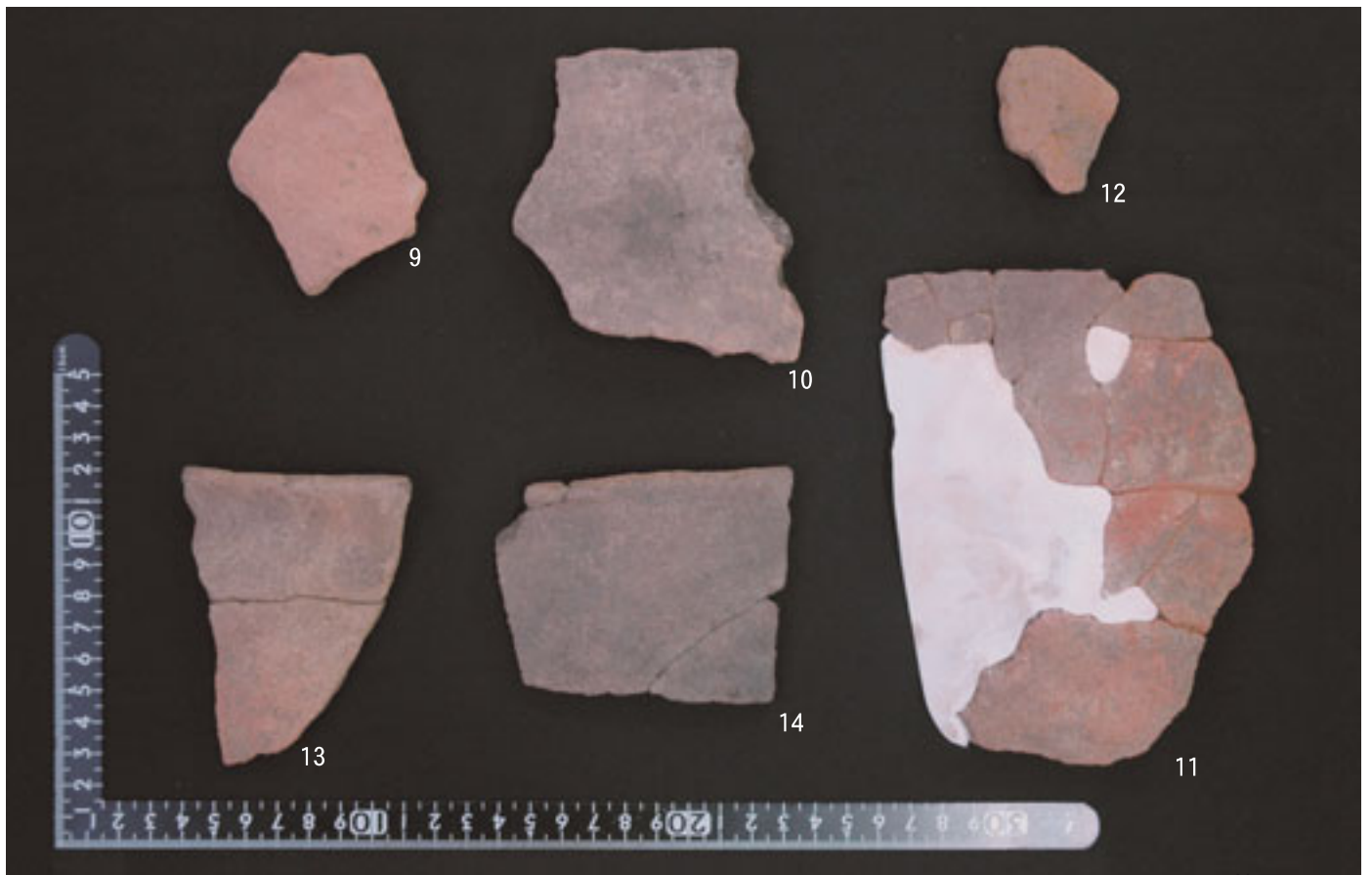


内面

図版10 土器1 (口縁部-I・Ⅲ類)



第19図 土器2 (口縁部-Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類)



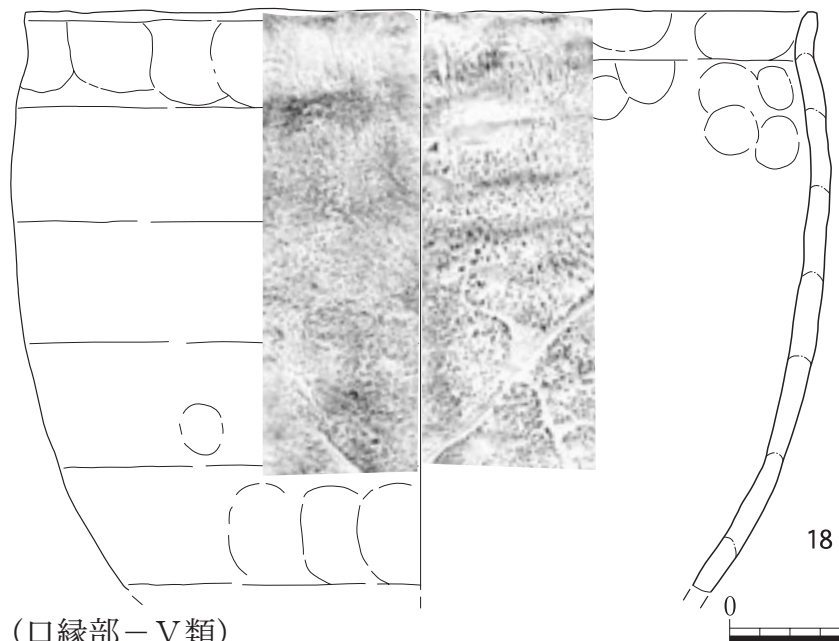
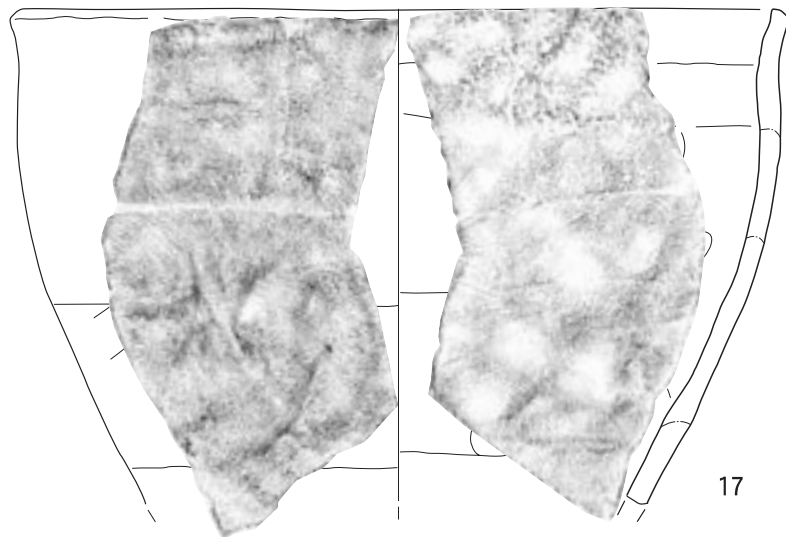
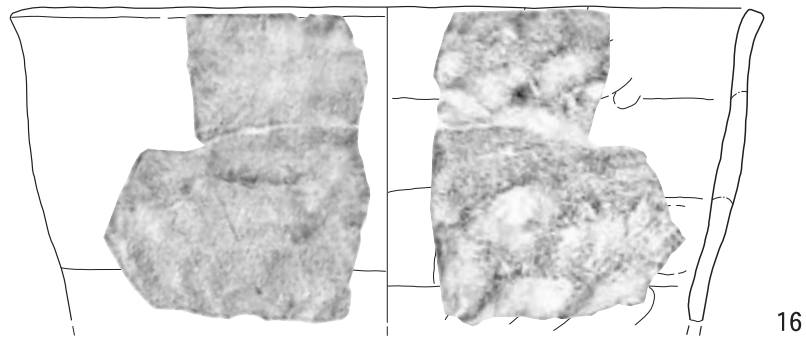
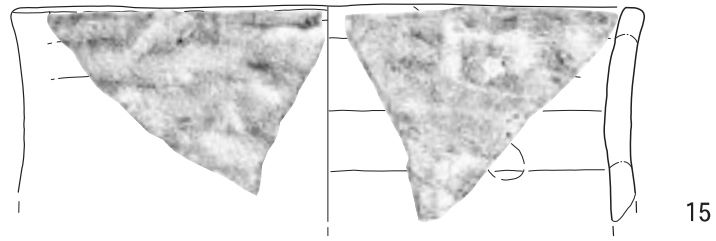
外面



内面

図版11 土器2 (口縁部-Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類)





第20図 土器3 (口縁部-V類)

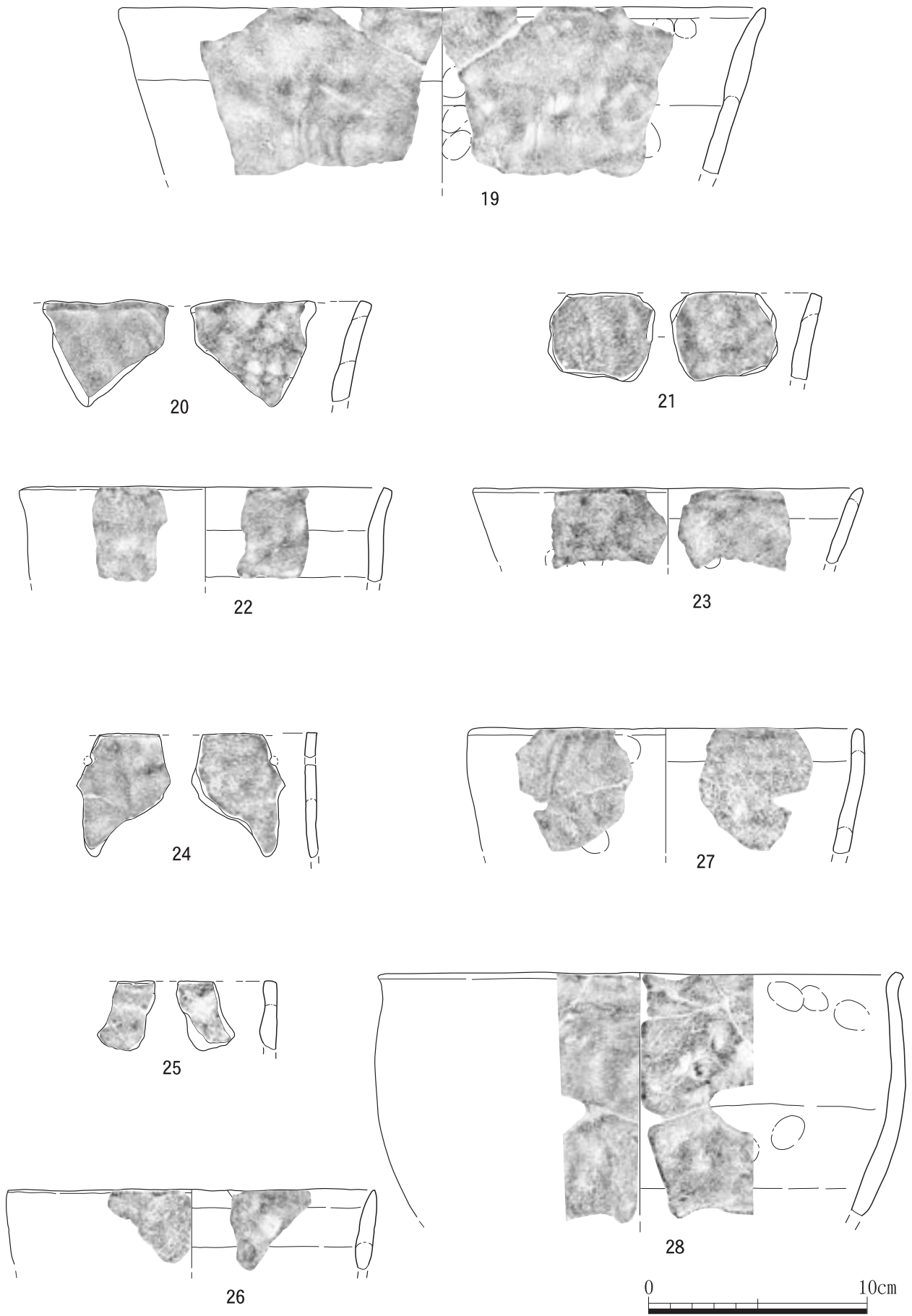


外面

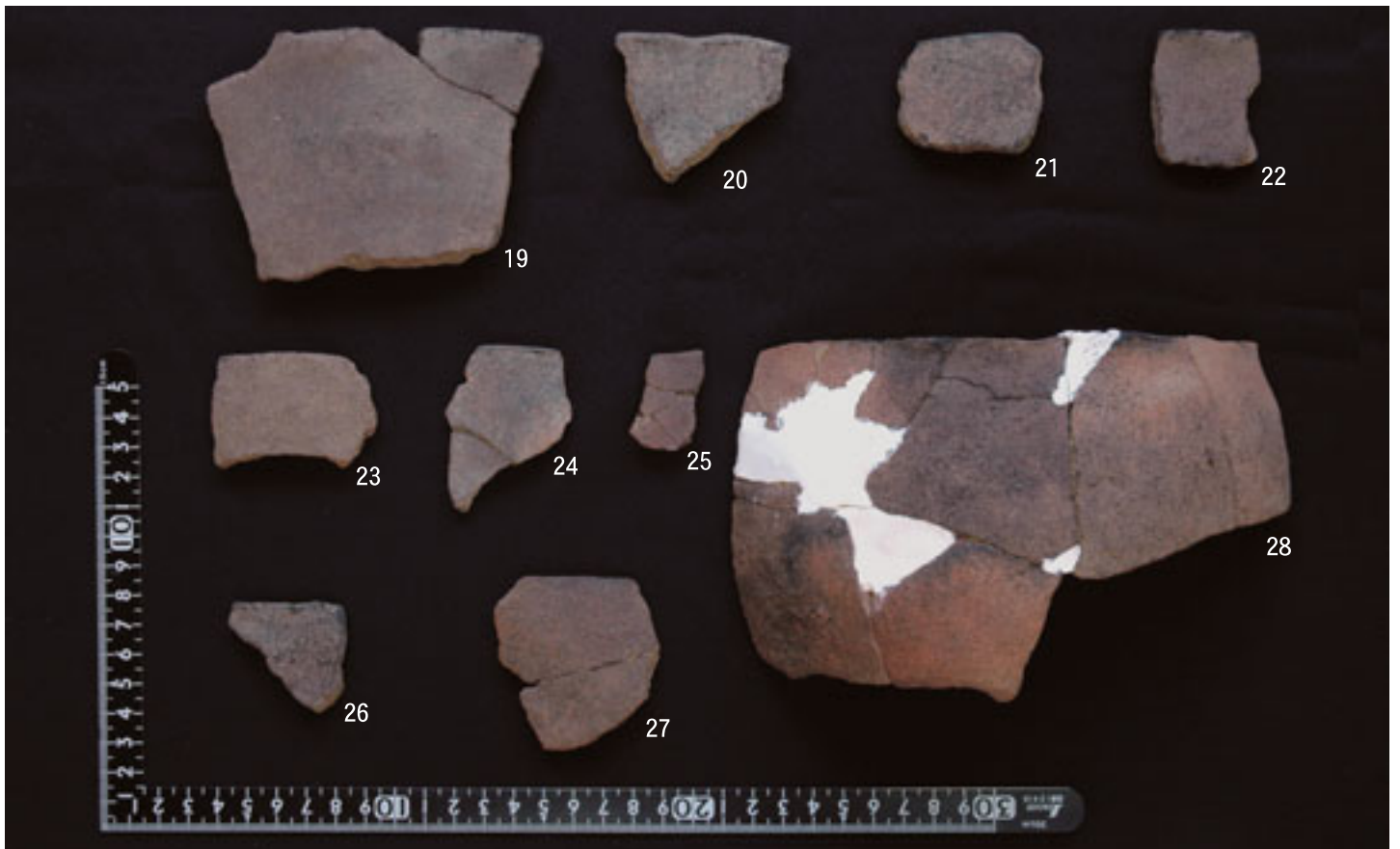


内面

図版12 土器3 (口縁部-V類)



第21図 土器4 (口縁部-V類)

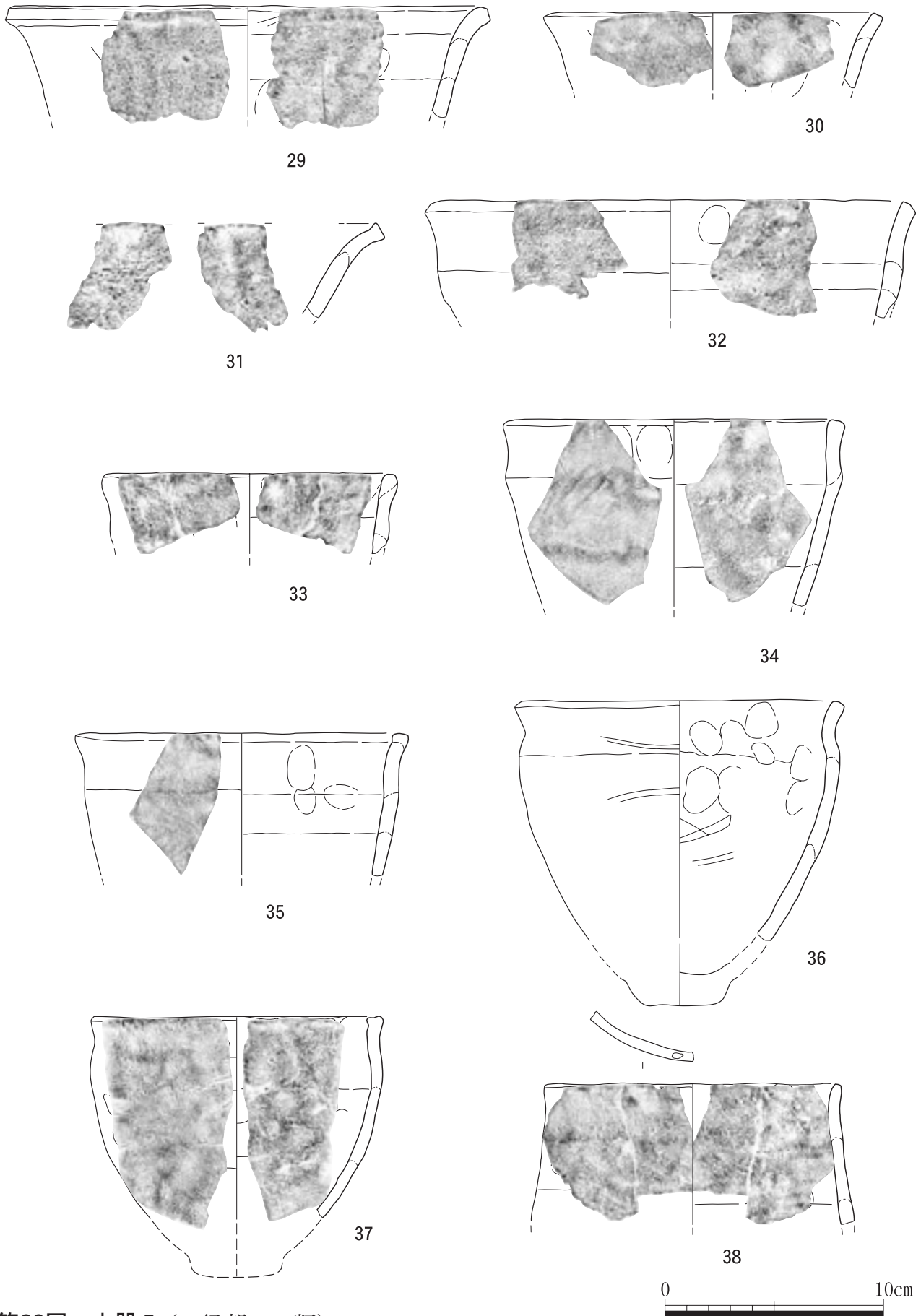


外面

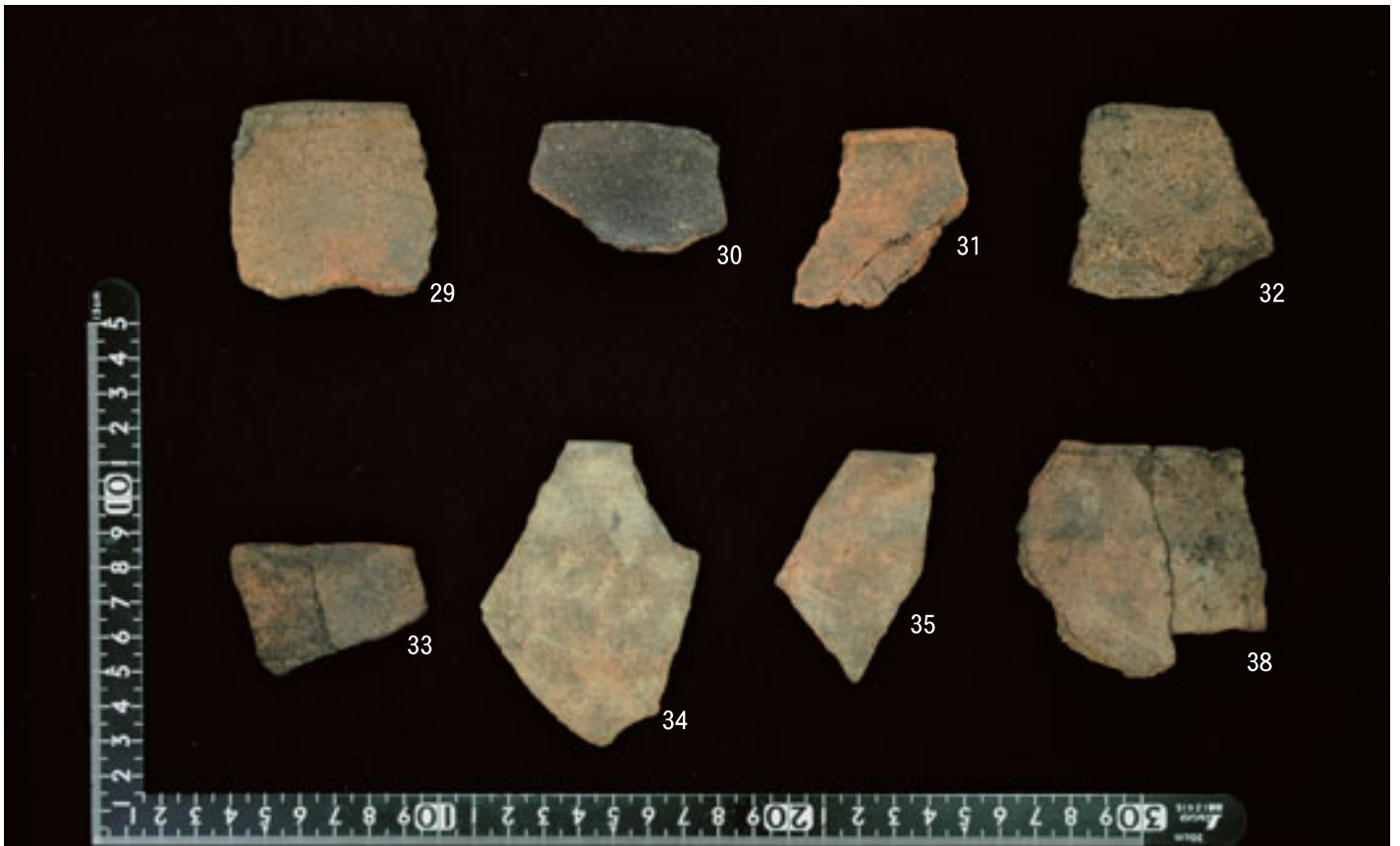


内面

図版13 土器4 (口縁部-V類)



第22図 土器5 (口縁部-V類)

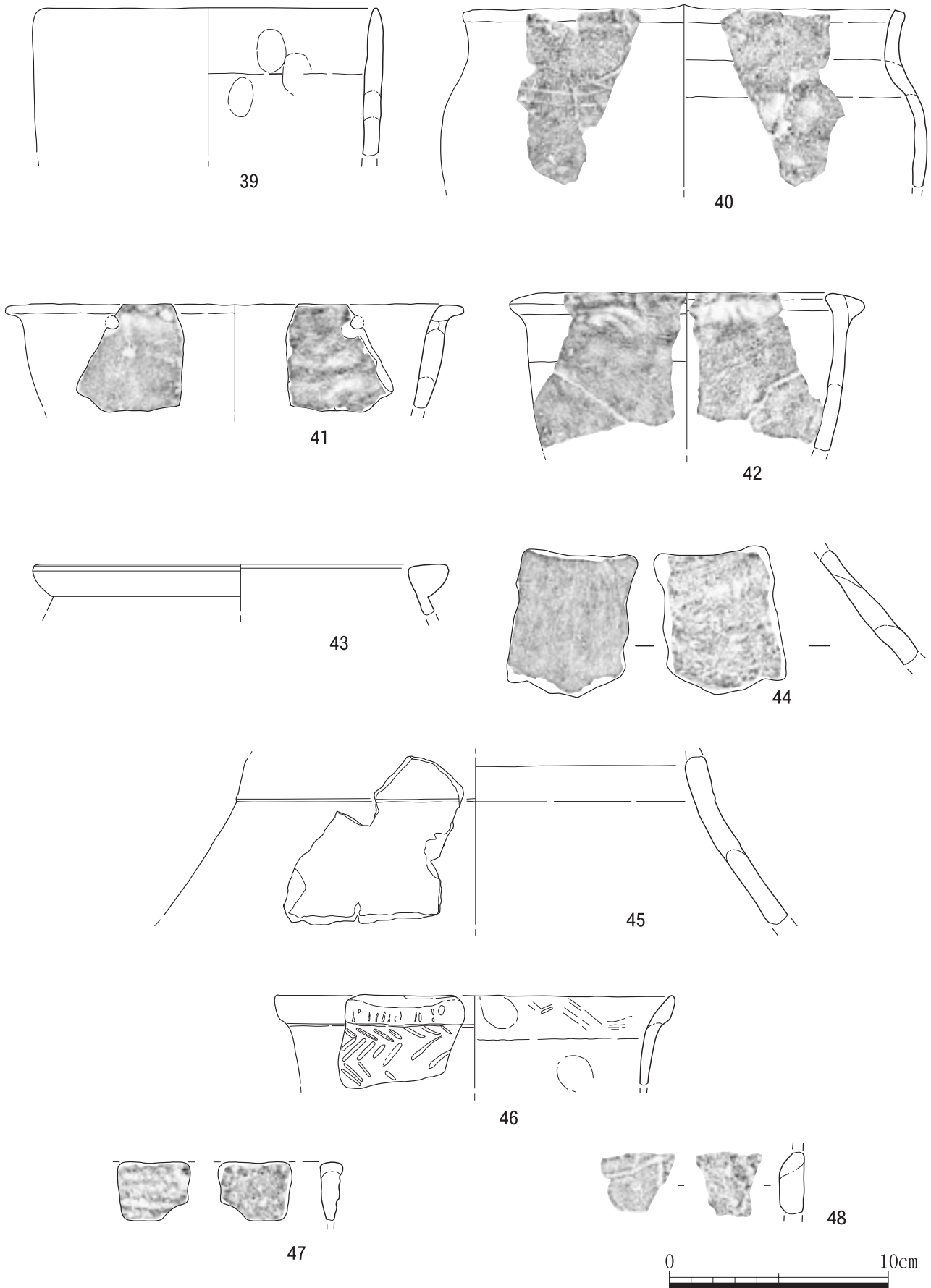


外面



内面

図版14 土器5 (口縁部-V類)



第23図 土器6 (口縁部・胴部-V・VI・VII類)



外面



内面

図版15 土器6 (口縁部・胴部-V・VI・VII類)



## 3) 底部

底部は27点出土した。

出土した底部は平底13点、丸底1点、乳房状尖底10点、くびれ平底3点の計27点出土した。

これらは大きさや形態により、下記のように細分類した。

## 〈分類〉

I類：平底 — Aタイプ：立ち上がりがふくらみ、丸味を持つもの。  
 — bタイプ：立ち上がりがくびれ、丸味を持つもの。  
 — Cタイプ：立ち上がりがくびれ、角を持つもの。

II類：丸底 — 破片の為、詳細は不明。

III類：乳房状尖底 — Aタイプ：小サイズ  
 — Bタイプ：中サイズ

IV類：くびれ平底 — Aタイプ：中サイズ  
 — Bタイプ：大サイズ

表9に層別の出土状況を示し、主なものは第24図、図版16、表8に観察一覧を示した。以下、下記に略述する。

## I類：平底

3～5cmの底径の小さいもので、晩期系土器の底部に類するものである。

Aタイプは底面からの立ち上がりが緩いもので、1点出土した。

図1は底径6.0cmを測るものである。器厚は1.3cmで底面から胴部はほぼ同じ厚さで、胎土は泥質で砂粒を含む。外面はアバタ状が見られ、内外面は指ナデ調整。器形は室川式土器などで見られるが、焼成や器面調整などからは貝塚後期前後に相当するものと思われる。

図2は底径3.2cmで、底面はやや不安定である。焼成は良く、明赤褐色を呈す。内面はヘラナデが強く、新しい感を受ける。

Bタイプは底面からの立ち上がりがくびれるもので、底面が安定しているもので6点出土した。

図3・4・5・6で、底径は3.2cm～4.6cmで小さく、縄文晩期系土器の底部と考えられる。

図3は砂質で、角閃石を含む。器面は内外面とも丁寧に調整される。器色は外面が赤褐色、内面は黒褐色を呈する。破損部は積み痕から取れたものと思われる。底面はわずかに指で押し上げる。

図4は底径4.6cm、胎土は砂質で0.5mmの角閃石と透明粒をやや多く含む。

図5は底径3.7cm、器厚は0.8cmとやや薄く、胎土はやや泥質で0.5mmの透明粒を少量含む。

図6は底径3.2cm、器厚0.98cmと薄い。胎土は砂質で細かい石英が見られるが量は少ない。

Cタイプは底面からの立ち上がりがくびれるもので、底面がやや不安定なもので5点出土した。

図7は砂質で、底径は4.2cmを測る。角閃石を多く含み、図9は底径3.7cmを測る。石英、黒色粒の他、透明粒を多く含むもので、混入物から移入土器の可能性も考えられる。

図10は砂質で0.5mmの透明な粒が見られ、焼成は良い。図11は底径3.3cm、胎土に0.5mmの石英を少量含む。内外面共に暗灰褐色で、丁寧に指ナデ調整が施されている。

Ⅱ類：丸底。小破片のため、図化を省略する。

### Ⅲ類：乳房状尖底

A（小）タイプは浜屋原式土器、B（中）タイプは大当原式土器に類するものである。

Aタイプ（小）7点、Bタイプ（中サイズ）2点、不明1点の計10点出土した。

Aタイプは図12・13・14・15・16である。

突底部の厚さは1.2cm～2.75cmであるが、図13は底厚が最も薄く、尖底の形状も扁平である。

Bタイプは図18・19で、大きいタイプである。乳房部分の厚さは3.7cmと厚く、焼成も良く、石英、赤粒を混入する。大当原式土器の底部に相当する。但し、本遺跡出土の大当原式土器は小ぶりで、別個体と思われる。

### Ⅳ類：くびれ平底

アカジャンガー式土器の類の底部と考える。

Aタイプ（中）2点、Bタイプ（大）1点の計3点出土した。図20と21は中サイズである。図20は底径6.2cm、図21は5.6cmを測る。いずれも赤粒を混入する。

### まとめ

本遺跡はC-19～13まで幅5m×70mの試掘トレンチをあけた。そのうち、土器はC-16・17・18・19で出土した。

口縁部はⅢ・Ⅳ類とも橙褐色粘質土層（③層）、Ⅴ類が黄褐色混貝砂層（④層）で多く出土するようである。

底部はくびれ平底がC-18黒色土層、乳房状尖底がC-18橙褐色粘質土層（③層）で多く見られ、平底が黄褐色混貝粘質砂層・赤褐色砂層（④層）で多く見られる。

胴部の全体の出土量をみるとⅣ類が357点（3,202.81g）、Ⅴ類が351点（3,910.63g）、ほぼ同数で、そのほとんどはC-17・18で主に得られている。Ⅲ類は117点（627.8g）でC-16の茶褐色カワナ層で多く得られた。

これらをみると全体的にⅥ類とⅤ類が④層で多く得られ、その中でもⅤ類が④層、Ⅳ類が③層、Ⅲ類は②層に多くなる傾向を示すようである。

本遺跡は基盤層が不安定で全体として、西側に傾くようである。そのため、土器の出土も取り上げ時に困難であったが、土器の口縁部、底部、胴部の集計表は前述の傾向を表していると言える。

本遺跡の土器は下層（④層）で浜屋原式土器・縄文晩期系土器、③層で大当原式土器、②層は攪乱ではあるが、くびれ平土器が出土した。

⑤層（枝サンゴ層）ではローリングを受けた縄文後期の面縄前庭式土器、面縄東洞式土器が数点出土した。伊礼原E遺跡（2008）と同じような状況が見られ、枝サンゴ層の広範囲に広がっていることが確認された。

Ⅳ類に分類される土器は嘉門貝塚B、平敷屋トウバル遺跡、阿波連浦貝塚Ⅳ・Ⅵ層、宇地泊兼久

原遺跡にみられ、特に宇地泊貝塚に多いようである。

### <参考文献>

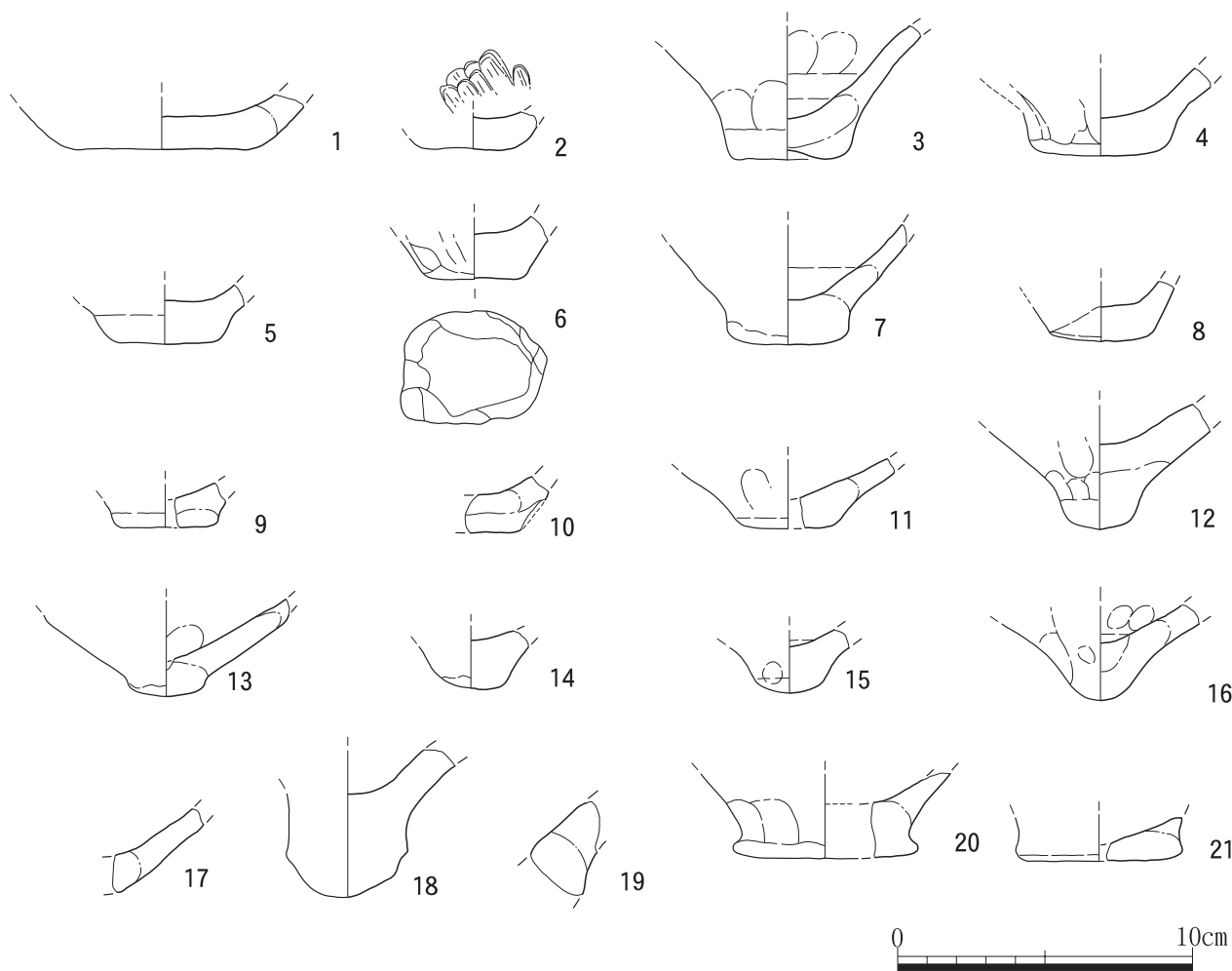
- ・中村愿・東門研治・松原哲志ほか 『伊礼原遺跡』－伊礼原B遺跡ほか発掘調査－北谷町文化財調査報告書 第26集  
北谷町教育委員会 2007年
- ・高宮廣衛・中村愿・金城利枝 「宇地泊兼久原遺跡」『冲国大考古』 第10号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1989年
- ・高宮廣衛・中村愿・知花一正・山城安生・玉城京子・山城直子・西久保敦 「渡嘉敷村阿波連貝塚発掘調査報告書」  
『冲国大考古』 第12号 沖縄国際大学文学部考古学研究室 1999年
- ・「浜屋原貝塚第一次調査報告書」『島嶼の考古』 創刊号 沖縄国際大学考古学研究会 1977年
- ・島袋洋・金城亀信・上原静・金子浩昌・他 『平敷屋トウバル遺跡』－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急  
発掘調査報告書－沖縄県文化財調査報告書 第125集 沖縄県教育委員会 1996年

表8 土器（底部）観察一覧

第図 図版	No.	器種	分類	底径 (cm)	観 察 事 項	出土地
第 24 図 ・ 図 版 16	1	I (平底)	(A) 丸	6.0	底から胴部にかけてほぼ同じ厚さである。胎土は泥質で砂粒を含む。焼成はあまり良くない。外面はアバタ状。内外面に指ナデ調整が見られる。外：褐色。内：暗褐色。底厚：1.2cm。器厚：0.9cm。	盛土
	2			3.2	胎土はやや泥質で少量の石英粒を含む。焼成は良い。外面は指ナデ調整が見られ、内面はヘラでナデられた跡がある。内外器面共に明赤褐色。底厚：1.0cm。器厚：0.75cm。	C-17④層
	3		(B) 丸	4.3	胎土は砂質で、少量の細かい角閃石と透明粒を多く含む。焼成は良い。外面は縦位に指ナデ調整が見られる。内面にも指ナデ調整が見られるが、器面保持が悪い。外：明赤褐色、内：暗茶褐色。底厚：1.1cm。器厚：0.9cm。	C-18③b層
	4			4.6	胎土は砂質で0.5mmの角閃石と透明粒をやや多く含む。焼成は良い。内外面に指ナデ調整が見られる。外：明赤褐色。内：明黄褐色。底厚：1.3cm。器厚：0.9cm。	C-18③b層
	5			3.7	胎土はやや泥質で0.5mmの透明粒を少量含む。焼成は良い。内外面に丁寧に指ナデ調整が見られる。外：暗灰褐色。内：明黄褐色。器厚：0.8cm。	不明
	6			3.2	胎土は砂質で細かい石英が見られる。量はやや少ない。焼成は良い。内外面共に指ナデ調整が見られる。外面の指ナデ調整は縦位に走る。内外面共に暗茶褐色。底厚：1.5cm。器厚：0.98cm。	C-17③b層
	7		(C) 角	4.2	胎土はやや砂質で角閃石と透明粒を多く含む。焼成は良い。外面は明茶褐色、内面は暗黒褐色。内外面に指ナデ調整が見られる。底厚：1.6cm。器厚：0.8cm。	C-17②層
	8			3.5	胎土はやや砂質で細かい角閃石と透明粒を含む。焼成は良い。内外面に指ナデ調整が丁寧に見られる。外：明赤褐色。内：暗茶褐色。底厚：1.1cm。器厚：0.7cm。	不明
	9			3.7	胎土は砂質で、石英、角閃石の他、透明粒を多く含む。移入か？外面は明茶褐色、内面は暗茶褐色。底厚：1.05cm。器厚：0.81cm。	C-18③b層
	10			-	胎土は砂質で0.5mmの透明な粒が見られる。焼成は良い。内外面は指ナデ調整が見られる。外：明赤褐色。内：暗灰褐色。底厚：1.4cm。器厚：1.01cm。	C-18③b層
	11		(C) 不	3.3	胎土は0.5mmの石英を少量含む。内外面共に暗灰褐色で、丁寧に指ナデ調整が施されている。底厚：1.1cm。器厚：0.8cm。	C-17④層
	12	III (乳房状尖底)	(A) 小	2.8	胎土は砂質で細かい角閃石をやや多く含む。焼成は良い。外面は明赤褐色、内面は明灰茶褐色。外面は縦位に指ナデ調整が丁寧に施され、内面には指ナデ調整が見られる。底厚：2.75cm。器厚：1.3cm。	C-18③b層
	13			2.6	胎土は砂質で0.5mmの角閃石、透明粒をやや多く含む。焼成はやや良い。外面は指ナデ調整が見られ、内面には指頭押厚が見られる。外：明赤褐色。内：明灰褐色。底厚：1.2cm。器厚：0.9cm。	C-17③b層
	14			2.8	胎土は砂質で、細かい石英を少量含む。焼成は良い。内外面共に明黄褐色で、指ナデ調整が見られる。底厚：1.5cm。器厚：0.83cm。	C-17③b層
	15			3.0	胎土は砂質で角閃石、透明なガラス質の粒が見られる。量はやや多い。内外面共に明橙褐色で指ナデ調整が見られる。全体的にポーラス状を呈す。底厚：1.4cm。器厚：0.75cm。	C-18③b層
	16			2.0	胎土は砂質で、角閃石、細かい白色粒が見られる。焼成はやや良い。内外面共に明赤褐色で、指ナデ調整が見られる。底厚：2.0cm。器厚：1.0cm。	不明
	17		不	-	胎土は泥質で赤色粒と透明な粒が見られる。量は少ない。焼成は良い。内外面に指ナデ調整が見られる。外：明橙褐色。内：明灰褐色。底厚：1.1cm。器厚：0.7cm。	C-17③b層
	18		(B) 中	4.1	胎土はやや泥質で1mmの石英を少量含む。焼成はやや良い。内面にはハケでナデられた跡が見られる。外：明橙色。内：明灰褐色。底厚：3.7cm。器厚：1.1cm。	C-17③b層
	19	IV (くびれ平底)	(B) 大	-	胎土はやや砂質で、1mmの石英や透明な粒が多く見られる。焼成は良い。内外面は明橙褐色で、共に指ナデ調整が見られる。底厚：計測不可。器厚：2.3cm。	C-17③b層
	20	(A) 中	6.2	胎土は泥質で少量の1mm赤粒を含む。焼成は良い。内外面は指ナデ調整が見られる。外：明橙黄色。内：明茶褐色。底厚：1.8cm。器厚：1.0cm。	C-18③a層	
	21		5.6	胎土は泥質で、赤色粒多く含むことから、アカジャンガー式か？角閃石も見られる。焼成は良い。外面は丁寧に指ナデ調整が見られる。内面は不明。内外面共に暗茶褐色。底厚：0.9cm。器厚：計測不可。	C-17④層	

表9 土器（底部）出土量

出土地	分類	(I) 平底				(II) 丸底	(III) 乳房状尖底			(IV) くびれ平底		層序合計	グリッド合計	
		(A) 丸	(B) 丸	(C) 角	不		(A) 小	不	(B) 中	(B) 大	(A) 中			
C-16	黒褐色カワヒナ	②層				1						1	1	
C-17	黄褐色混貝粘質砂層	④層									1	1	9	
	黄褐色混貝粘質土層	④層								1		1		
	黒褐色混砂土	④層	1									1		
	赤褐色砂層	④層			1							1		
	橙褐色粘質土層漸移	③b層		1				3				4		
	マンガ直上茶褐色粘質土	②層			1							1		
C-18	黒褐色土層	③a層									1	1	12	
	橙褐色粘質土層	③b層		2	2			3	1	1		9		
	西壁			1								1		
	北壁			1								1		
井戸		不明							1			1	1	
不明	盛土	不明					1					1	4	
	不明	不明		1	1			1				3		
合計			13				1	10			3		27	27



第24図 土器（底部）



側面



内面

図版16 土器7 (底部)

## 2. 貝製品

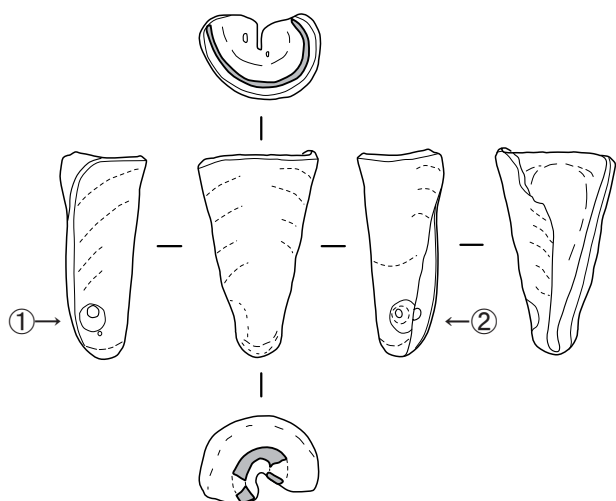
本遺跡出土の貝製品は1点の出土である。出土地はC-17枝サンゴ層直下（⑤層）である。イモガイの体層を用いたもので、尾部の両面に孔をあけたものである。

①は背面の孔で外径8mm、内径3mm、②は腹面の孔で外径8mm、内径2.5mmを測る。

いずれも外面から穿孔したもので、①の側面には1.5mmの穿孔の痕が確認できるが貫通しない。また、貝の縁は斜めにカットされ、すり切りによる加工と考えられる。全体に丁寧な加工が見られることから装飾品と思われる。枝サンゴ層からは面縄前庭式土器・面縄東洞式土器が出土していることから縄文後期の時期に属するものと思われる。

## 3. 骨製品

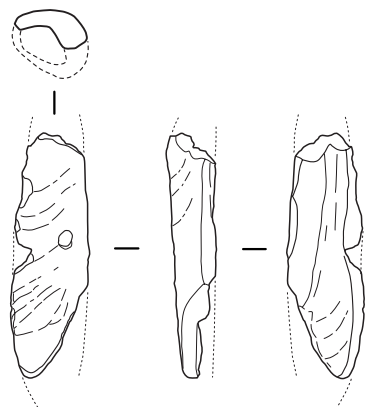
第26図はウシあるいは、ウマの四肢骨を縦位に半裁したものである。破損面に削りの痕が確認される。また、先端は丸味を帯びるが、摩耗か加工かは不明である。外面には斜めに複数のキズが見られるが製品とは言い難い。近世の陶磁器とともに平面清掃で出土。



第25図 貝製品



図版17 貝製品



第26図 骨製品



図版18 骨製品

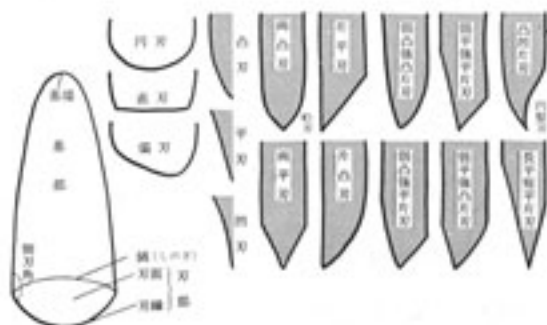
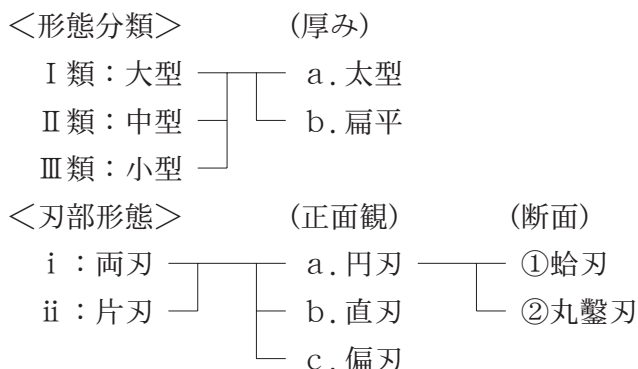


## 4. 石器

石器は破片も含め総数13点得られ、6器種の石器が出土した。器種別では石斧が多く6点の出土で、次いで敲き石2点、磨り石が2点、くぼみ石、石皿、チャートが1点ずつの順となる。詳細は表12に観察一覧を示した。又、出土地からみた器種別の分類を表10に、石質からみた器種別の分類を表11に示し、石斧と敲き石については次のような分類を行った。

### a) 石斧 (第27図1～6)

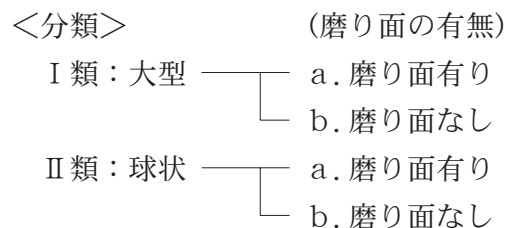
石斧は、6点得られた。そのうち完形が4点、破損品が2点である。分類は右下に示した模式図を参考に、次のように行った。大型、中型、小型で3類に分類し、それぞれの分類に基部断面の厚みで太型と扁平に分け、刃部形態で両刃、片刃、刃縁の正面観で円刃、直刃、偏刃、断面観で蛤刃、円鑿刃に分類した。形態でI類(大型)としたものは基部の厚みが太型、刃部形態は両刃で正面観は円刃、断面の形態は蛤刃である。1点のみの出土で、伐採用の石斧が刃こぼれしたものを敲き石に転用したものと思われる。II類(中型)は基部のみのものを含め3点の出土であるが、刃部のない2点は厚みからすると太型に含め完形のもの1点が扁平のものである。刃部形態は、両刃で正面観は円刃、断面観は蛤刃である。III類(小型)は完形が2点で両者とも扁平の石斧に含めた。刃部形態は、1点が、両刃で正面観は直刃、断面観は蛤刃である。もう1点の資料が両刃で正面観は偏刃、断面観は蛤刃である。



斧身の部分名称と刃の種類<sup>(註1)</sup>

### b) 敲き石 (第28図7・第29図12)

敲き石は2点の出土である。形態別に次のような分類を試みた。出土した形態で2類に分け、次に研磨状況の有無で分類した。どちらの形態も1点ずつの出土である。



### c) 磨り石 (第28図8・11)

磨り石は2点の出土である。1点は完形で中型の磨り石である。敲き痕もみられるが、磨り面のほうが顕著にみられるので磨り石に含めた。もう1点は破片で形態は不明である。

### d) くぼみ石 (第28図9)

くぼみ石は、1点の出土である。中型の石鹼状磨り石と呼ばれるものに近いが裏面は大きく欠損しており表面にあるような研磨とくぼみはみられない。

### e) 石皿 (第28図10)

石皿は1点の出土である。全体の形態は不明であるが、表面と裏面に使用痕がみられる。厚さはそれほど厚くなく使いこんだ形跡は認められない。



f) チャート製品 (第29図13)

チャートは1点の出土である。加工した形跡は確認できるが、使用痕は認められない。剥片石器を剥ぐ母岩としての石核石器として捉えることができる。

表10は層序別にみた器種分類状況であるが、点数が少なくどの層序からも同様な出土である。その中で若干多いのが、C-17・④層(黄褐色混貝粘質砂層)、C-17・⑤層(枝サンゴ層・枝サンゴ層下の白砂層)からの出土で3点である。次いで、C-18・③層(橙褐色粘質砂層)から3点の出土、その他の層序からは各1点ずつとなっている。

表11は、石質別にみた器種分類状況であるが6種類の石質が確認された。最も多く使用されているのは、砂岩で6点の出土である。次いで輝緑岩と斑レイ岩が2点ずつの出土で角閃石安山岩、凝灰質砂岩、チャートは1点ずつの出土である。

石斧の分類別にみても特に使用頻度の高い石質はないが、I類、II類、III類で共通して使われているのが砂岩である。砂岩は敲き石、磨り石、くぼみ石にも使用されている。

輝緑岩は伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡<sup>(註2)</sup>伊礼原D遺跡<sup>(註3)</sup>でも出土し石斧や敲き石に使用されている。火山性の岩石である角閃石安山岩は中部では見られないが本部半島、塩川の採石場に岩脈などが観察される。<sup>(註2)</sup>

表10 石器 層序別出土状況表

器種形態 出土地	石 斧			敲き石		磨り石	くぼみ石	石皿	チャート 製品	合計
	I	II	III	I	II					
C-16 ②層										1
C-17	④層		1		1	1				3
	⑤層	1	1	1						3
C-18	③a層		1							1
	③b層		1			1				2
不明	不明		1			1	1			3
合計	1	3	2	1	1	2	1	1	1	13

表11 石質別分類状況

器種形態 石質	石 斧			敲き石		磨り石	くぼみ石	石皿	チャート 製品	合計
	I	II	III	I	II					
輝緑岩		1	1							2
砂岩	1	1	1		1	1	1			6
斑レイ岩		1				1				2
角閃石安山岩					1					1
凝灰質砂岩								1		1
チャート									1	1
合計	1	3	2	1	1	2	1	1	1	13

以上、石器について記述した。本遺跡から出土する石器は北谷町の周辺遺跡と比べると13点と非常に少ない。石斧と敲き石については分類を試みたが一定の結果を導き出すことはできなかった。

石斧は、6点の出土のうち刃部まで残存するものは4点のみである。分類を試みたが、把握できたことは石斧が小型になる傾向がある事。本遺跡出土の土器の形式からすると同時期の遺跡などをみた場合に小型の石斧が多く出土し、逆に大型の石斧は減少するのではないかという推測である。

敲き石、磨り石、くぼみ石などの出土も石斧と同様な傾向で形態にばらつきがあり特筆する器種は少ない。1点のみ出土したチャートの石核石器は不純物もなく質も良い。製品でなく製品を取り出したほうの母岩としては、側面の形態が船底形と特徴的である。時期は異なるが伊礼原遺跡(註4)では石材として大量にチャートの岩塊が出土した例もあり地理的なことを考えると持ち込まれた可能性も高く、チャートの産出地でない中部の遺跡で出土する事は希である。

<参考文献>

- 註1 「佐原真 石斧論－横斧から縦斧へ」『考古論集 慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集 別冊』1977年
- 註2 『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財調査報告書 第27集 2008年 沖縄県 北谷町教育委員会
- 註3 『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書 第28集 2008年 沖縄県 北谷町教育委員会
- 註4 『伊礼原遺跡』北谷町文化財調査報告書 第26集 2007年 沖縄県 北谷町教育委員会

- ・琉球考古学文献目録・解題 友寄英一郎編 東出版寧楽社 1977年
- ・宮城栄昌・高宮廣衛 編 沖縄歴史地図 考古編 柏書房 1983年
- ・図録『石器入門事典－縄文』 鈴木道之助著 柏書房 1991年
- ・縄文文化の研究 7<道具と技術>編集・加藤晋平 小林達雄 藤本強 1995年 雄山閣
- ・弥生文化の研究 5<道具と技術> 金関怒 / 佐原真 1997年 雄山閣
- ・北谷町文化財調査報告書 第21集 『後兼久原遺跡』 2003年 沖縄県 北谷町教育委員会
- ・北谷町文化財調査報告書 第23集 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』 2005年 沖縄県 北谷町教育委員会

表12 石器観察一覧

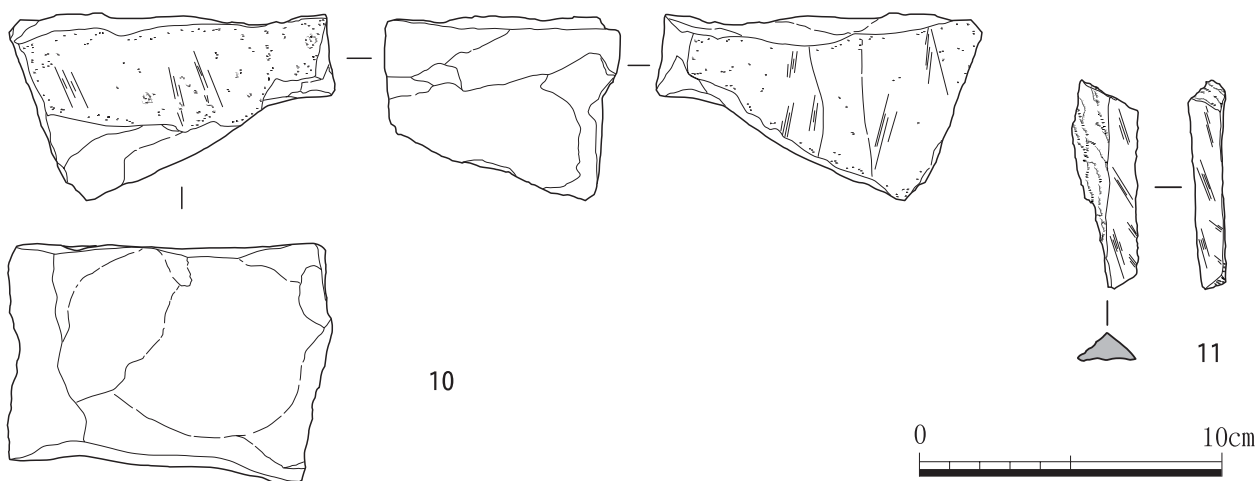
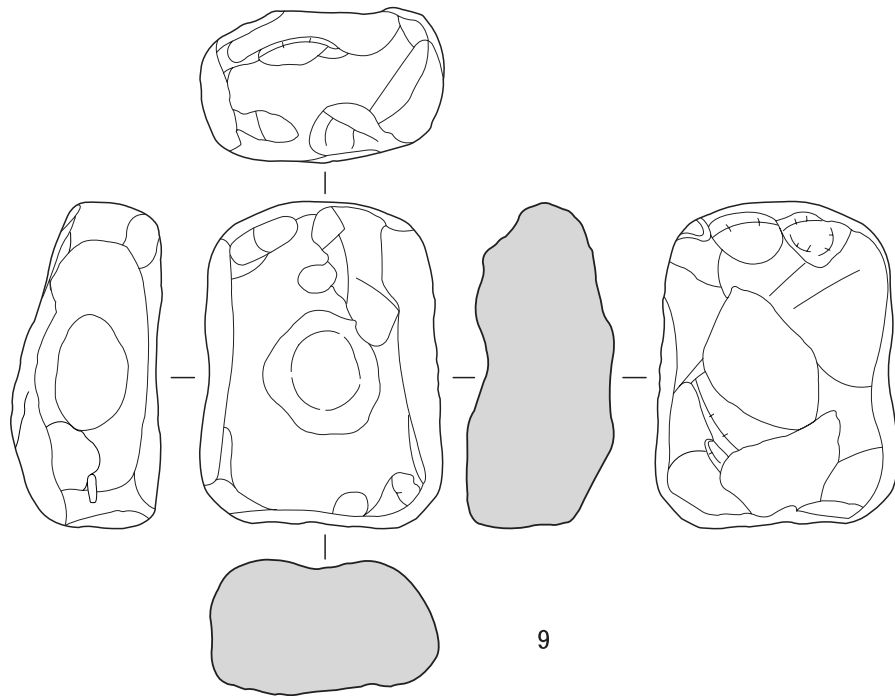
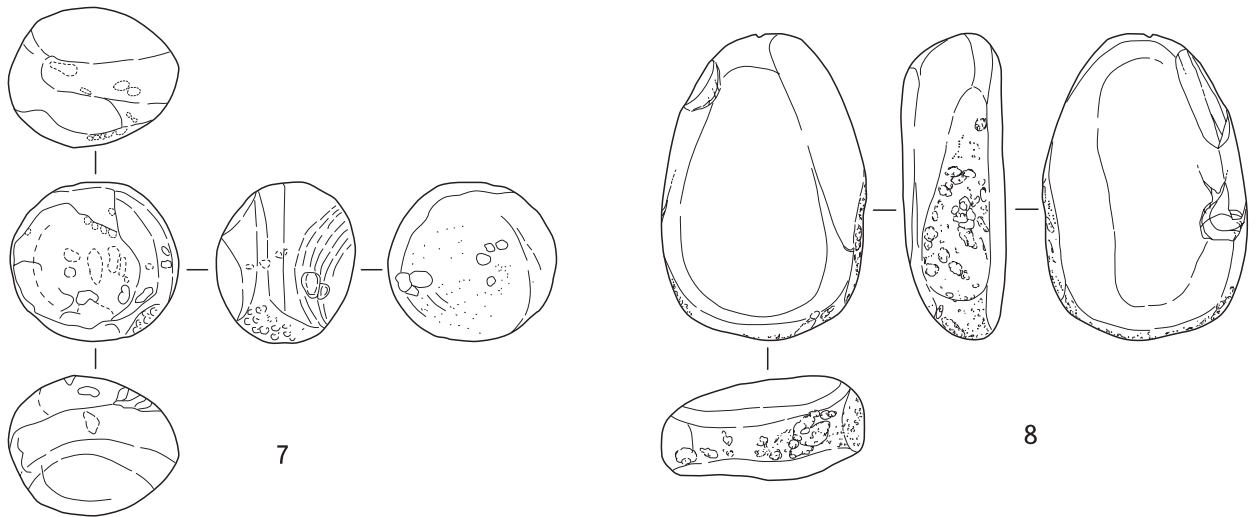
第 図 ・ 図 版	挿 図 番 号	器 種	分類 形態	残存部位	縦 横 幅 重さ (g)	石 質	観 察 事 項	出 土 地
			刃部 形態					
第 27 図 ( 図 版 19)	1	石斧	Ⅲ-b	完形	7.3	輝緑岩	小型の石斧で打割調整は、されており刃部と基部の一部に施された研磨は丁寧で顕著である。	C-17 ④層
			i-b ①		4.8 1.9 105.0			
	2	石斧	Ⅱ-b	完形	10.3	輝緑岩	中型の磨製石斧である。扁刃で刃部の稜線がはっきりしている。刃縁は、刃こぼれ有り。	C-17 ⑤層
			i-c ①		6.2 2.6 294.0			
	3	石斧	Ⅲ-b	完形	6.3	砂岩	小型石斧。磨製で両刃だが刃縁は、ほとんど刃こぼれしている。研磨は基部にも及ぶ。	不明 不明
			i-c ①		4.7 1.8 84.0			
4	石斧転用 敲き石	I-a	完形	14.6	砂岩	大型の磨製石斧。刃部は、両面とも大きく破損。側刃角は明瞭刃縁はつぶれ、敲きに転用したもの。	C-17 ⑤層	
		i-a ①		6.9 3.4 470.0				
5	石斧	Ⅱ-a	基部のみ	9.0	砂岩	基端及び刃部は、大きく欠損する。基部は粗割の後、細かい打割調整と一部に研磨痕が確認できる。	C-18 ③a層	
		刃部・ 不明		5.9 3.4 284.0				
6	石斧	Ⅱ-a	基部のみ	3.6	斑レイ岩	基部の上下及び裏面は欠損。横断面の残存形態は、カマボコ状。研磨の残る部分の状態は顕著。	C-18 ③b層	
		刃部・ 不明		6.2 3.0 82.0				
第 28 図 ( 図 版 20)	7	敲き石	球状	完形	5.3 5.6 4.5 176.0	砂岩	表裏面及び上下、左右、全面に敲打痕あり。完全な球状ではなく前後に若干薄く稜線がみられる。	C-17 ④層
	8	磨り石・ 敲き石	中型・ 扁平	完形	6.8 10.1 3.4 343.0	砂岩	形態は扁平で不定形楕円。磨り面は表裏、両側面に多面的にあり。敲き痕は、両側面と右下面。	C-17 ④層
	9	くぼみ石	中型・ 石罅状	完形	10.8 8.0 5.0 698.0	砂岩	形態は不完全な石罅状。表面と左側面、下面中央にくぼみを有する。くぼみ周辺左右側面に敲きと磨り面。	表採
	10	石皿	形態・ 不明	破片	6.2	凝灰質 砂岩	使用痕あり。表面は二カ所に長楕円の磨り痕と幅広く浅い溝状の、くぼみ有り。裏面に敲打痕と浅いくぼみ。	グリッド不明 黒色ベルト状 の粘質砂層
					10.5 8.0 525.0			
11	磨り石	形態・ 不明	破片	6.9 2.2 1.3 17.0	斑レイ岩	残存形態は不定形。横断面は、三角形状。研磨痕は一面のみで光沢手触りは不明瞭。	C-17・ C-18畦 ③b層	
第 29 図 ( 図 版 21)	12	敲き石・ 磨り石	大型・ 三角型	完形	14.2 16.9 7.9 2000.0	角閃石 安山岩	形態は角のない三角形状。研磨による三方向からの面、稜線をつくる。敲打痕により研磨面がつぶされている。	C-17 ⑤層
					5.0 2.0 1.8 23.0			
13	チャート 製品	石核 石器	完形	5.0 2.0 1.8 23.0	チャート	形態は長楕円で船底形。両側縁が剥離。細かい調整剥離を剥ぐ石核石器と推測。使用痕は認められない。	C-16 ②層	



第27図 石器 1 (石斧)



圖版19 石器 1 (石斧)

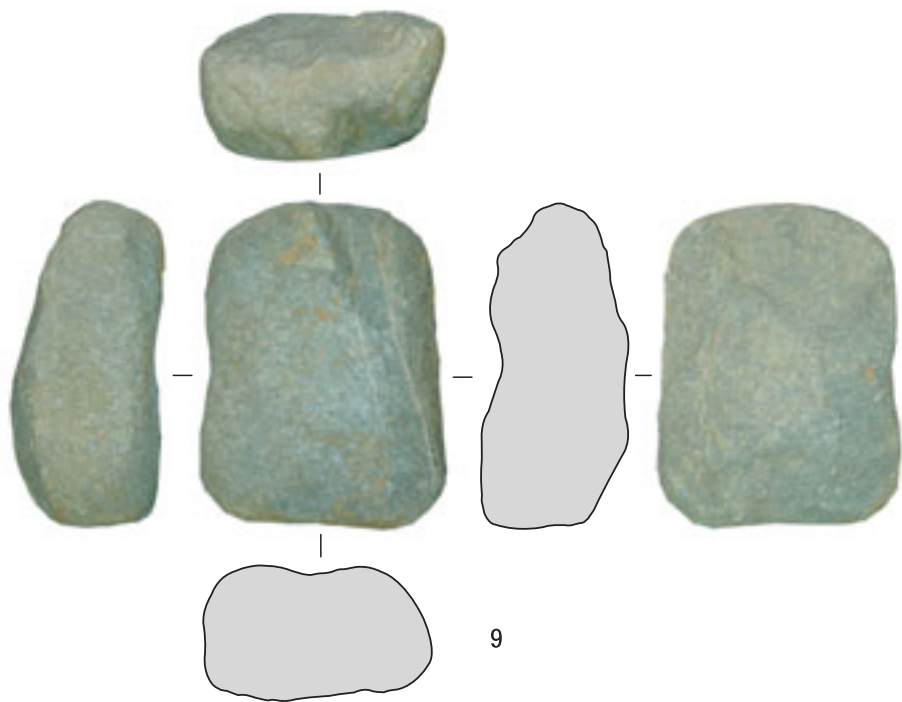


第28図 石器2 (球状石器・敲き石・くぼみ石・石皿)

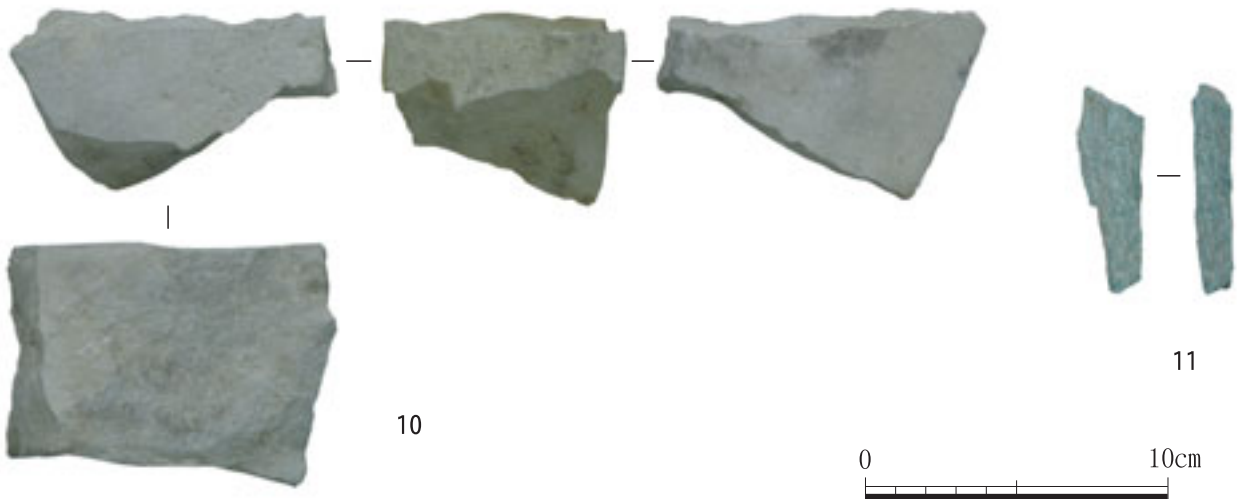


7

8



9

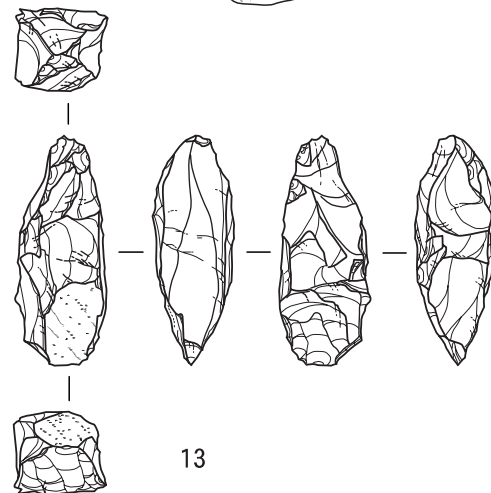
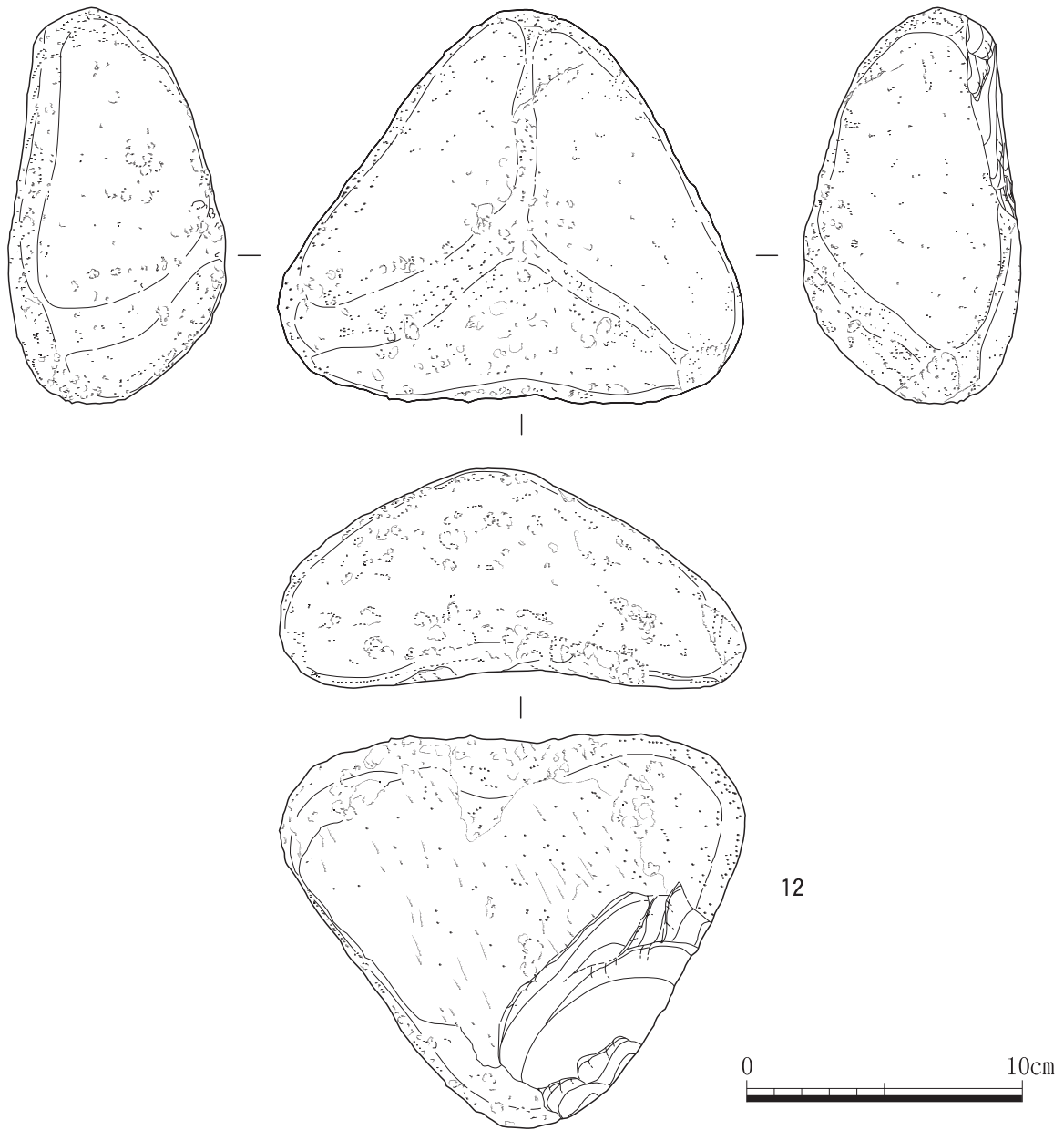


10

11



図版20 石器2 (球状石器・敲き石・くぼみ石・石皿)



第29図 石器3 (敲き石・チャート)



図版21 石器3 (敲き石・チャート)



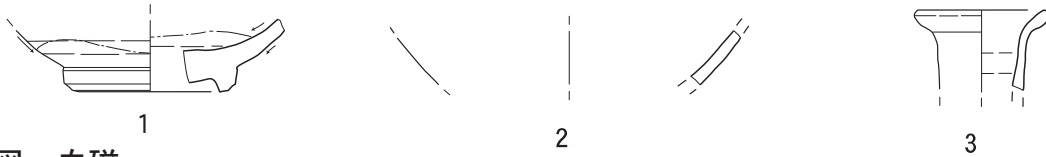
## 5. 白磁 (第30図・図版22)

碗の底部1点、胴部1点、瓶の口縁部1点の計3点出土した。

図1は碗の底部で、畳付けは内側に削る。施釉についてみると外面は腰部から内底、内面も内底は無釉である。胎土は乳色を呈する。C-16マンガン直上(②層)の出土である。

図2は胴部で、腰部にはヘラ削りが施される。釉は灰白釉であり、沈砂地近くの黒色ベルト状の粘質砂層で出土。

図3は瓶の口縁部である。口径4.2cmの長頸の瓶で、なで肩状の形を呈するものと思われる。口唇は幅8mmの玉縁状を呈し、やや外反する。釉は白色である。内側に轆轤痕が見られる。井戸周辺で出土。



第30図 白磁



図版22 白磁



## 6. 青磁

青磁は碗3点、小碗1点、皿3点の計7点出土した。出土地はトレンチ北側井戸周辺やC-13・15の攪乱層で出土。図1～3は碗、図4～6は皿である。以下、個別に略述する。

### a. 碗

図1は碗の底部で、底径6.4cmを測る。外底は蛇の目釉剥ぎが施される。内底は印花文が見られ、胎土はサンドイッチを呈し、外側は灰色、中部は茶褐色を呈する。釉は明緑色、表面採集。

図2は底径4.8cmを測る。高台内は釉剥ぎが施され、畳付けは舌状に細い。内底は印花文が確認できる。釉は明緑色、胎土は灰色で貫入が入る。トレンチ北側井戸拡張時に出土。

図3は底径5.8cmを測る。外底の高台内は釉剥ぎし、外縁に複数の剥離痕が確認され、円盤状の可能性もある。黒色ベルト状の粘質砂層より(下層には肌色の砂層有り)出土。

### b. 皿

図4は腰折れの皿で、口径11.2cm、器高3.0cm、底径4.9cmを測る。外底は高台内釉剥ぎが見られ、内底に印花文が施される。C-13グリッド西壁(②層)の出土。

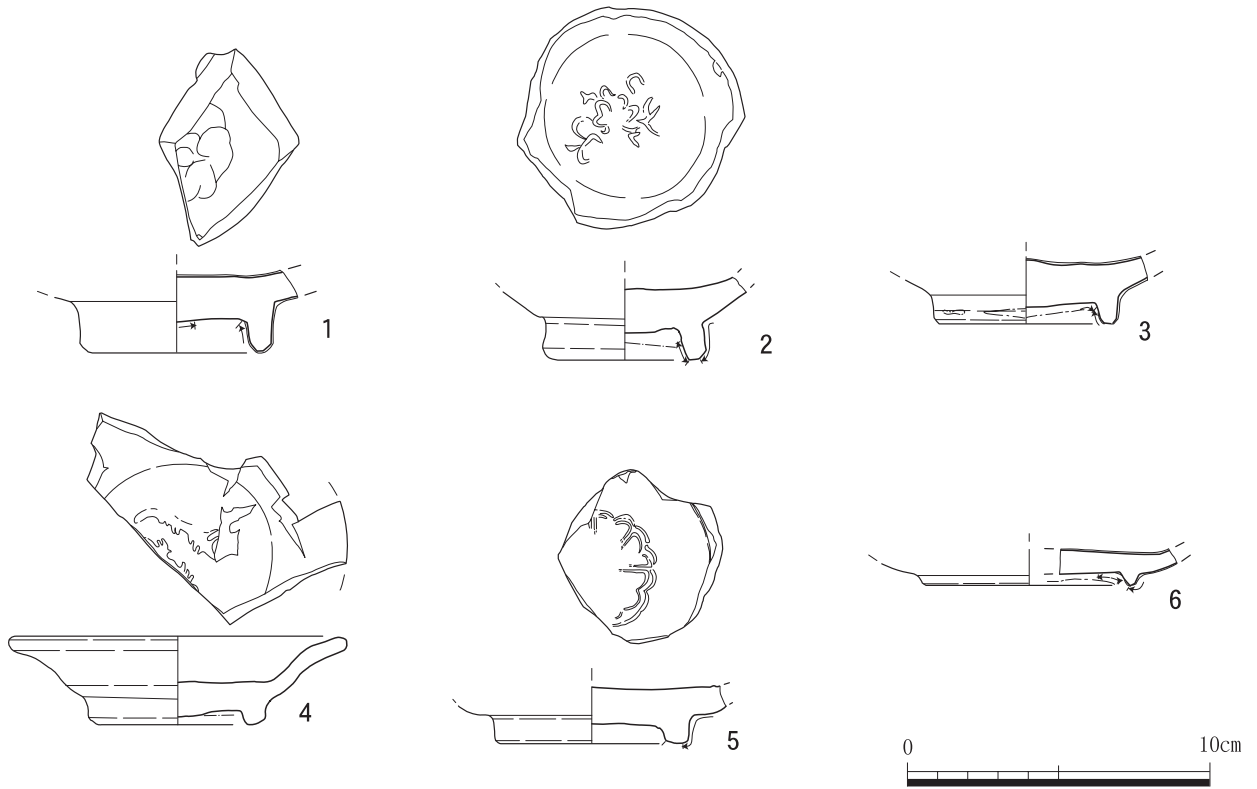
図5は底径6.2cmを測る。外底は高台内釉剥ぎ、畳付けは磨きが見られる。二次利用の可能性もある。内底は八宝の印花文が施される。釉は暗緑色、胎土は灰色を呈する。C-15攪乱層(①層)より出土。

図6底径7.0cmを測る。腰部に蓮弁文が施される。外底は高台内釉剥ぎが施され、釉はオリーブ色で、胎土は貫入多い。トレンチ北側の井戸周辺で出土。

青磁は15世紀代のものと思われるが、胎土の質は悪いようである。

表13 青磁出土量

出土地	器種	皿			碗		小碗			層別合計	地区合計
		口	底	口~底	口	底	口	胴	底		
井戸周辺		1			1					2	2
C-13	②層			1						1	1
C-15	①層		1							1	1
C-17	②層						1			1	1
不明	不明					2				2	2
合計				3		3		1		7	7



第31図 青磁



図版23 青磁

## 7. 染付 (第32図・図版24)

器種は碗14点、小碗5点の計19点である。

出土地は井戸周辺9点、C-17マンガン直上(②層)1点、壁面清掃、不明などで9点出土。

福建・広東系で18世紀～19世紀に属する。

図1は碗で、口縁部～底部まで残存する。直口口縁で、見込みは蛇の目釉剥ぎ、畳付け無釉である。高台は逆三角形に細くなる。外面にコンニャク版で花文を施す。

18～19前半に福建・広東系の染付である。口径15.2cm、器高6.3cm、底径8.2cmを測る。平面清掃で出土。

図2は前述と同じく、福建・広東系の染付で、コンニャク版で文様を施す。直口口縁で、口径14.4cmを測る。前者と同じく、平面清掃である。

図3は碗の底部で、径8.7cmを測る。文様は見込みに圈線が1本施され、外面は胴部に唐草文を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎ、畳付けは無釉で、高台はやや丸味を帯びる。胎土は乳白色を呈する。出土地は不明。

図4は碗の底部で、底径7.3cmを測る。見込みは無釉で、外面は畳付け～内底無釉で、高台の形状は逆三角形に細い。胎土は乳白色で、福建・広東系。平面清掃で出土。

図5は碗の底で底径7.6cmを測る。文様は外面に唐草文が施され、見込みは蛇の目釉剥ぎ、外面は畳付け無釉、断面は削られ、舌状を呈する。福建・広東系である。平面清掃の出土。

図6大鉢か碗の底部で、底径9.2cmを測る。文様は外面に僅かに確認される。見込みは蛇の目釉剥ぎ、外底は畳付け無釉である。井戸周辺で出土。

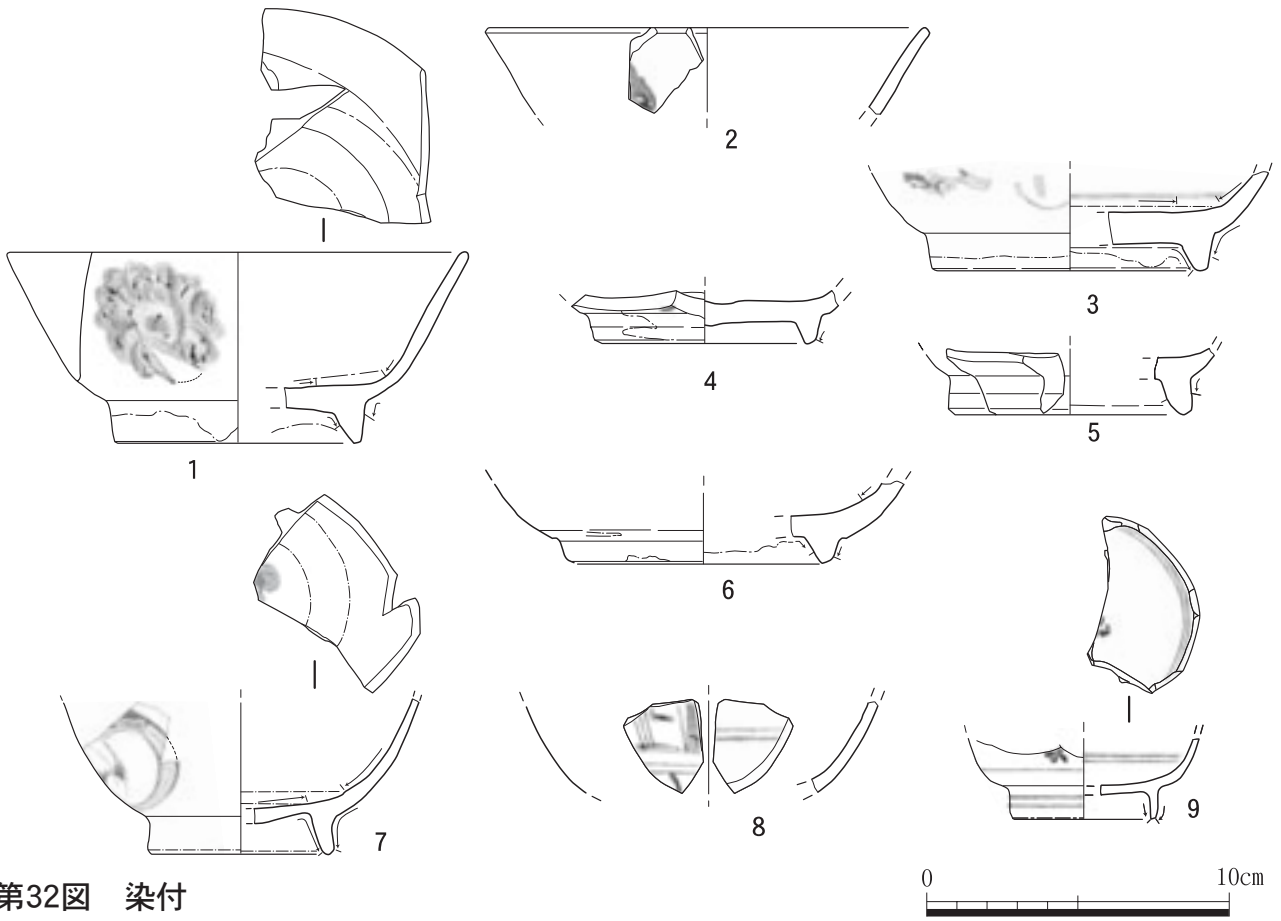
図7は碗で、腰部は丸くなる。文様は外面に丸文、見込みに文様が見られ、見込みに蛇の目釉剥ぎ、畳付け無釉である。盛土。18世紀～19世紀のものでと思われる。

図8碗の胴部で外面の文様は腰部に蓮弁文、見込みには圈線が2本施される。福建・広東系で、18世紀～19世紀前半のものでと思われる。井戸周辺から出土。

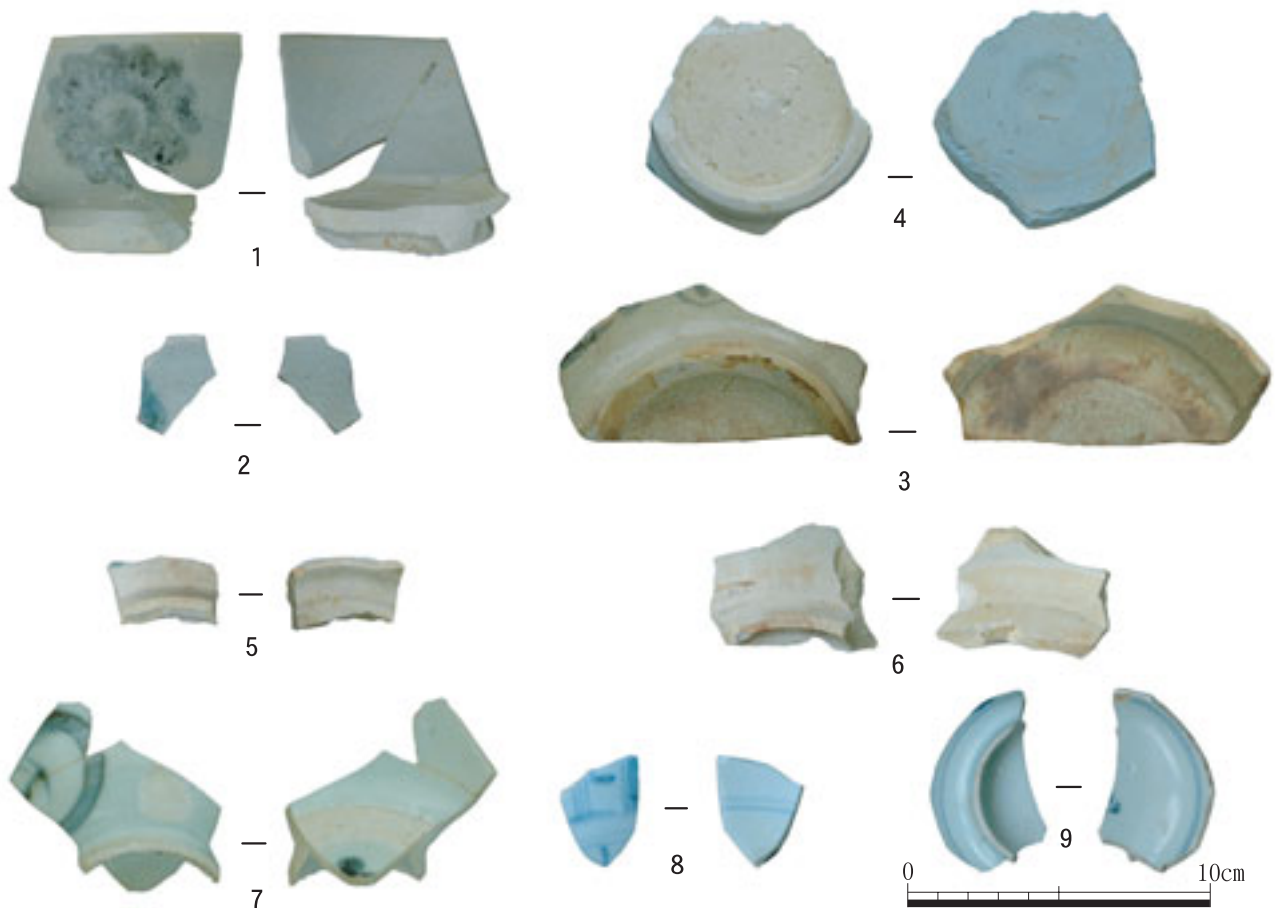
図9小碗の底部で、底径4.7cmを測る。文様は外面に唐草文、見込みに圈線2本と花文を施す。釉は畳付けのみ無釉である。壁面清掃で出土。

表14 染付出土量

出土地		器種	碗				小碗				合計	地区・層序 合 計
			口	胴	底	口～底	口	胴	底	胴～底		
C-17	②層					1				1	1	
井戸周辺			1	5	2		1			9	9	
不明	壁面清掃			1		1				2	9	
	平面清掃				1					1		
	不明			4			1		1	6		
合 計			14				5				19	19



第32図 染付



図版24 染付

## 8. 沖縄産施釉陶器 (第33図・図版25)

器種は碗21点、小碗6点、皿3点、鍋8点、瓶6点、鉢7点、急須5点、酒器1点、壺6点、壺or瓶1点、香炉1点、火取2点、不明1点の計68点が出土した。

出土地別には井戸周辺で42点、C-15、C-17でそれぞれ1点、C-18で3点、不明21点が出土している。

### a. 碗

フィガキー、かけ分け、白化粧の種類が見られる。

図1・2はフィガキーで施釉されたもので、図1は灰釉、図2は茶釉であるが、いずれも透明釉である。素地の色により、発色が異なったものと思われる。

図2は内面に白化粧土をハケで塗り、文様としたものである。

図3はかけ分けの施釉で、外面は黒釉、内面は透明釉をかけるが、白化粧はない。外面に重ね焼のための熔着が見られる。器形は腰部が丸くなり、見込みは蛇の目釉剥ぎである。

図4は外反口縁部、白化粧、無文。

図5は胴部で、外面、腰部に2本の圈線と草花文と思われる。

### b. 小碗

図6と7は小碗である。

図6はかけ分けで内面は白化粧後に透明釉を施す。やや外反気味である。

図7は白化粧を施したものである。外面は面取りされる。面取りの幅は12mm、最大13mmで口縁方向に幅が広がる。

### c. 皿

図8と9は皿である。前者は口径が約13cmで中サイズ、図9は小サイズである。前者の施釉はフィガキーで、黒釉、後者は見込みに蛇の目油剥ぎ、外底は腰部から外底は無釉となる。釉は内外面とも黒釉を施す。

### d. 鉢

図10は逆「L」字状を呈し、幅は13mmである。

かけ分け、白化粧を施す。

図11の見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。

外面は腰部から内底は無釉。

釉は黒釉。腰部は丸味を帯びる。

油壺の可能性もある。

### e. 瓶

図12と13・14は瓶である。

釉はいずれも黒釉で、内面は無釉である。

前者は小ぶりで、図13・14はやや大きい。

図12は素地は灰白地で、図13・14は乳白色である。

文様は図13は胴中部に3本の圈線を施す。

### f. 急須

急須は小(図15・16)と大(図17)注口(図19)がある。

図15は白化粧はなく、外面は線彫りで加飾する。文様は縦位に短長を組み合わせる。

素地は灰白地で、沖縄産施釉陶器のなかでは良質のものと思われる。

図19は注口で、黒釉を施す。内面は乳白色、内部は灰色である。

図16・17は黒釉で、内面は無釉である。

g. 酒器

図18は「カラカラ」と呼ばれるもので酒器とされるものである。

図18は肩部が角をなすもので、釉に白化粧は見られない。内面は無釉。

素地は灰白地である。黒釉の濃淡で文様を施す。頸部に2本の圈線を圍繞する。

h. 火取

図20は口唇部に呉須を施し文様とする。釉は白化粧の後、透明釉を施す。

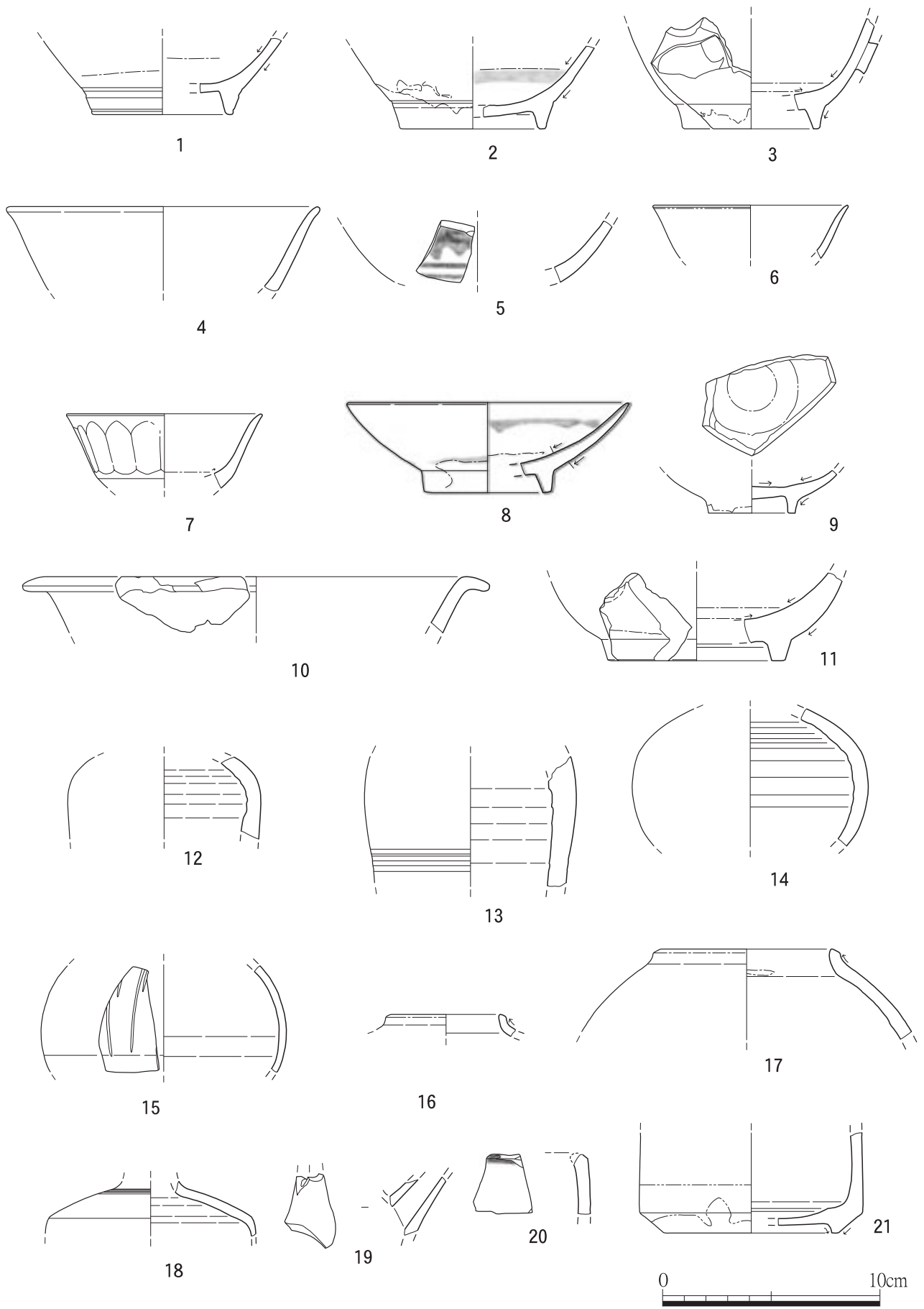
図21図は底部で、内面と外底は白化粧を施す。

表15 沖縄産施釉陶器出土量

出土地 層序		器種															合計	層別合計	地区合計	
		碗	小碗	皿	鍋	瓶	鉢	大鉢	急須	酒器	壺	油壺	壺or瓶	香炉	火取	不明				
井戸 周辺		口	4	3				3	2						1		13	42	42	
		胴	7	2		1	1	1		1	1	3	1				19			
		注口							1								1			
		胴～底													1		1			
		底	1			2		2		1						1	7			
	不明			1												1				
C-15	①	口～底			1												1	1	1	
C-17	③b	底	1														1	1	1	
C-18	壁面清掃	胴	1			1											2	2	3	
	③b	胴					1										1	1		
不明	壁面清掃 表採・盛土	口	1	1		1											3	21	21	
		胴	4			3	4		1		1	1		1			15			
		底	2		1												3			
合計			21	6	3	8	6	3	4	5	1	2	4	1	1	2	1	68	68	68

表16 沖縄産施釉陶器観察一覧

第図 図版	挿図 番号	器種	部位	計 測	観 察 事 項	出 土 地
第 33 図 ・ 図 版 25	1	碗	底 部	底径 6.4cm	畳付け一舌状。胎土：灰色。外内面：透明釉。白化粧無。フィガキー灰釉	c-17 ③b層 021121
	2	碗	底 部	底径 6.7cm	腰部はまっすぐ。文様：内面、見込み近くに白化粧、はけめで文様。胎土：茶色。外内面：透明釉。白化粧無。内面一白化粧か。フィガキー茶釉	壁面清掃 020828
	3	碗	底 部	底径 6.3cm	外面に熔着痕。胎土：灰色。外面：黒釉。内面：透明釉。白化粧無。見込み蛇の目釉剥ぎ、内底無釉外面、腰部～底面無釉。	トレンチ北側 井戸周辺 020816
	4	碗	口縁部	口径 13.3cm	やや外反。胎土：乳白色。外内面：透明釉。白化粧有り。	盛土 020726
	5	碗	胴 部		腰部丸い。文様：呉須一草花文。胎土：胎土。外内面：透明釉。白化粧有。	盛土 020726
	6	小碗	口縁部	口径 9.0cm	やや外反。胎土：灰色。外面：黒釉。内面：灰釉。白化粧無。かけわけ白化粧。	トレンチ北側 井戸拡張時 021022
	7	小碗	口縁部	口径 9.0cm	玉縁口縁。文様：面取り。胎土：赤～灰色。外内面：透明釉。白化粧釉。	盛土 020726
	8	皿	口縁部	口径 12.95cm 器高 4.15cm 底径 5.8cm	直口口縁。文様：内外面は釉たまり。胎土：赤褐色。外内面：灰釉。白化粧無。フィガキー黒褐釉はげている。	c-15 ①層 021007
	9	皿	底 部	底径 4.0cm	畳付け一角。胎土：灰色。外内面：黒釉。白化粧無。見込み蛇の目釉剥ぎ、内底無釉。	表採 020809
	10	大鉢	口縁部	口径 21.5cm	逆「L」字状で幅13mm。胎土：乳白色。外面：黒釉。内面：透明釉。白化粧有。かけ分け	トレンチ北側 井戸周辺 020816
	11	鉢	底 部	底径 8.1cm	腰部丸い。胎土：乳白色。外面：黒釉。白化粧無。見込み蛇の目釉剥ぎ。	トレンチ北側 井戸周辺 020816
	12	瓶	胴 部	最大胴径 8.8cm	胎土：灰色。外面：黒釉。白化粧無。	表採 020917
	13	瓶	胴 部		胴部に圏線。胎土：乳白色。外面：黒釉。白化粧無。	表採 030226
	14	瓶	胴 部		外面：黒釉。白化粧無。	トレンチ北側 井戸拡張時 021022
	15	急須	胴 部	最大胴径 11.2cm	文様：線彫り一縦位。外面：透明釉。白化粧無。	壁面清掃 020828
	16	急須	口縁部	口径 5.4cm	胎土：乳白色。外面：黒釉。白化粧無	トレンチ北側 井戸周辺 020815
	17	急須 (大)	口縁部	口径 7.8cm	口唇一舌状。胎土：乳白色。外面：黒釉。白化粧無	トレンチ北側 井戸周辺 020820
	18	酒器	頸 部	胴径 9.7cm	胴部一角あり。文様：頸部に圏線2本、黒釉で文様。胎土：灰白。外内面：黒釉。白化粧無	トレンチ北側 井戸周辺 021025
	19	急須	注 口		外面：黒釉。白化粧無	トレンチ北側 井戸周辺 020820
	20	火取	口縁部		口縁は逆「L」字状。文様：口唇一呉須。胎土：乳白色。外内面：透明釉。白化粧有	トレンチ北側 井戸周辺 020814
	21	火取	底 部	底径 8.1cm	文様：腰部に化粧土で文様。胎土：乳白色。外面：透明釉。内面：白化粧。白化粧有。畳付け無釉	トレンチ北側 井戸拡張時 021022



第33図 沖縄産施釉陶器





図版25 沖縄産施釉陶器

## 9. 沖縄産無釉陶器

沖縄産無釉陶器は井戸周辺53点、C-13②層1点、C-16②層1点、C-17②層1点、⑤層1点、C-18・17畦③b層1点、C-18壁面清掃2点、C-19平面清掃7点、盛土や平面清掃など44点の計111点出土した。

器種別には瓶3点、鉢2点、すり鉢12点、火炉1点、壺38点、壺or瓶1点、水甕1点、壺or甕43点、不明10点である。

### a. すり鉢

口縁部6点、胴部5点、底部1点の計12点出土した。

そのほとんどは北側に拡張した井戸及びその周辺で出土。

口縁部の形状から2種に分ける。

a種：「L」の幅が10mm前後と逆「く」字状に湾曲し、口縁の立ち上がりがまっすぐとなる。

b種：口唇が逆「L」字状に折れ曲がり、口唇幅が15mm以上を呈するもの内面に施された櫛目幅はいずれも15mm前後である。

#### a種

図1・2の「く」字状は口唇幅が15mm前後で櫛目部分に轆轤の稜が残すようである。図6も櫛目部分に轆轤の稜を残すことから口唇は「く」字状と考えられる。

図3は口縁部直下に圈線が施され、内面にマンガン釉が施される。上部が凸状を呈することから本種に属するものと思われる。

#### b種

図4・5で、口唇幅は図4が幅15mm、図5は口唇幅30mmで、両者の口唇には圈線を繞らす。櫛目はやや斜めに施され、内面に稜は認められない。

図6・7は胴部である。

図6は内面が轆轤による凹凸が見られ、その為、櫛目も不安定であることからa種に属するものと思われる。図7は器厚12mmと厚いことから底部近くと思われ、胎土は紫褐色を呈し、石英の混入が認められる。内面の櫛目は細かい。

図8は底部で直底、櫛目は深い。器色は橙褐色で砂質で陶質土器に近い。

図5はC-18・17畦の橙褐色粘質土層の出土で他は井戸及びその周辺から出土した。

### b. 鉢

図9は鉢の底部で径12.8cmを測る。器色は内外面とも明橙褐色、内面に轆轤痕、外面の底面近くに積み痕が確認される。

### c. 火炉

図10はやや筒状のタイプである。外耳は四角形を呈し、上から下に径6mmの孔を有する。耳の周りはヘラで調整する。C-18の出土である。

### d. 瓶

口縁部2点、胴部1点の計3点出土した。

図11は口縁部でアサガオ状を呈し、口径6.6cmを測る、出土地は不明。

図12は頸部で、ややナデ肩をなし、肩部に3条の圈線を施すものである。胴部の最小径4.4cmを測る。

## e. 壺

大中小に分けられ、小は底径が8cm以下、大は底径10cm以上とした。

壺の小サイズとされるのは図13・14は胴部、図15～18は底部である。

図13・14は胴部で、前者はなで肩を呈し、後者は肩部が丸い。

図15～18は底部で底径は6.4cm～8.2cmを測る。

図15は底面からの立ち上がりは開き、図16は若干くびれ、図17はやや開き気味で、やや上げ底で、底径8.4cmを測る。胎土は暗茶褐色で、外面はマンガン掛け、内面は轆轤明瞭に見られる。

図18は垂直に立ち上がるもので、底径8.2cm、明茶暗灰色、内面に轆轤痕。

壺の中サイズは図19～24である。

図19は有頸のタイプで最小胴径は12.0cmを測る。図20は肩部が丸味をおびるもの前者と形状はほぼ同じである。

図23と24は底部である。図23は底径12.6cmで内面の轆轤痕は明瞭で、外面の底部からの立ち上がりにキズが見られる。図24は底径11.8cm、内面に轆轤痕が見られるが、緩やかである。底面からの立ち上がりは角度66°で立ち気味である。

壺の大サイズは図21・22である。

図21は口縁部が蒲鉾状を呈するものである。

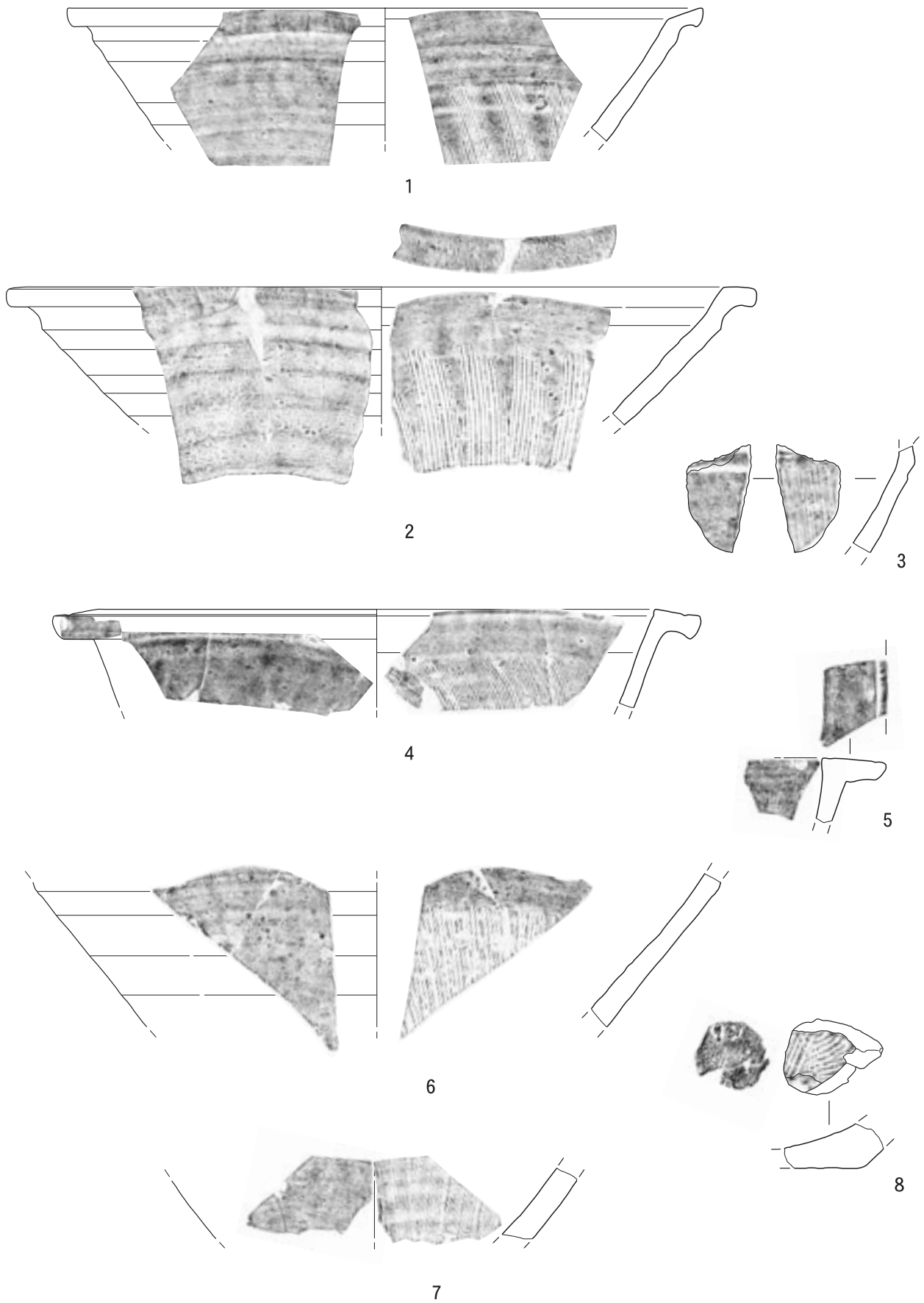
図22は肩部で外耳の貼付痕が残る、胴部に二条の沈線を囲焼する。

表17 沖縄産無釉陶器出土量

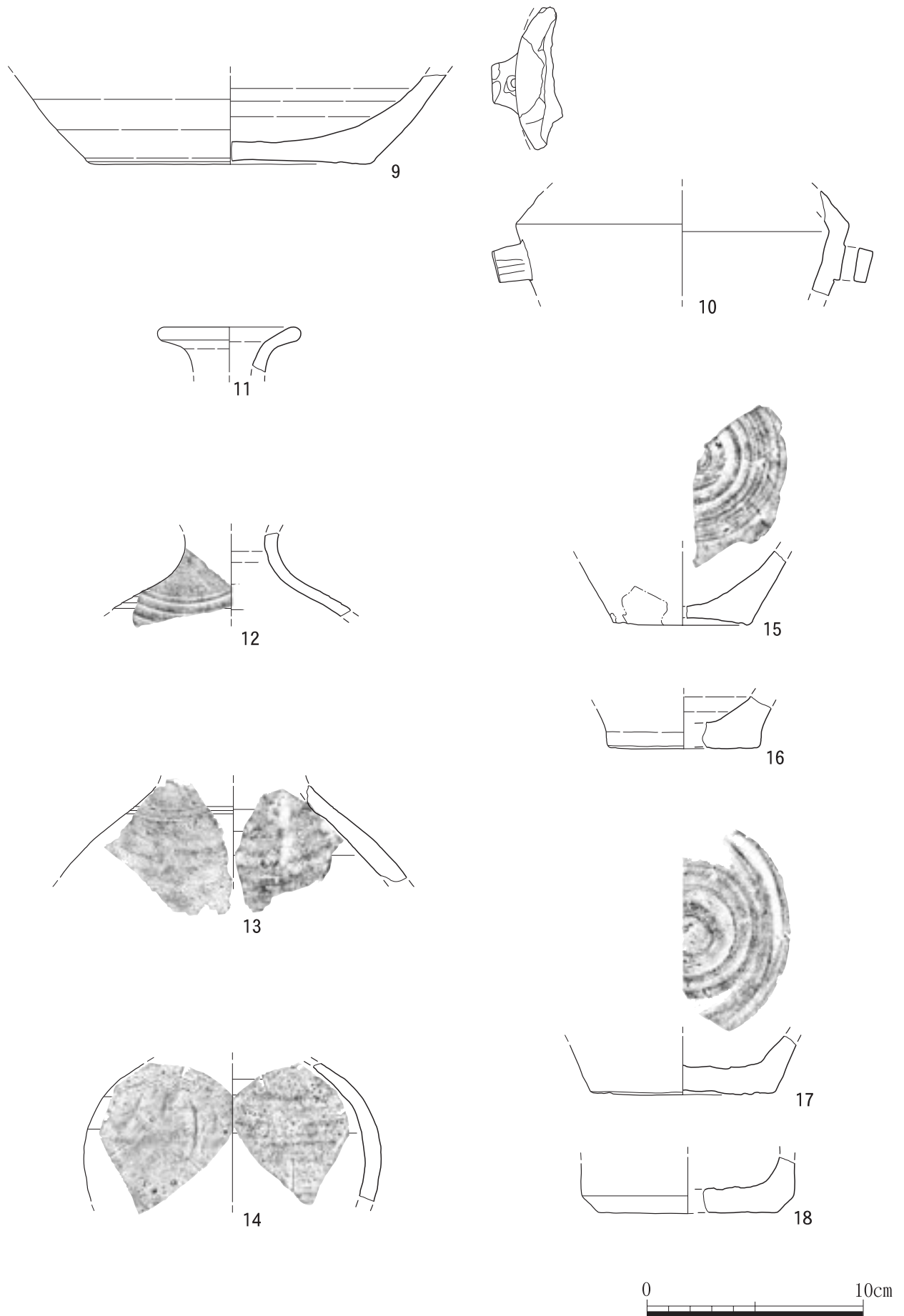
出土地	層序	器種									合計	層別合計	地区合計	
		瓶	鉢	すり鉢	火炉	壺	壺or瓶	水甕	壺or甕	不明				
井戸周辺		口		1	2						2	5	53	53
		胴	2		2		12	1		23	4	44		
		底					4					4		
C-13	②	底				1					1	1	1	
C-16	②	胴							1		1	1	1	
C-17	⑤	口			1						1	1	2	
	②	底				1					1	1		
C-18・17畦	③b	口			1						1	1	1	
C-18	壁面清掃	胴				1			1		2	2	2	
C-19	平面清掃	胴							7		7	7	7	
不明	盛土 平面清掃	口	1		2		2					5	44	44
		胴			3		16		1	11	3	34		
		底		1	1		2				1	5		
合計			3	2	12	1	38	1	1	43	10	111		111

表18 沖縄産無釉陶器観察一覧

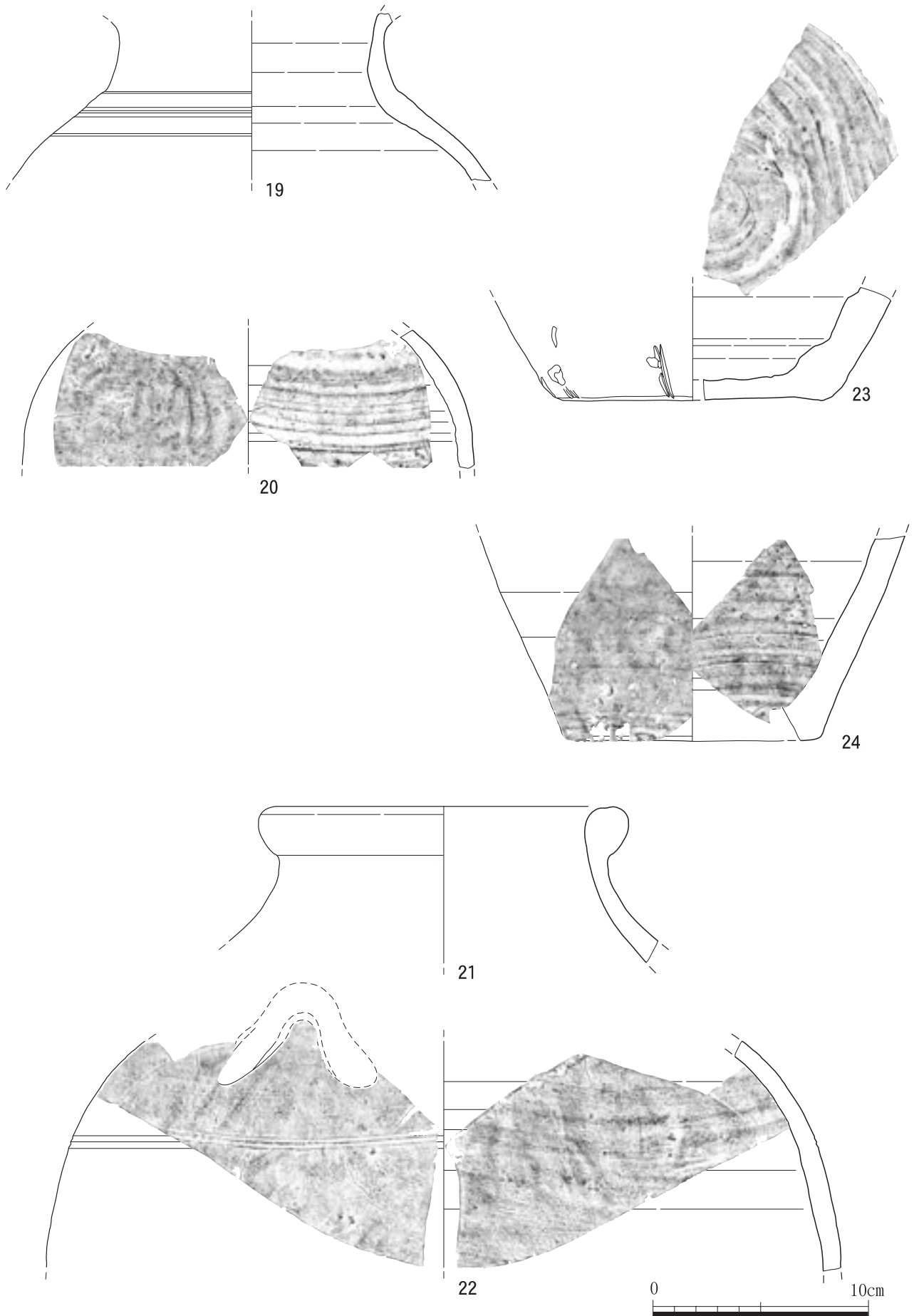
第図 図版	新報	器種	部位	計測値	観 察 事 項	出 土 地
第 34 図 ・ 図 版 26	1	すり鉢	口縁部	口径 28.6cm	「く」字状で幅15mm。内面に櫛目、幅15mm。器厚：9mm。器色：外面－明茶色、内面－明赤色。外面：轆轤痕。	壁面清掃 020919
	2	すり鉢	口縁部	口径 33.7cm	「く」字状で幅15mm。内面に櫛目、幅16mm。器厚：9mm。器色：外面－暗灰色、内面－明茶色。外面：轆轤痕。	壁面清掃 020919
	3	すり鉢	胴部	—	内面にマンガン釉。器厚：7mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗黒色。外面：轆轤痕。	表採 030226
	4	すり鉢	口縁部	口径 25.0cm	逆「L」字状で、幅15mm。内面に櫛目、幅15mm。口唇に圏線。器厚：7mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗黒色。外面：轆轤痕。	トレンチ北側 井戸周辺 020820
	5	すり鉢	口縁部	—	逆「L」字状で、幅30mm。内面に櫛目。外面、自然釉。口唇に圏線。器厚：8mm。器色：外面－明黄色、内面－明茶色。	c-18～17畦 ③b 030325
	6	すり鉢	胴部	—	内面に櫛目、幅15mm。器厚：9mm。器色：外面－明茶色、内面－暗赤色。外面：轆轤痕。	平面清掃 020820
	7	すり鉢	胴部	—	内面に細かい櫛目、幅15mm。器厚：10mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗茶色。外面：轆轤痕。	トレンチ北側 井戸周辺 020813
	8	すり鉢	底部	—	直底。櫛目粗い。器厚：10mm。器色：外面－明橙色、内面－明橙色。	壁面清掃 020828
第 35 図 ・ 図 版 26 ・ 27	9	鉢	底部	底径 12.8cm	器厚：10mm。器色：外面－明橙色、内面－明橙色。内外面：轆轤。	壁面清掃 020828
	10	火炉	胴部	胴径 15.4cm	外耳。器厚：8mm。器色：外面－暗灰色、内面－明灰色。外面：轆轤痕。	c-18壁面清掃 021224
	11	瓶	口縁部	口径 6.6cm	外反でアサガオ状、口唇は丸い。器厚：4mm。器色：外面－明茶色、内面－明茶色。内面：轆轤痕。	不明
	12	瓶	頸部	最小径 4.4cm	肩部に3状の圏線。器厚：5mm。器色：外面－明茶色、内面－明茶色。内面：轆轤痕。	トレンチ北側 井戸拡張時 021022
	13	壺	胴部	—	小。器厚：8mm。器色：外面－暗灰色、内面－明赤色。内面：指痕。	トレンチ北側 井戸周辺 021025
	14	壺	胴部	最小胴径 13.6cm	小。器厚：7mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗灰色。内面：轆轤痕。	壁面清掃 020919
	15	壺	底部	底径 6.4cm	小、やや上げ底。器厚：8mm。器色：外面－暗茶色、マンガン掛け。内面：轆轤明瞭。	盛土 020726
	16	壺	底部	底径 7.0cm	小。立ち上がりは若干くびれる。器厚：10mm。器色：外面－明茶色、内面－暗灰色。内面：轆轤痕。	トレンチ北側 井戸周辺 020820
	17	壺	底部	底径 8.4cm	小。立ち上がりはやや閉き気味。器厚：7mm。器色：外面－暗灰色、内面－暗茶色。内面：轆轤痕。	トレンチ北側 井戸拡張時 021022
	18	壺	底部	底径 8.2cm	小。垂直に立ち上がる。器厚：9mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗灰色。内面：轆轤痕。	c-13西壁 031203
第 36 図 ・ 図 版 27	19	壺	頸部	頸径 12.0cm	有頸。3条の圏線。器厚：6mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗灰色。内面：轆轤痕。	トレンチ北側 井戸拡張時 021022
	20	壺	胴部	胴径 21.0cm	中。器厚：8mm。器色：外面－暗茶色、内面－明茶色。内面：轆轤痕。	壁面清掃 020918
	21	壺	口縁部	口径 15.6cm	大。口縁は蒲鉾状。器厚：9mm。器色：外面－明橙色、内面－明茶色。内外面：轆轤痕。	盛土 020726
	22	壺	胴部	胴径 36.4cm	大。胴部に二条の圏線。器厚：7mm。器色：外面－明茶色、内面－明茶色。内面：タタキ痕。	盛土 020726
	23	壺	底部	底径 12.6cm	中。器厚：15mm。器色：外面－暗茶色、内面－暗灰色。内面：轆轤痕。	表採 030226
	24	壺	底部	底径 11.8cm	中。器厚：10mm。器色：外面－暗灰色、内面－暗灰色。内面：轆轤痕。	c-17壁面遺物 No4 021106



第34図 沖縄産無釉陶器 1 (すり鉢)



第35図 沖縄産無釉陶器 2 (鉢・火炉・瓶・壺)



第36図 沖縄産無釉陶器 3 (壺)



図版26 沖縄産無釉陶器 1





図版27 沖縄産無釉陶器 2

10. 陶質土器 (第37図・図版28)

急須4点、鍋1点、火炉3点、不明2点の計10点出土した。そのほとんどは胴部で、底部は鍋1点、火炉1点のみである。

出土地はほとんどが井戸周辺である。

図1は急須の胴上部である。外面に泥釉が施されている。

北側井戸拡張時の出土である。

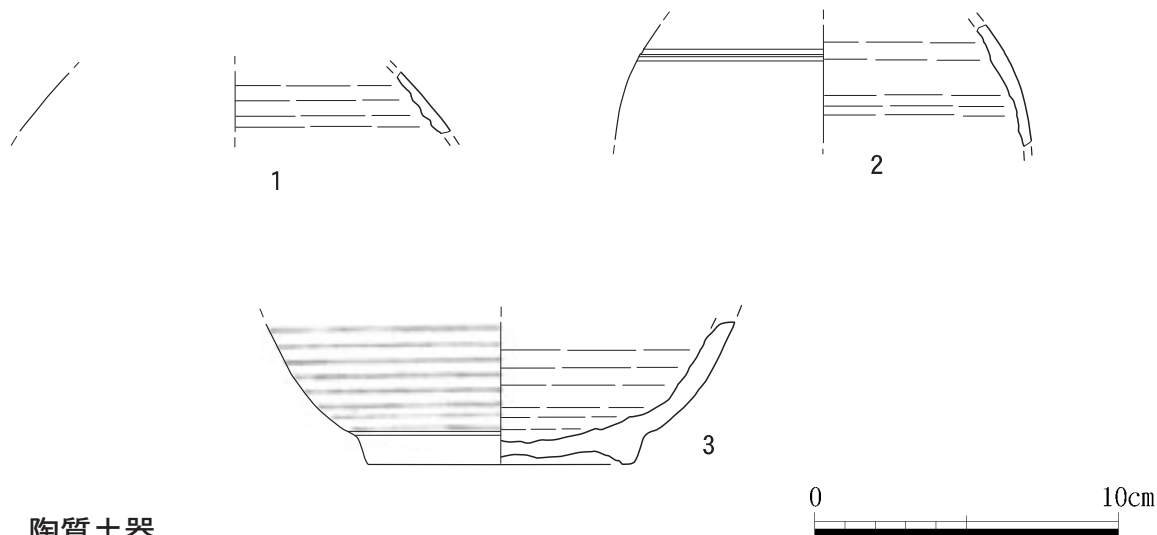
図2は前者と同じ急須の胴上部で国道近くの沈砂地内の黑色ベルト状の粘質砂層で出土。

図3は火炉の底部で井戸拡張部分より出土。

火炉の高台タイプは、これまでの資料から口縁が内湾するタイプで、外面に白色の粘土（アルミナ）で加飾、内面は轆轤痕が明瞭に残る。

表19 陶質土器出土量

出土地	器種	急須		鍋		火炉		不明	合計	地区・層序 合 計
		胴	底	胴	底	胴	底			
井戸周辺		3	1	2	1	1		8	8	
不明	壁面清掃底						1	1	1	
	黑色ベルト状の粘質砂層	1						1	1	
合 計		4	1	3	2			10		



第37図 陶質土器



図版28 陶質土器

## 11. 本土産陶磁器

本土産の陶磁器は肥前磁器や薩摩陶器などの近世陶磁器（第38図）と型紙摺り、ゴム版などの近・現代磁器（第39図）がある。以下、それぞれについて記述する。

井戸周辺から29点、不明10点、全体の状況から不明も井戸周辺のものと同判断される。

### a. 近世陶磁器

碗3点、小碗1点、壺2点、急須1点、皿2点の計9点でそのうち、井戸周辺から5点、不明4点の出土である。

肥前磁器は色絵、青磁、薩摩焼などである。主なものは第38図に示し、略述する。

図1は色絵の碗の口縁部である。直口口縁で、口径14.8cmを測る。

文様は外面に、内面は見込みに菊花文、内面に赤（鉄釉）で葉や花文が見られる。

産地は肥前か、あるいは鹿児島県の平佐窯の可能性も考えられる。

図2は碗の底部である。見込みは蛇の目釉はぎ、圏線が一本施される。

畳付け無釉で、底径4.2cmを測る。

図3は腰折れ皿の口縁部である。内面は大きく区画し、その一部に格子目を施すものである。呉須の発色は淡青である。トレンチ北側井戸周辺で出土。口径は14.8cmを測る。

図4と5は翡翠釉を施すものでいずれもかけ分けである。

図4は碗の胴部で、外面が翡翠釉、内面が透明釉である。同じようなもので直口の口縁が出土している。トレンチ北側井戸周辺で出土。

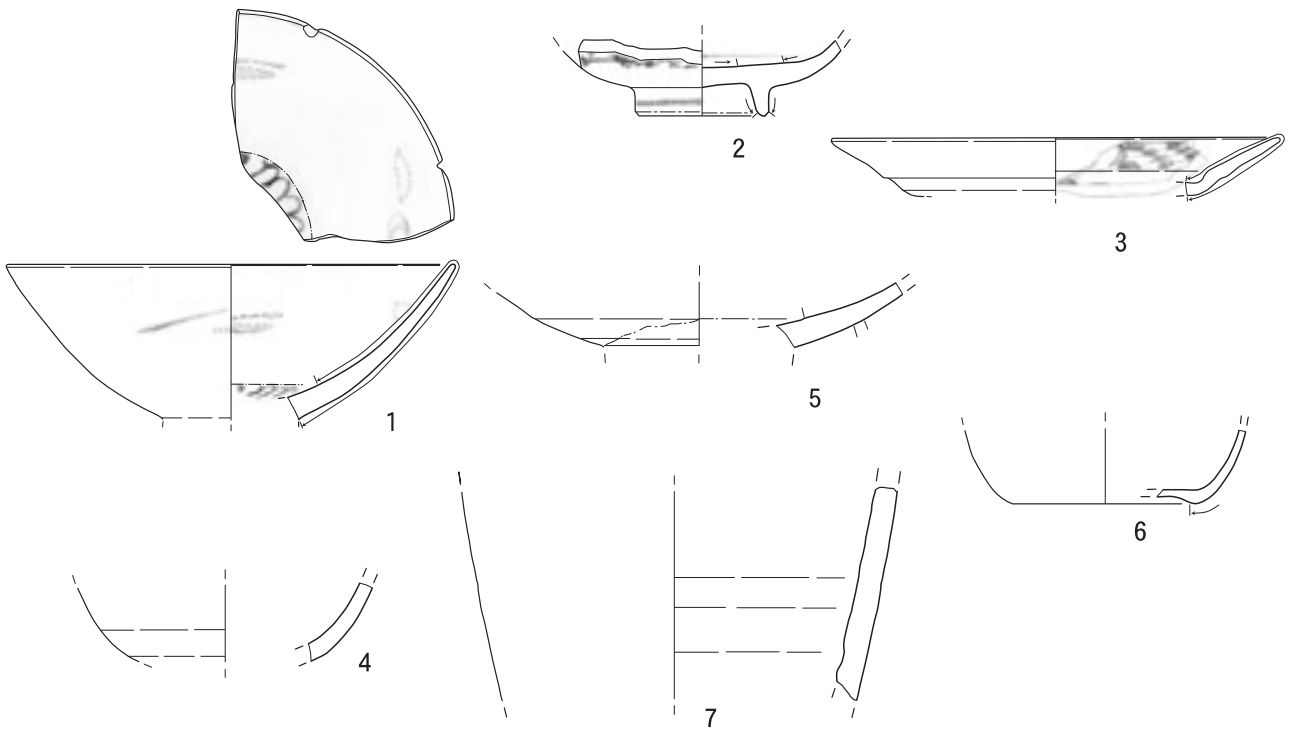
図5は皿の胴部で、内面に緑釉、外面は腰部まで、透明釉を施すものである。内面の施釉は厚く、外面は薄い。黒色ベルト状の粘質砂層より出土。

図6は急須の底部である。器厚3mmと薄く、型作りの可能性が高い、混入物は少ないが内外面とも土の紫色を呈する焼き物と思われる。紫泥で中国の江蘇省宜興窯産の可能性が高い。トレンチ北側井戸拡張時に出土。

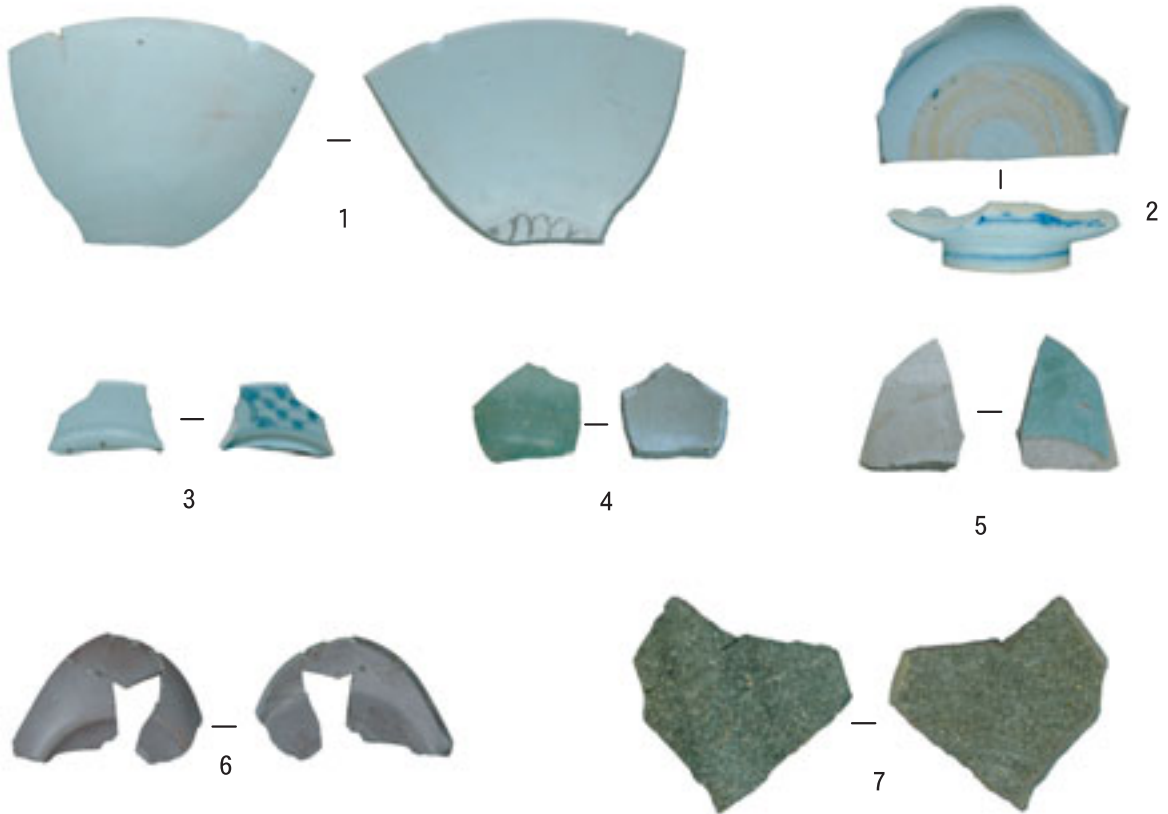
図7壺の胴部である。器厚が9mmと厚く、胎土に石英様の透明粒を多数混入し、器面にも多数見られる。伊礼原B遺跡（2007）で出土した薩摩焼に酷似する。トレンチ北側井戸拡張時に出土。

表20 近世・近・現代陶磁器出土量

器種 出土地	近世陶磁器								近・現代磁器								合計	地区 合計	
	碗			小碗	壺	急須	皿		碗		小碗			壺	急須	蓋			小鉢
	口	胴	底	口	胴	底	胴	口～胴	口	胴	口	胴	底	胴	底	口～底			口
井戸周辺		1		1	1	1		1	4	1	4	4	7	2	1	1		29	29
不明	1		1		1		1			2		1	1	1			1	10	10
小計	1	1	1	1	2	1	1	1	4	3	4	5	8	3	1	1	1		
器種別小計	3			1	2	1	2		7		17			3	1	1	1	39	
合計	9								30										



第38図 近世陶磁器



図版29 近世陶磁器

b. 近・現代磁器

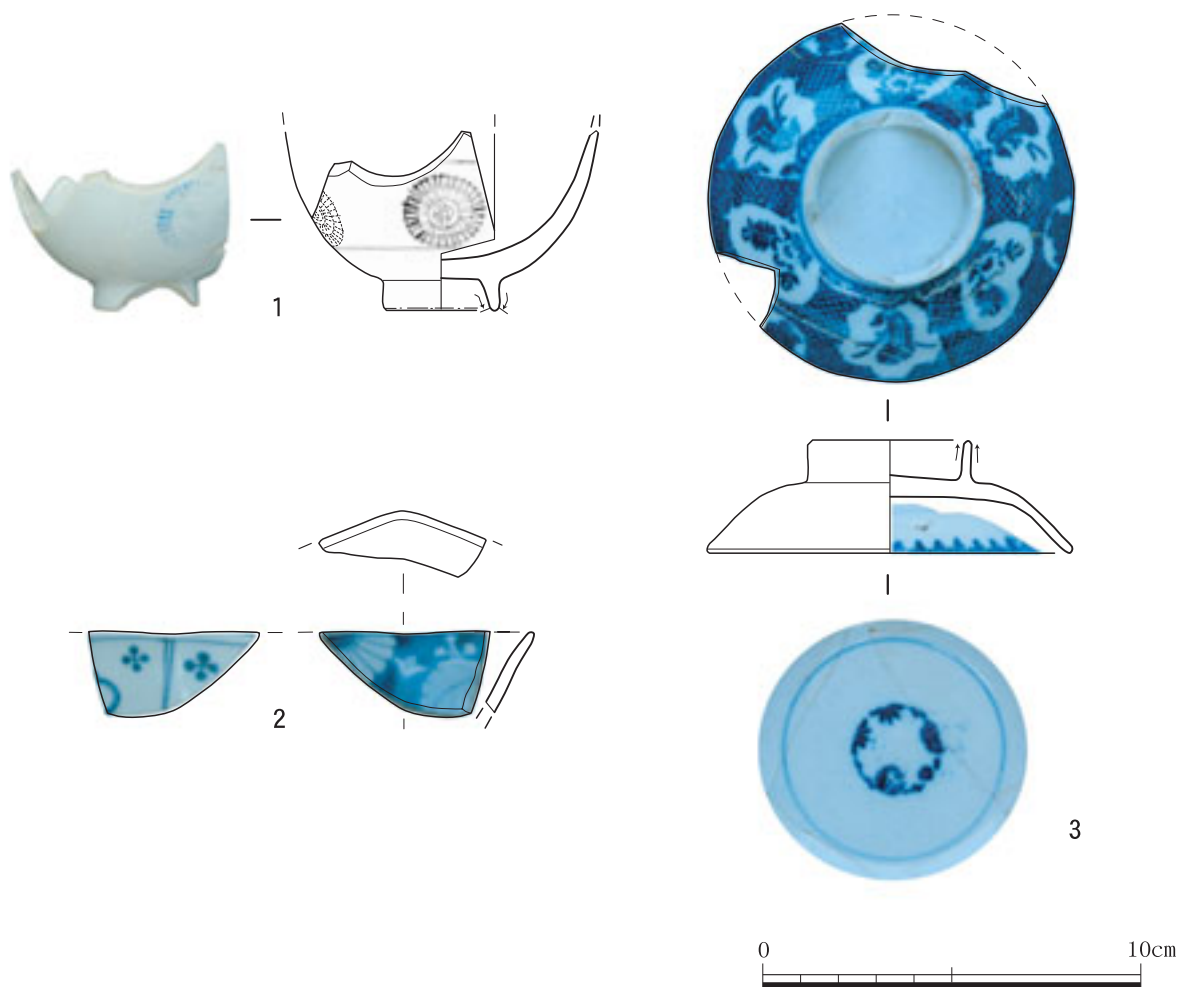
明治時代に導入された、西洋の酸化コバルトやゴム版などの施文の印刷技術が安定した工業品の焼き物である。

碗7点、小碗17点、壺3点、急須1点、蓋1点、小鉢1点など計30点の出土でそのほとんどが北側井戸周辺で24点、不明6点の出土である。以下主なものを第39図に示し、下記に略述する。

図1は小碗の底部で底径3cmを測る。ゴム印刷りで、文様は赤と青の色を施す。井戸周辺で出土。

図2は八角鉢での口縁部で外面は面を圏線で区画し、その中に花文をあしらひ、内面は半菊花文と葉文が施される

図3は型紙摺りの蓋である。文様の外面は花窓の中に花文、地は点刻文、内唇に三角状に点刻文、見込みに圏線、見込み中央に花文。口径9.7cm、器高3.0cm、底径4.3cmトレンチ北側井戸周辺で出土。



第39図・図版30 近・現代磁器

## 12. 瓦・煉瓦（第40図・図版31）

本遺跡出土の瓦は丸瓦10点、平瓦26点、不明25点、煉瓦8点である。

出土したのはすべて明式の瓦で、酸化焼成によって赤褐色と呈している。

出土地は井戸周辺で37点、C-15攪乱（①層）で4点、C-17黒褐色土層（③層）で1点、他27点出土した。（表21）

第40図（図版31）に大きい破片を図示した。

図1は丸瓦である。

玉縁の部分で、表面は縦にヘラで削られ、幅2.0cmで調整されている。

裏面は布目痕が明瞭である。

胎土に金雲母、サンゴ礫が含まれる。

模骨径は9.0cm。

図2は平瓦の角の部分である。

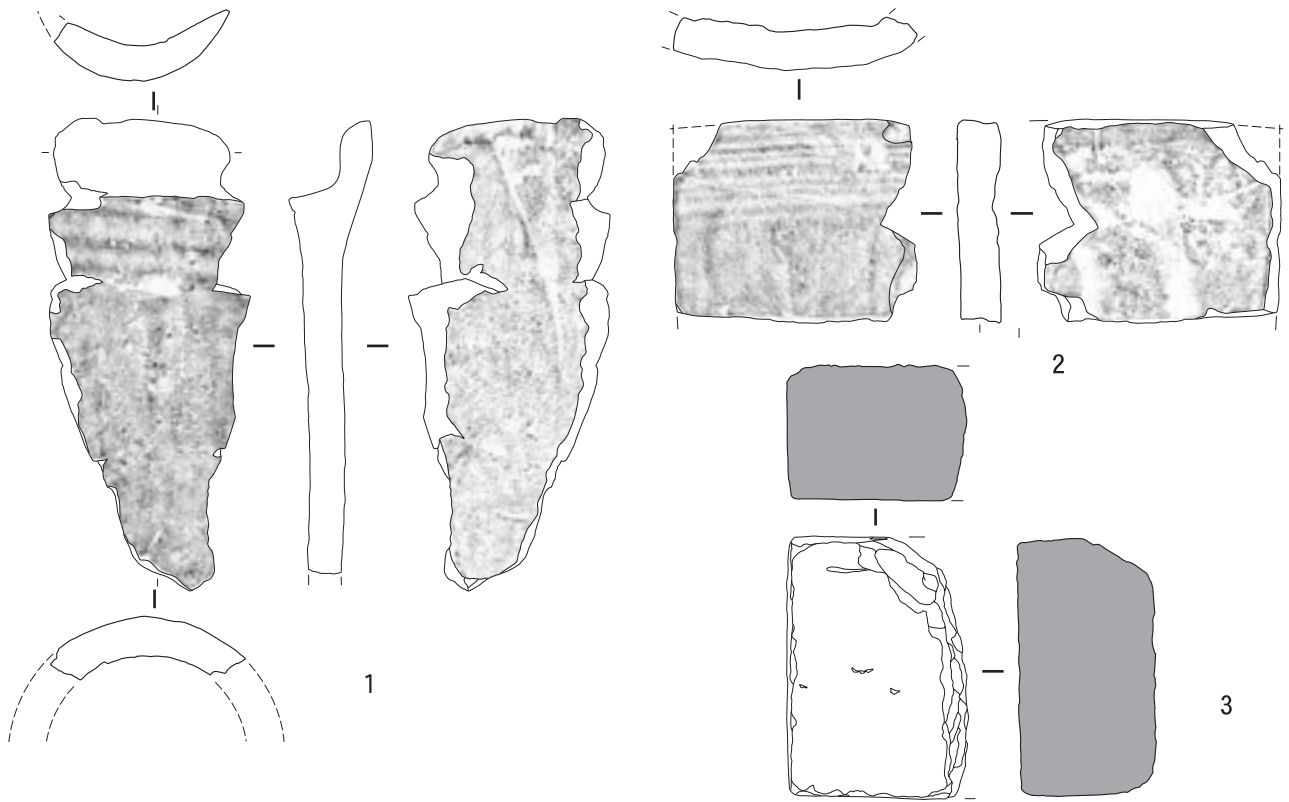
器面調整を見ると表面の下辺は横位に木のヘラでナデられ、木目が明瞭に残り、胴部は縦位に幅3cmのヘラでの調整痕が明瞭に残る。裏面は布目痕、模骨のおけの幅は4.5cmである。僅かに白粒が混入する。

図3の煉瓦の大きさは幅11cm、厚さ5.5cmで、表面と側面の器面は細かく、裏面は粗い。胎土は砂質で金雲母を含む。器色は外面は暗茶褐色、裏面は暗赤褐色を呈する。

色調が赤～橙褐色で焼成も良いことから戦前の屋根瓦と考える。

表21 瓦・煉瓦出土量

出土地		器種	器種				合計	層別合計	地区合計
			不明	丸瓦	平瓦	煉瓦			
井戸周辺		縁片	1	1	2		4	37	37
		破片	13	2	13	5	33		
c-15	①層	破片	3	1			4	4	4
c-17	③層	破片	1				1	1	1
盛土	橙褐色粘質土層	破片	1				1	1	1
不明		破片	6	6	11	3	26	26	26
合計			25	10	26	8	69	69	69



第40図 瓦・煉瓦

0 10cm



図版31 瓦・煉瓦

0 10cm

### 13. 円盤状製品 (第41図・図版32)

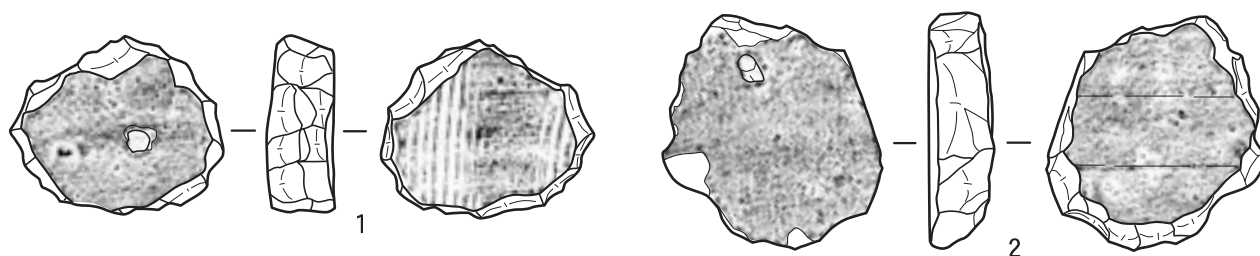
近世・近代の陶磁器の破片を打ち欠き、円盤状に整形したものである。

大きさは3.5cm～4.0cmの範囲におさまり、中サイズである。

本遺跡では備前焼と沖縄産無釉陶器の各々1点ずつ出土した。

図1は備前焼のすり鉢の胴部と思われるもので、すり目は粗く、周縁の打ち欠きは両面から施され、その幅は10mmである。平面はやや横長の楕円を呈し、器厚は11mmを呈する。

図2は沖縄産無釉陶器の胴部で、器種は細片のため、不明。周縁の打ち欠きは胴部の湾曲がきついため主に外面から調整している。おそらく、瓶や小型壺などの小ぶりの器だと想定される。トレンチ北側の井戸周辺で表面採集されたもので、他に沖縄産陶器、現代磁器などと共に出土した。



第41図 円盤状製品



図版32 円盤状製品





## 第四章 自然遺物

### 第1節 脊椎動物遺体

#### 1. 資料と方法

分析した骨の資料は発掘時にピックアップ法で採取したものである。

資料の同定は現生標本と本町の遺跡出土の動物遺体と照合した。

出土した動物遺体は同定可能なものはすべて分類した。

#### 2. 資料

本遺跡出土の脊椎動物遺体は総数65個で、出土量は少ない方である。

種類はサカナ、トリ、リュウキュウイノシシ、ウシもしくはウマ、ジュゴンである。

出土地別にみると調査区の西側（海側）のC-15・16の茶褐色カワニナ層（②層）で7点出土、調査区の東側（山手側）橙褐色粘質土層（③b層）、C-18・17でイノシシもしくはブタで上下顎骨、中手（足）骨、上腕骨など4点出土。

枝サンゴ層（⑤層）では主にC-17でイノシシの肩甲骨、肋骨、棘突起、上腕骨、大腿骨、中手（足）骨が出土した。

種別にはサカナ7点、トリ2点、イノシシ（歯含む）45点、ウシ（ウマ？）9点、ジュゴン3点、計65点の出土である。

##### a. サカナ

サカナは7点で、そのうち、種の同定可能なものは、ベラ上咽頭骨（右）、ナンヨウブダイ（下咽頭骨）、ハリセンボン（上顎骨か歯骨）である。出土量はハリセンボンが4点で、他は1点のみの出土である。

出土地はナンヨウブダイがC-17黄褐色混貝粘質砂層（④層）、ベラ右上咽頭骨はC-17・18橙褐色粘土層（③b層）で出土。ハリセンボンは4点でC-18枝サンゴ層（⑤層）で1点、C-17茶褐色粘質土層（③層）1点、不明2点の出土である。

表22 サカナ出土一覧

種類	部位	左右不	トレンチ	層序		日付
ベラ	上咽頭骨	右	C-18.17	哇橙褐粘土②	D22	③b 030227
ナンヨウブダイ	下咽頭骨		C-17	黄褐色混貝粘質砂層		④ 030110
ハリセンボン	上顎		C-18	最下層の礫層上部の枝サンゴ層		⑤ 030320
ハリセンボン	上顎 or 下顎		C-17	茶褐色粘質土層		③a 021213
ハリセンボン	上顎 or 下顎		不明	不明		不明
ハリセンボン	上顎 or 下顎		不明	不明		不明

##### b. トリ

2点出土で、C-17枝サンゴ層（⑤層）とC-18・19で各々1点出土、小片の為、部位の詳細は不明、図版34は四肢骨と思われる。

表23 トリ出土一覧

部位	状態	トレンチ	層序	日付
四肢骨	s	C-17	枝サンゴ層 ⑤	030207
四肢骨	s	C-18・19	不明	030225

## c. イノシシ or ブタ

表24に四肢骨の出土一覧、表25に歯牙の出土一覧を示した。以下それぞれについて層別に記述する。

主な出土は黄褐色混貝粘質砂層（④層）や枝サンゴ層（⑤層）に多いようで、時期を勘案するとブタよりはイノシシの可能性が高いようである。

## 〈四肢骨〉

## ◎黒色ベルト状の粘質砂層

右寛骨が出土。

## ◎マンガン直上の層（②層）

C-17で四肢骨、右前臼歯、左後臼歯が出土。

## ◎橙褐色粘土層（③b層）

主にC-18・17で右下顎骨、左上腕骨、中手（足）骨が出土。

## ◎黄褐色混貝粘質砂層（④層）

頭骨、距骨、四肢骨、右上顎骨がC-17で出土。

## ◎赤褐色砂層（④層）

C-19・18で出土。

四肢骨はC-17、後頭骨・頭骨はC-18、右大腿骨C-19で出土。

右大腿骨で、近位部から遠位部最小骨体幅（SD）2.7mmを測る。

## ◎枝サンゴ層 上面（④層）

中手（足）骨がC-17で出土。

## ◎枝サンゴ層（⑤層）

肩甲骨、上腕骨、大腿骨、棘突起、肋骨がそれぞれ1点出土。いずれもC-17で出土。上腕骨は近位～遠位部まで残存し、骨体最小幅（SD）15mmを測る（図版33）。

## ◎黒褐色混砂土層（④層）

下顎骨がC-17で出土。

## 〈歯〉

歯は15点出土した。

切歯はC-18・17畦で1点出土。

オスの左犬歯がC-17、黄白砂マンガン直下（④層）で出土。

上顎骨は5点出土した。上顎右第三後臼歯（M<sup>3</sup>）、(e)、右第三後臼歯（M<sup>3</sup>）(b)は出土地不明。

第二後臼歯（M<sup>2</sup>）(e)はC-18橙褐色粘質土層（③b層）で出土。

上顎骨はC-18橙褐色粘質土層（③b層）で左上顎骨M<sup>2</sup>（e）が出土。

下顎骨は10点出土した。そのうち、下顎骨はPM<sub>1</sub>、M<sub>2</sub>、M<sub>3</sub>が連結（図版33）して出土した。

歯の咬耗度は左下顎骨P<sub>4</sub>・M<sub>1</sub>（h）・M<sub>2</sub>（e）・M<sub>3</sub>（c）で出土地不明。

C-17黒褐色混貝土層（③b層）では、左下顎骨M<sub>3</sub>（d）が出土。

C-17マンガン直上層（②層）では左下顎骨M<sub>1</sub>（c）、C-17黄褐色混貝粘質砂層（④層）では、右下顎骨M<sub>3</sub>（c）出土している。

表24 イノシシ or ブタ出土一覧

部 位	左右不	状態	トレンチ	備 考	層 序 名	層序	日 付
頭骨			C-19・18	B241	赤褐色砂層	④	030227
頭骨		破	C-17	D91	黄褐色混貝粘質砂層	④	021211
後頭部			C-18		赤褐色砂層	④	030206
下顎骨	左		C-17		黒褐色混貝土	③b	021107
下顎骨	右		C-18・17	D43	橙褐色粘土②	③b	030227
下顎骨	不		C-17		黒褐色混砂土層	④	021108
椎		破	—		不明	—	—
椎		破	—		—	—	—
椎-棘			C-17	南壁沿いトレンチ内	灰白色枝サンゴ層	⑤	030313
肋骨			C-17		枝サンゴ層直下	⑤	030313
肋骨		s	—		—	—	—
肩甲骨	左	p	C-17		枝サンゴ層直下	⑤	030313
上腕骨	左	d	C-18・17	D42	橙褐色粘土②	③b	030227
上腕骨	右	p.s.d	C-17		灰白色枝サンゴ層	⑤	030313
尺骨	左	s	—		—	—	—
寛骨	右	p	—		黒色ベルト状の粘質砂層より（下層には肌色の砂層有り）	—	030925
大腿骨	右	s.d.ep	C-19・18	B241 畦	赤褐色砂層	④	030227
大腿骨	右	破	C-17	南壁沿いトレンチ内	灰白色枝サンゴ層	⑤	030313
四肢骨	不		C-17		マンガン直上茶褐色粘質土	②	021211
四肢骨	不		C-17		赤褐色砂層	④	030204
四肢骨	不		C-17		黄褐色混貝粘質砂層	④	030116
四肢骨	不	破	—		—	—	—
四肢骨	不		北井戸		北井戸表採	—	020814
四肢骨	不		C-18		橙褐色粘質土層	③b	021121
四肢骨		破	C-17	D187	黄褐色混貝粘質砂層	④	030120
四肢骨	不		C-18・17畦		橙褐色粘質砂層	③b	030227
四肢骨	不		C-17		黄褐色混貝粘質土層	③b	021204
四肢骨	不		C-18		赤褐色砂層から枝サンゴにかけて	④	030212
距骨	右	d	C-17	D182	黄褐色混貝粘質砂層	④	030120
中手(足)骨	不		C-17		枝サンゴ層(上面)	⑤	030130
中手(足)骨	不	d.ep	C-18・17	D21 畦	橙褐色粘土②	③b	030227

表25 イノシシ or ブタ 歯牙出土一覧

部 位	歯	左右不	咬耗度		トレンチ	ドット	層 序	層序	日 付
上顎 or 下顎	I	不			C-18・17	D25	橙褐色粘土②	③b	030227
上顎 or 下顎	P	右			C-17	16	マンガン直上層	②	030123
上顎	M3	右	++, ++, ++	e	—	—	—	—	—
上顎	M3	右	欠, -, -	b	—	—	—	—	—
上顎	M2	左	++, +	e	C-18		橙褐色粘質土層	③b	021218
下顎	M3	右	+, +, -	c	C-17	D181	黄褐色混貝粘砂層	④	030120
下顎	Cオス	左			C-17	G	黄白砂マン直下	⑤	030204
下顎	M1	左	+, +	c	C-17	17	マンガン直上層	②	030123
下顎	M3	左	+, -, -	d	C-17		黒褐色混貝土	③b	021114
下顎	M1	左	+++、+++	h	—	—	—	—	—
下顎	M2	左	++, ++	e	—	—	—	—	—
下顎	M3	左	+, +, -	c	—	—	—	—	—
下顎	P2	右			C-17		黄白色砂層	⑤	030206
下顎	P3	右			C-17		黄白色砂層	⑤	030206
下顎	P4	左			—	—	—	—	—

## d. ウシ or ウマの大型獣

ウシと明瞭なものは4点で、ウシかウマか明瞭でないものは5点である。

出土地はC-15茶褐色カワニナ層（②層）で椎体、四肢骨がそれぞれ1点、C-16茶褐色カワニナ層（②層）で完形の基節骨が1点、C-18壁面清掃で焼けた四肢骨が出土している。

他にウシかウマが明瞭でないものはC-16黒褐色カワニナ層（②層）で四肢骨3点、C-17枝サンゴ層上面（④層）で1点、出土地不明が1点である。これらの出土状況からウシの可能性が高い。

C-16黒褐色カワニナ層（②層）で出土した四肢骨は加工されているものと思われる。（第26図・図版18）

黒・茶褐色カワニナ層（②層）は他にの出土遺物から近世の時期に属するものと思われる。

表26 ウシ・ウマ出土一覧

種類	部位	左右不	状態	トレンチ	層序	層序	日付	備考
ウシ	四肢骨		破	C-15	茶褐色カワニナ層	②	021022	
ウシ?	椎体			C-15	茶褐色カワニナ層	②	021022	
ウシ	基節骨	左	ep.p.s	C-16	カワニナ層（茶褐色）	②	021025	写
ウシ	四肢骨		破	C-18	壁清掃	—	021224	焼け
ウシ or ウマ	四肢骨		破	C-16	黒褐色カワニナ層	②	030320	
ウシ or ウマ	四肢骨		破	C-16	黒褐色カワニナ層	②	030320	
ウシ or ウマ	四肢骨			C-16	黒褐色カワニナ層	②	030320	加工有り
ウシ or ウマ	四肢骨		s	C-17	枝サンゴ層（上面）	④	030130	
ウシ or ウマ	四肢骨	不		—	—	—	030325	

## e. ジュゴン

第17図に示したようC-17で頭骨が検出されている、

その他にC-16・17・18でも頭骨が出土した。

これらの頭骨片は、第17図に示した頭骨の一連の破片と考えられる。

出土はC-16で黒褐色カワニナ層（②層）であるが、C-17・18では黄白色粗砂層（④層）である。縄文晩期に相当すると思われる。

表27 ジュゴン出土一覧

種類	部位	トレンチ	層序	層序	日付
ジュゴン	頭	C-16	黒褐色カワニナ層	②	030325
ジュゴン	頭	C-17	黄白色粗砂層	④	030116
ジュゴン	頭	C-18	赤褐色粘砂層	④	030121

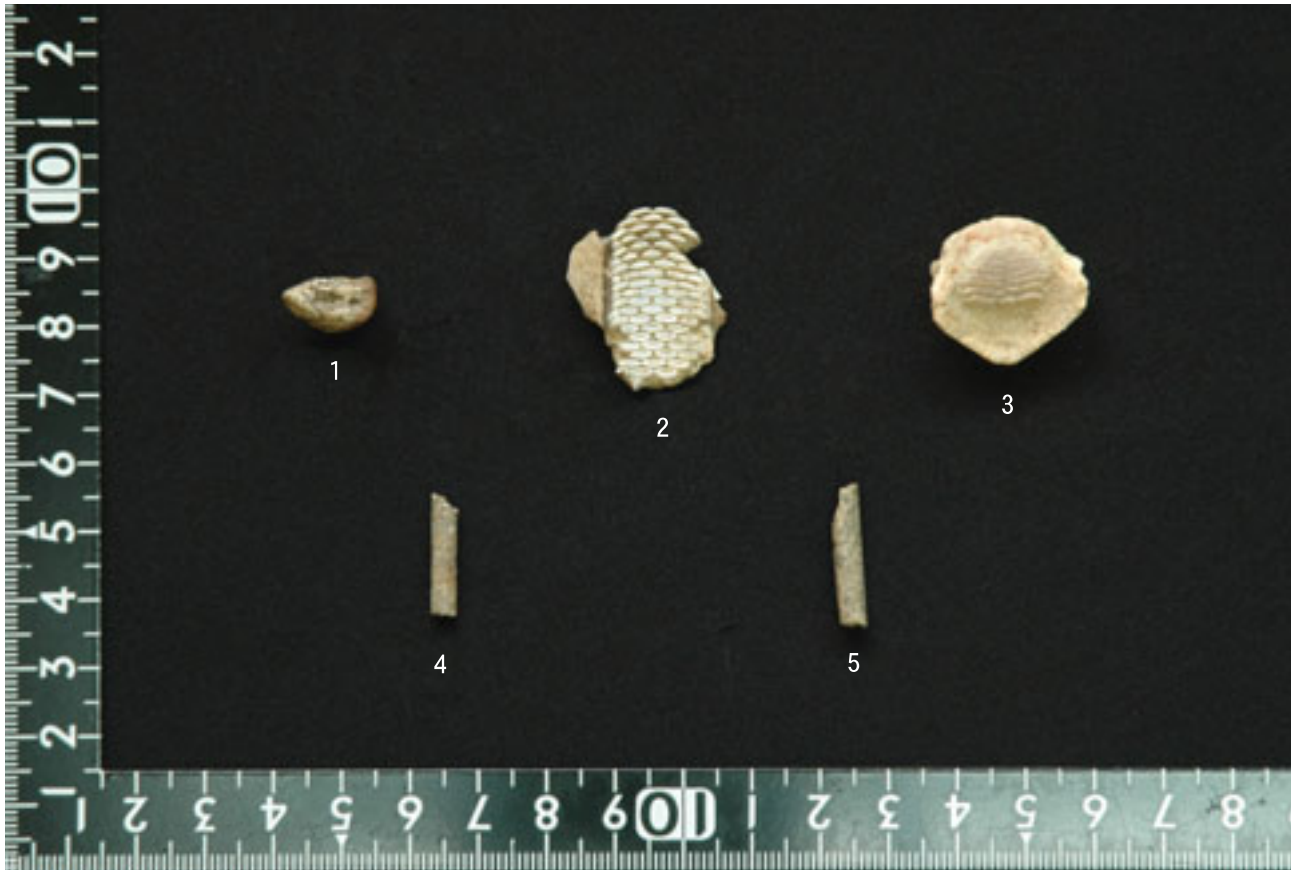


1 頭. 2 頭(後頭). 3 上顎(I). 4 下顎(牙・L). 5 下顎(歯). 6 椎(棘突起). 7 肋骨. 8 上腕骨(幼・L)  
9 上腕骨(R). 10 尺骨(L). 11 大腿骨(R). 12 寛骨(R). 13 中手(足)骨. 14 中手(足)骨(焼)



図版33 イノシシ・ウシ

1 椎. 2 基節(L). 3 四肢骨



1 ベラ科 (上咽頭骨・R). 2 ブダイ科 (ナンヨウブダイ・下咽頭骨). 3 ハリセンボン (上顎骨).  
4 トリ (尺骨・S). 5 トリ (四肢骨S)



図版34 サカナ・トリ・ジュゴン

ジュゴン 頭骨 (表・裏)

## 第2節 貝類遺体

本遺跡出土の貝類遺体は調査時に遺物と確認できるものはすべて採集した。いわゆる、ピックアップ法によるものである。

### 1. 分類

巻き貝、二枚貝、陸産貝に分け、出土状況の表は巻き貝、二枚貝、陸産貝で表記した。また、巻き貝のうち、タカラガイについては表を別にした。

### 2. 集計

① 完形と殻頂、体層、破片に分けた。

クモガイやスイジガイなど殻口の残りのよいものは、殻頂と体層（殻口）に分けて集計し、殻頂と体層（殻口）の多い方を最小個体数とした。

② 二枚貝は左殻と右殻にわけた。

③ 本遺跡の貝類の集計はグリッド別、層別にまとめた。

出土層に関しては、調査時の色別の記載を層の状況や遺物の出土状況の検討の結果、下記のようにまとめた。

①表土層、②黒褐色カワニナ層、③橙褐色粘質土層、④黄褐色混貝砂層、⑤枝サンゴ層として表に表記した。

### 3. 貝の分類

貝種の確認は北谷町内遺跡出土の貝サンプルと下記の図鑑を参考に行った。

久保弘文・黒住耐二 1995年『生態/検索図鑑 沖縄の海の貝・陸の貝』 沖縄出版

奥谷喬司（編）2000年『日本近海産貝類図鑑』 東海大学出版会

奥谷喬司（編）1986年『決定版世界生物図鑑8貝類』 世界文化社

行田義三 2003年『貝の図鑑 採集と標本の作り方』 南方新社

### 4. 分類結果

本遺跡出土の貝は巻き貝14科46種743個体、タカラガイ 1科6種8個体、二枚貝14科37種996個体、陸産貝6科7種145個体である。計35科85種である。

貝類遺体の最少個体数を生息場所類型組成を第42図に示した。最少個体数には色残り、死殻や色彩は含めてない。

C-17④層は791個体と最も多く貝が出土した。④層でイソハマグリが多く291個体、次いで、マガキガイと続く。C-17⑤層では208個体と、内湾転石に生息する貝が多い。

貝種ではリュウキュウシラトリ、カワラガイ、リュウキュウザルガイなどである。

C-16②層ではサンゴ礁イノー内に生息するマガキガイの出土が多い。265個体の出土である。本層は土器では貝塚後期系土器も出土し、攪乱の可能性が高いが、貝種では、下層のC-17の④層（黄褐色混貝粘質砂層）とは明瞭に優占種の差が見られる。

第42図に示したように貝類はC-16とC-17に主に見られた。

②層（カワニナ層）ではC-16で多く、次いでC-17・18層で出土している。③・④層ではC-17で最も多く出土した。以下、生息地別に概略する。

陸産・汽水産は、マルタニシはC-16の②層で1個体確認され、伊礼原D遺跡の試掘No.7でも確認（黒住2008）されている。水田に生息する貝で②層が水田だったことを示す資料である。

陸産貝はオキナワヤマタニシの出土が最も多い。

C-17で②層オキナワヤマタニシ43個体、C-18④で7個体、C-16の②層の計63個体出土。

他にパンダナマイマイ、ツヤギセルなどが得られた。

淡水産のヌノメカワニナは1点検出された。

海産貝は最も多く出土したイソハマグリは潮間帯の砂地に生息するもので、伊礼原D遺跡の4-1・2（陸側）のくびれ平底土器の出土する部分に多いようである。また、うるま市の勝連半島の突端に立地する平敷屋トウバル遺跡でも多く得られるが、同じ中城湾に面する勝連半島の付け根に立地する勝連城跡ではアラスジケマンガイが主体となることから、本遺跡や伊礼原D遺跡は平敷屋トウバル遺跡のような環境と考えられる。

②層（カワニナ層）で多く出土したマガキガイは、隣接する伊礼原D遺跡でも4-8・9グリッドの近世の時期多く得られ、本遺跡と時期的にも一致する。

中型イモガイやアマオブネ類の殻口はヤドカニの宿貝のためか摩耗しているものが多い。

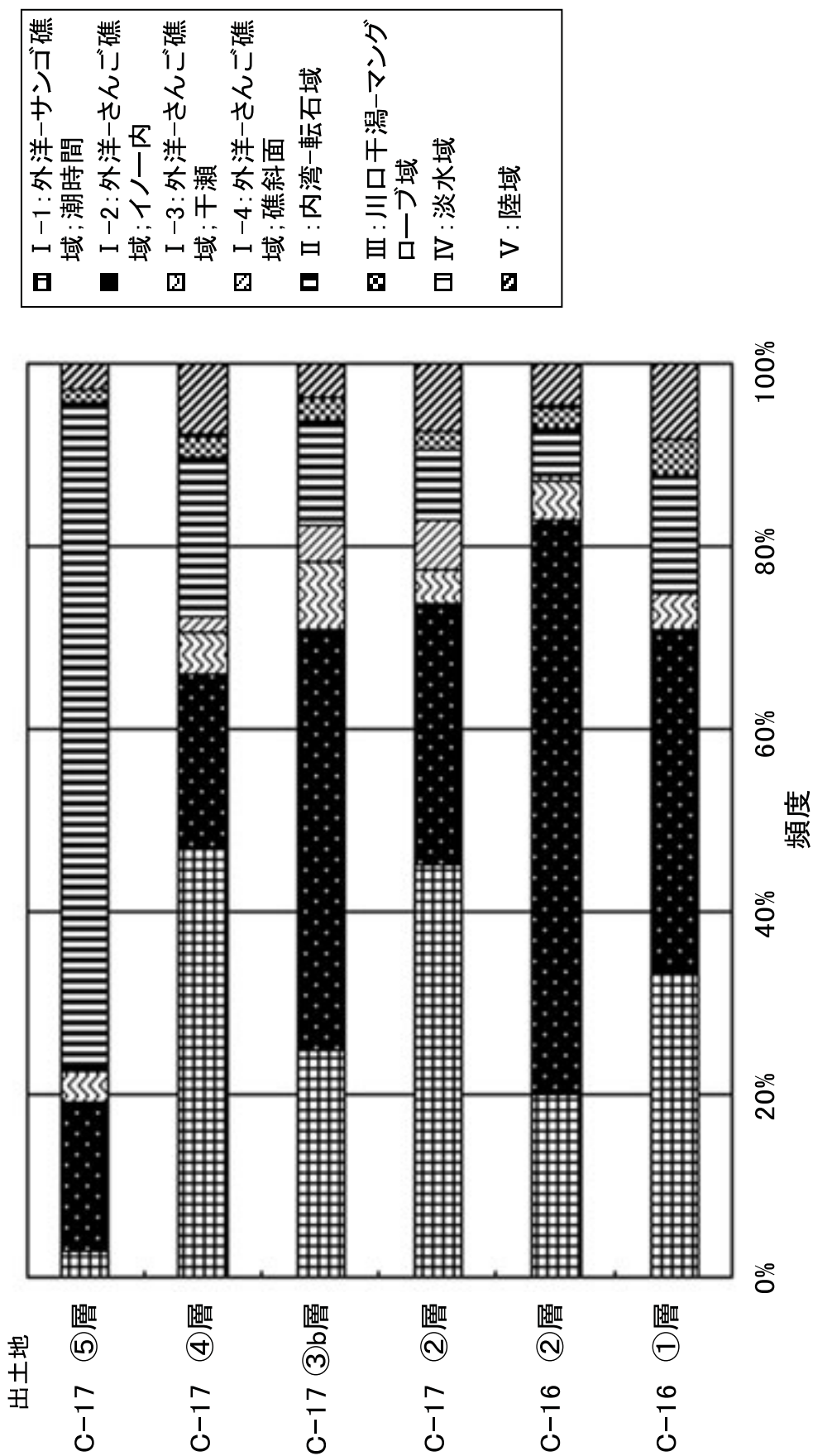
貝製品の素材の可能性が考えられる大型イモガイ・ヤコウガイ・ゴホウラなどがある。ゴホウラやアツソデガイの出土はなく、大型イモガイではクロフモドキが出土した。

図版36のクロフモドキは完形で、殻径7.03cm、殻高12.03cmを測る。図版40のヤコウガイはC-17南壁沿いトレンチ内シルト層上部のサンゴ層（④層）の出土で、内唇部に径15mm前後の穿孔と背面部分は欠損し、螺肋の一部に灰色の部分が確認され、焼けた痕の可能性もあると考えられる。全体として、貝製品の出土は少ない。

## <参考文献>

- ・安里嗣淳・大城秀子・花城潤子ほか 『勝連城跡』－南貝塚および二の丸北地点の発掘調査－ 1984年
- ・黒住耐二「貝類遺体」『伊礼原D遺跡』北谷町文化財調査報告書 第28集 北谷町教育委員会 2008年
- ・島袋洋・金城亀信・上原静・金子浩昌・他 『平敷屋トウバル遺跡』－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－沖縄県文化財調査報告書 第125集 沖縄県教育委員会 1996年





第42図 C-16・C-17における貝類遺体生息場所類型組成



表29 二枚貝類の出土量

地域 別 種別 数量 単位 合計	c-15			c-16			c-17			c-18・17埋			c-18			c-19			北門井戸 埋 量 合計	埋 量 不明 合計
	②			②			②b			②a			②b			②a				
	カワニ ナ層	カワニ ナ層	小計	茶褐色 粘質土 層	茶褐色 粘質土 層	小計	マンガン 質土・砂 層	黒褐色粘 土・砂層	黒褐色粘 土・砂層	②a	②a	②a	②b	②b	②b	②a	②a	②a		
1	左																		1	1
	右																			
2	左																		2	2
	右																			
3	左																		3	3
	右																			
4	左																		4	4
	右																			
5	左																		5	5
	右																			
6	左																		6	6
	右																			
7	左																		7	7
	右																			
8	左																		8	8
	右																			
9	左																		9	9
	右																			
10	左																		10	10
	右																			
11	左																		11	11
	右																			
12	左																		12	12
	右																			
13	左																		13	13
	右																			
14	左																		14	14
	右																			
15	左																		15	15
	右																			
16	左																		16	16
	右																			
17	左																		17	17
	右																			
18	左																		18	18
	右																			
19	左																		19	19
	右																			
20	左																		20	20
	右																			
21	左																		21	21
	右																			
22	左																		22	22
	右																			
23	左																		23	23
	右																			
24	左																		24	24
	右																			
25	左																		25	25
	右																			
26	左																		26	26
	右																			
27	左																		27	27
	右																			
28	左																		28	28
	右																			
29	左																		29	29
	右																			
30	左																		30	30
	右																			
31	左																		31	31
	右																			
32	左																		32	32
	右																			
33	左																		33	33
	右																			
34	左																		34	34
	右																			
35	左																		35	35
	右																			
36	左																		36	36
	右																			
37	左																		37	37
	右																			
合計	左																		合計	合計
	右																			

表30 陸・淡水産貝類の出土量

地区	層	c-15		c-16			c-17				c-18~17哇		c-18			c-19		不明		合計	個数 (完形+殻頂)	個数 (完形+殻頂+体層)			
		カワニナ層	小計	① 茶褐色粘質土層	② カワニナ層	③ マンガン直上	④ マンガン直下	⑤a 黄褐色粘土 黒褐色混 貝土	⑥ 黄褐色混 粘砂赤褐 粗砂	⑦ 黄白色砂 枝サンゴ	⑧ 小計	⑨ 黄褐色混貝粘 砂混貝砂質 部分掘込み内 哇赤褐色粗砂	⑩ 小計	⑪b 橙褐色粘 質土層	⑫a 橙褐色粘 質土層の 白砂層	⑬ 黄褐色混貝 粘砂赤褐 粗砂	⑭ 小計	⑮ 橙褐色粘 質土層の 白砂層	⑯ 小計				不明	小計	
																									カワニナ層
1	タニシ科 マルタニシ 完形殻頂 体層 破片 備考	1	1	2			2												3	3	5				
2	ヤマタニシ科 オキナワ 完形殻頂 体層 破片 備考			完1SP			8	1	5	43	2	51	4	4	1	2	17	20	6	2	2	91	94	98	
3	ワニナ科 トウガタカ 完形殻頂 体層 破片 備考						3										1		1	4	4	7			
4	カワニナ科 カワニナ 完形殻頂 体層 破片 備考			完2SP			4												5	1	6				
5	キセルガイ科 ツヤギ 完形殻頂 体層 破片 備考							1											1	1	1				
6	ナンバンマイマイ科 シニリ 完形殻頂 体層 破片 備考			1			1	2				1	1	1	3	2	6	1			12	13	16		
7	ナンバンマイマイ科 カツレン 完形殻頂 体層 破片 備考			1			5	2						2	3	5					17	19	19		
8	マイマイ科 オナジ 完形殻頂 体層 破片 備考							3	2	16	21										21	23	27		
合計	完形殻頂 体層 破片	1	1	2	11	10	23	6	7	66	6	85	5	5	2	7	22	31	6	6	3	3	154	162	179
合計	個体数(完形+殻頂)	1	1	2	11	10	23	6	7	70	6	89	7	7	2	7	24	33	6	6	3	3	162	179	
合計	個数(完形+殻頂+体層)	2	2	2	12	13	27	6	7	76	7	96	8	8	2	7	27	36	6	6	4	4	190	200	

表31 タカラ貝類の出土量

地区	層	c-15		c-16		c-17				c-18		北側井戸		不明		合計	個数 (完形+殻頂)	個数 (完形+殻頂+体層)	
		カワニナ層	小計	② 黒褐色カワニナ層	小計	② マンガン直上	③b 黒褐色混貝土 黄褐色混貝粘 土	④ 黄褐色混貝粘 砂赤褐色粗砂	⑤ 枝サンゴ層	⑥ 小計	⑦ 黄褐色混貝粘 砂質砂層	⑧ 小計	⑨ 西側拡張時	⑩ 小計	⑪ 黒色ベルト 状粘質砂層 (下層に肌 色の砂層)				⑫ 小計
1	ハナレラダカラ 完形殻頂 体層 破片 備考						2										2	2	2
2	ハナマルユキ 完形殻頂 体層 破片 備考	1	1				完1SP						1		1	1	1	1	1
3	ヤクシマダカラ 完形殻頂 体層 破片 備考										2		2			2	2	2	
4	ホンヤブ 完形殻頂 体層 破片 備考						2				2		完1SPc1				2	2	2
5	ホンダカラガイ 完形殻頂 体層 破片 備考			1	1				3	1	2					4	2	7	
6	タカラガイ科 完形殻頂 体層 破片 備考			1	2	2	1	5	5	1	12			完2SP 孔1		c 1	c 2	17	13
合計	完形殻頂 体層 破片	1	1	1	1				5	2	7	c 1 風		2	2	10	3	20	
合計	個体数(完形+殻頂)	1	1	1	1				5	1	2			1	1	13	7	20	
合計	個数(完形+殻頂+体層)	2	2	2	2	1			5	7	14	1		2	2	20	13	20	
合計	個数(完形+殻頂+外(内)+体層)	2	2	2	2	11			3	14	1	1	2	2	1	1	20	20	20

c=色彩残



図版35 貝類 1 (巻貝)

(番号は表28と合致)



図版36 貝類 2 (巻貝)

(番号は表28と合致)



図版37 貝類 3 (巻貝) (番号は表28・表31と合致。T-タカラガイ R-陸産貝を示す)



図版38 貝類 4 (二枚貝) (番号は表29と合致)



図版39 貝類 5 (二枚貝)

(番号は表29と合致)



図版40 貝類 6 (ヤコウガイ)



石灰岩塊検出状況 (C-19~18)



石灰岩礫の土器検出状況

図版41 C-19石灰岩塊検出状況





東壁の検出



土器検出状況 (黄褐色混貝粘質砂層)

図版42 C-16下層確認



黄褐色混貝粘質砂層の貝検出状況 (C-17)



土器 (C-17) (第23図47)



土器 (C-18) (第20図15)



土器 (C-18) (第27図5)



土器 (C-17) (第19図10)

図版43 遺物検出状況



試掘トレンチ全景（東側より）



発掘作業状況（C-17・18）

図版44 発掘作業風景

## 第五章 ま と め

今回の範囲確認調査の概要について前章までに述べてきた。ここでは、その調査成果を踏まえて若干の要点にふれてまとめとしたい。

平安山原B遺跡は、キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査で発見され、戦前の遺構とグスク時代から弥生時代相当期の遺物が確認されたことから当該期が想定された。今回の範囲確認調査では、試掘データを基に調査区域を決めたが、当時、米軍基地が機能していたために制限された調査範囲ではあったものの、試掘調査で確認できなかった遺構の検出や地形等、新たな情報が得られ、概ね試掘時の時期想定に比定されることが判明した。以下に、範囲確認できた層序や遺構、遺物等について整理する。

### 層序

層序は、米軍の客土（Ⅰ層）を除去すると、全面的に近世から戦前までの集落跡に伴う遺構や遺物が確認される茶褐色土層であるⅡ層と、その下部の弥生時代相当期の遺構及び遺物が出土する褐色系の粘質土のⅢ層・砂質土のⅣ層、縄文時代の遺物が散見される白砂層や枝サンゴ層から成るⅤ層が確認された。丘陵側においては琉球石灰岩基盤層が確認された。

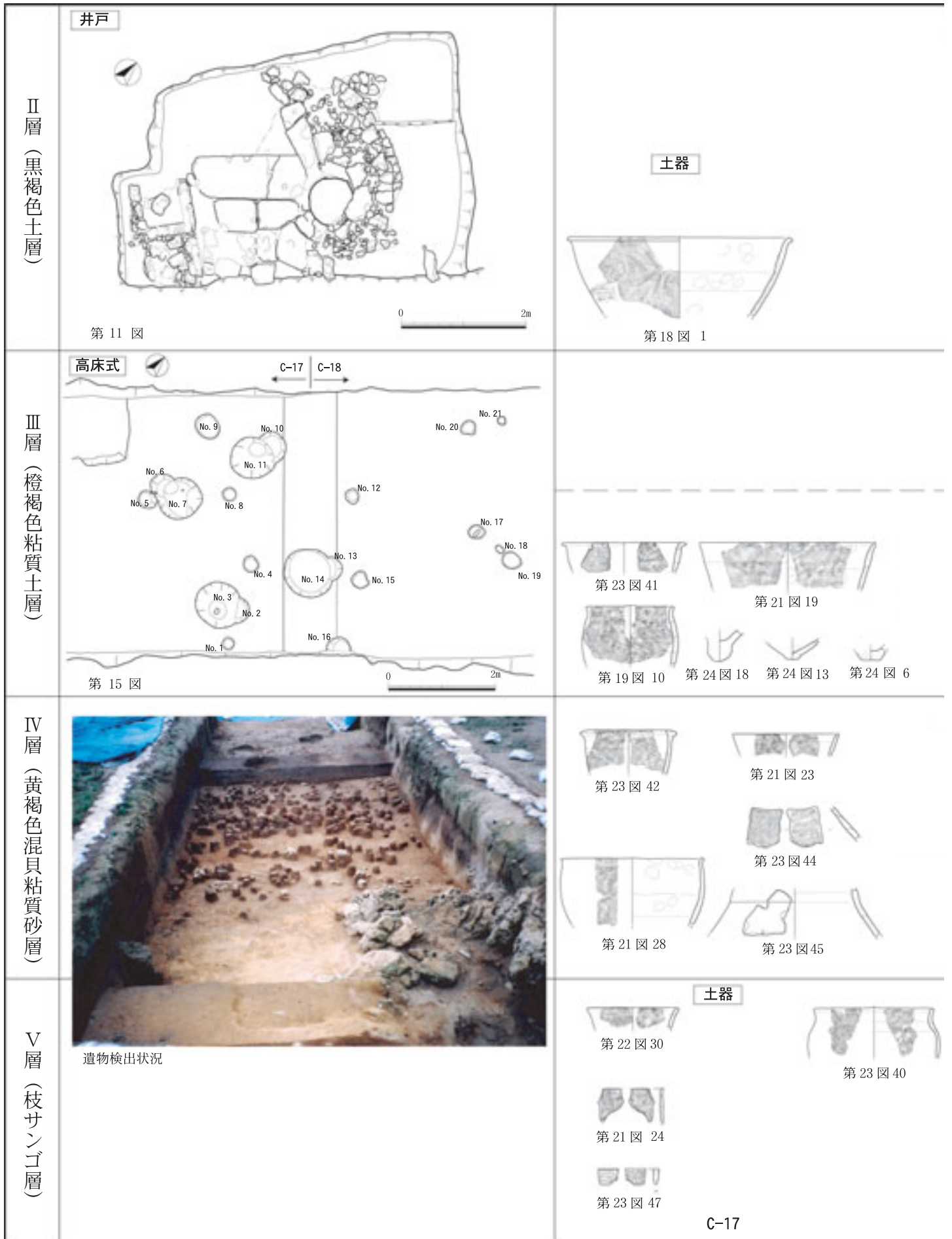
Ⅲ・Ⅳ層は、遺物や遺構が確認される生活層でC-19から16の丘陵側に集中している。そこから西側はⅡ層が中心となる。上部ではC-16でマルタニシが確認され、水田を示唆しており、下部では淡水産のカワナナ等が含まれる層が数枚堆積し、低湿地を成していたと思われる。カワナナ層が堆積したのは、本遺跡の南側を西流している徳川から何らかの影響で水が溜まる状況、つまり自然によるものか、あるいは人為的なものは今回の調査では判然としなかった。この状況を把握するには今後の本調査で、範囲確認調査で実施した範囲の西側を調査する必要があると感じられた。

### 遺構

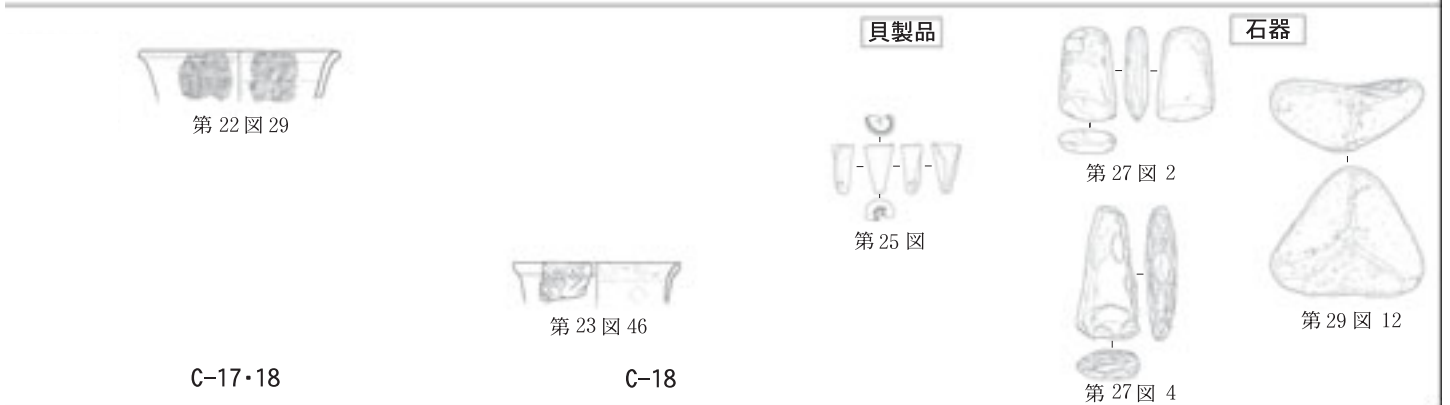
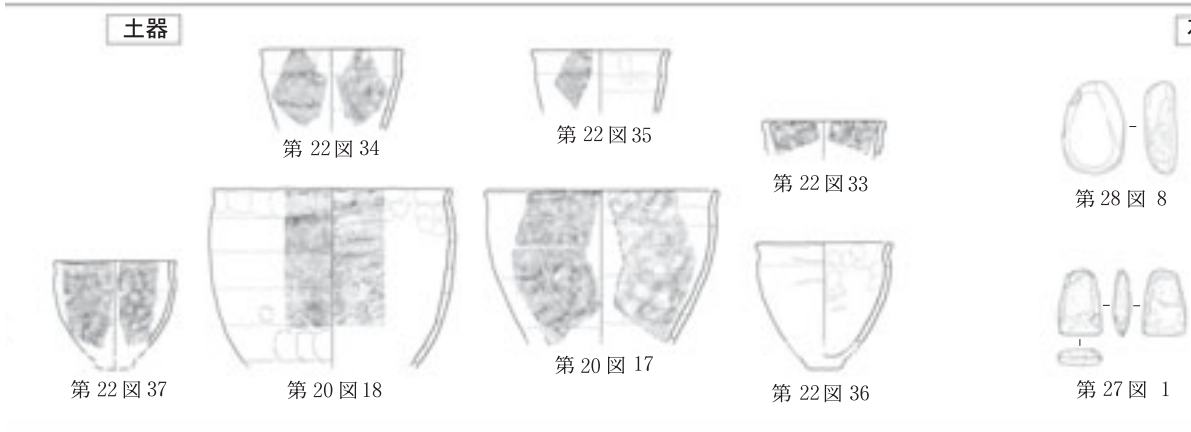
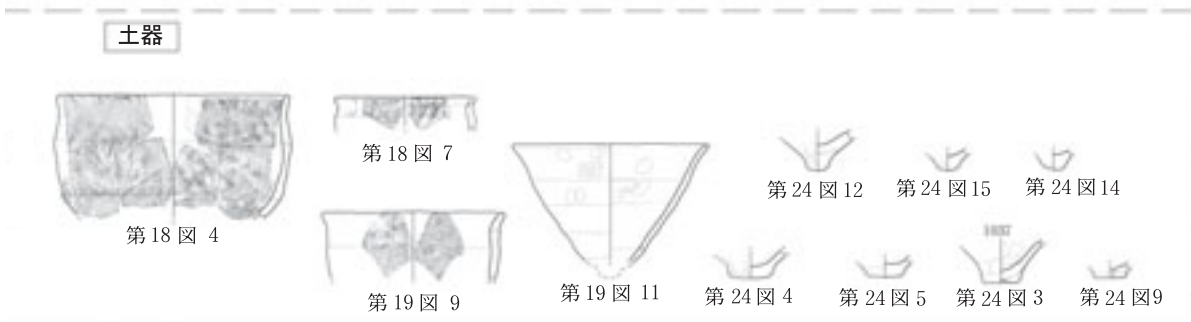
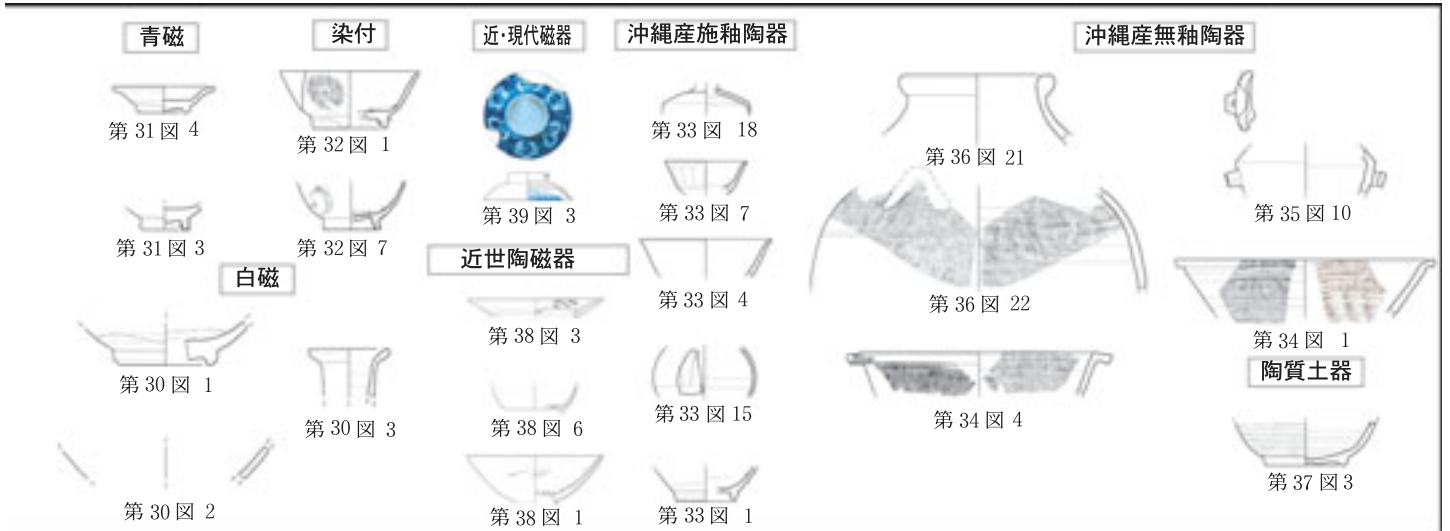
本遺跡で確認された遺構は、井戸遺構、溝状遺構、高床式建物址、ピット群、落ち込み遺構が検出されている。井戸遺構、溝状遺構、高床式建物址は近世から戦前に比定され、ピット群、落ち込み遺構は弥生時代相当期に比定される。

井戸遺構はC-17・16の北側で1基確認された。掘り抜き井戸で、周囲は石灰岩を利用して溜め池や広場、井戸口を持つ構造である。井戸口を俯瞰的に見ると石積みによる半月状構造で囲われていたと思われる。キャンプ桑江返還区域より検出された井戸は3例目で、内2例は戦前の井戸である。共に井戸口全面に広場と溜め池を持ち、戦前期の井戸の構造の特徴を表していると思われる。

戦前の遺構で比較的残っているのは石灰岩を利用した構造物で、今回の井戸や試掘時のサーターヤーなどは一部破壊されているものの状態は良好である。基地建設の際、米軍はこのような構造物は基地施設に影響なければ残している傾向があると思われる。従って、ある程度集落の復元資料として重要である。



第43図 平安山原B遺跡遺構・層別遺物出土一覧



溝状遺構は1基確認され、C-17・16の境に沿って南北に延びている。V層を削っている。全長は、北半分が下層調査で掘り込んだため把握出来ていない。幅は50～70cmで深さは45cm、断面形は「U」の字状を成している。本遺構の詳細は把握できていない。

高床式建物址は2基で、重複した状況で確認された。柱穴のサイズに差違がみられ、直径40～60cmで構成される4本柱の第1号高床式建物址と、直径70～90cm大の4本柱で2本の中柱を持つと思われる第2号高床式建物址が確認された。これら遺構は調査当初はグスク時代を想定していたが、当該期を積極的に示す遺物が無く近世から戦前期とした。しかし、遺構は更に周辺に存在する可能性があることから、今後の本調査で遺跡に展開する各遺構の分布・前後関係等も考慮して時期を解明していきたい。

ピット群はⅢ層aで11基、Ⅲ層bで16基、計27基確認されている。サイズは前者が20～46cm大、後者が11～14cm大で、深さはいずれも3～17cmと浅めである。今回の調査範囲では明確なプランや規則的な並びは確認できなかったが、周辺には更に拡がって存在すると予想される。

落ち込み遺構は1基確認された。直径及び深さは約1mである。本遺構の詳細については把握できていない、周辺に類似する遺構が存在すると想定されることから、分布状況を把握して性格を解明していきたい。

ジュゴンの頭骨は明確な遺構は検出されていないがここで扱うこととする。頭骨はC-17で検出され、周辺でも散見されるが同一個体のものと考えられる。ジュゴンは補食されたものか自然は把握できていない。類例は弥生時代相当期でうるま市の平敷屋トウバル遺跡で多数出土している。

## 遺物

今回の調査で得られた遺物は、土器（縄文・弥生時代相当期・グスク系・近世）・石器・貝製品・骨製品・輸入陶磁器・沖縄産陶器（施釉・無釉）・本土産陶磁器などの人工遺物と自然遺物等がある。

土器はC-16～19で出土し、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器が多い。特にⅣ・Ⅴ類土器がほぼ同数に近く本遺跡の主体となる。分布状況を見てみるとⅢ類土器はC-16、Ⅳ・Ⅴ類土器はC-17・18にまとまっている。層別では、Ⅲ類はⅡ層、Ⅳ類はⅢ層で、Ⅴ類はⅣ層で多く出土する傾向である。胎土はⅢ・Ⅳ類土器に石英と赤色粒を含み、Ⅴ類土器に角閃石や透明粒を含んでいる。Ⅵ類にも角閃石の混入は確認できる。Ⅴ層よりⅦ類土器が出土していることから、周辺に縄文期の遺跡が存在する可能性がある。近くでは本遺跡の南東約200mに伊礼原遺跡が存在する。

本遺跡から出土したⅠ類土器は、粘土板を貼り合わせて土器を制作する泥貼付塑法によるもので、沖縄で初めて確認された製法である。今後、接合の際には注目して作業を行う必要がある。

Ⅵ類土器の第23図43は、口縁部が三角形状を呈する土器で焼成がかなりよく、一見陶器と見違える資料である。本調査で資料の増加を待ち判断したい。また、第23図44・45も特徴的で図44は器面が赤味を帯びていることから丹塗りの可能性がある資料である。図45は大型の壺で移入土器と思われる資料である。

石器は13点と少ない。器種別には石斧が6点、敲き石が2点、くぼみ石・石皿が1点、チャート製品が1点となっている。出土地はC-16～18で、17で多い。層別ではⅢ～Ⅴ層で各3点の出土となっている。石質では砂岩が6点と多く使用され、次いで輝緑岩・班レイ岩が各2点、角閃石安山岩・凝灰質砂岩・チャートは各1点となっている。本遺跡出土の石斧は小型が中心となって

いる。

貝製品と骨製品は各1点と少なく、前者はイモガイの体層部の尾部に両側から孔を穿っている資料で、装飾品の可能性がある。V層からの出土であった。後者は近世期の資料でウマの四肢骨を半裁し、端縁を丸くしていると思われるが製品かどうかは判断がつかなかった。

輸入陶磁器は青磁7点、白磁3点、染付19点の出土である。出土地を見てみると、井戸周辺で11点、C-17で2点、C-13・15・16で各1点、その他となっている。層別ではI・II層である。器種は碗が19点（青磁3点・白磁2点・染付14点）、小碗5点（全て染付）、皿3点（全て青磁）・瓶1点（白磁）である。青磁・白磁は15世紀代で、染付は18～19世紀の資料である。染付は平安山集落に伴うものと思われるが、青磁・白磁については攪乱によるものと思われる。

沖縄産陶器（施釉・無釉）・陶質土器・本土産陶磁器（近世陶磁器・近現代磁器）・瓦・煉瓦・遊具（円盤状製品）は概ね平安山集落に伴うもので近世～戦前期の資料である。ほとんどが井戸周辺からの出土で約85.4%を占める。この井戸が平安山集落の南東端に位置しているため遺物が集中しているものと判断される。

脊椎動物遺体（骨類）は65点と少なく、種類は魚（7点）・鳥（2点）・リュウキュウイノシシ（46点）・ウシもしくはウマ（9点）、ジュゴン（3点）である。ウシもしくはウマは近世期に属し、C-16にまとまる。他の大半は弥生時代相当期のⅢ・Ⅳ層で出土し、本島の同時期の遺跡と同様な様相を示している。C-17・18に分布する。

貝類遺体は巻き貝14科46種743個体、タカラガイ1科6種8個体、二枚貝14科37種996個体、陸産貝6科7種145個体得られた。弥生時代相当期のⅣ層で791個体と多く出土し、イソハマグリが291個体と最も多い。イソハマグリは海産貝の中でも最も多く出土し、近くでは伊礼原D遺跡の丘陵側でも多く出土する。陸産・汽水産ではマルタニシがC-16のⅡ層で1個体確認された。マルタニシは水田に生息する貝であることから、近世～戦前は水田の可能性があり大変興味深いと言える。今後の本調査に期待したい。

以上、層序、遺構、遺物について述べてきた。今回の範囲確認調査では遺跡全体を把握するには限定的であった。今後、本調査では試掘及び今回のデータを加味し調査を行いたい。本遺跡周辺には平安山原A・C遺跡、伊礼原遺跡・伊礼原B・D遺跡が近接する地域である。これら遺跡のなかにはこれから調査する遺跡もあり、多くの遺構や遺物が出土すると考えられる。それら遺構、遺物を時期別に整理し比較していくと本遺跡の立地及び性格、変遷が解明されるであろう。

## ＜参考文献＞

- ・中村愿・東門研治・島袋春美『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業』北谷町文化財調査報告書第23集 北谷町教育委員会 2005年
- ・名嘉順一・東恩納みさき・八田夕香『北谷町の地名－戦前の北谷の姿－』北谷町文化財調査報告書 第24集 北谷町教育委員会 2006年
- ・島袋洋・金城亀信・上原静他『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区内倉庫建設工事に伴う緊急発掘調査報告書－』沖縄県文化財調査報告書 第125集 1996年
- ・中村愿・東門研治・松原哲志ほか『伊礼原遺跡－伊礼原B遺跡ほか発掘調査－』北谷町文化財調査報告書 第26集 北谷町教育委員会 2007年



- ・黒住耐二「伊礼原D遺跡から出土した貝類遺体」『伊礼原D遺跡ーキャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業（平成10～13年）』北谷町文化財報告書 第28集 北谷町教育委員会 2008年
- ・中村愿・東門研治他『伊礼原B遺跡・伊礼原E遺跡』北谷町文化財報告書 第27集 北谷町教育委員会 2008年

# 付 篇

『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』補遺 3

## 付篇 『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』補遺 3

平成7年度～平成9年度に実施された試掘調査の主な試掘については『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』（2005）にすでに報告されているが、ここではその報告で掲載できなかった遺物について掲載する。<sup>(註1)</sup>

『伊礼原B遺跡 伊礼原E遺跡』（2008）、『伊礼原D遺跡』（2008）にすでに追加資料を掲載しているので今回は、付篇「キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査 補遺3」として今後の発掘調査報告の中で継続的に報告していく。

出土場所は第44図に示した。遺跡は平成9年度に実施された第三期の地区のものである。

遺跡は千原遺跡（試掘No.30）の2点、平安山A遺跡（試掘No.12）2点、平安山B遺跡（試掘No.54-B）、伊礼原D遺跡（試掘No.62）である。

### 1. 千原遺跡（第47図・図版47）

報告によるとNo.30・31・32の3ヵ所に試掘をいれた。これらの調査からグスク期の遺跡である。

#### ・試掘 30（1997.10.15調査）

文化層はIV層（暗茶褐色粘質土層）、V層（淡褐色混砂層）、VI層（黒褐色砂層）の文化層である。

第45図－1は試掘No.30淡灰色砂質土で出土した。淡灰色砂層は報告からV層に相当すると思われる。

第45図－1は「寛永通宝」で径が23.5mmと他の銭貨よりは大きめで、縁は両面とも明瞭である。「宝」の文字には錆が残る。初鑄造1836年である。

報告によるとV層ではグスク土器、青磁の蓮弁文碗などが出土している。

第45図－2は試掘No.30の褐色土層の出土で、Ⅲ層に相当する。銭貨は無文銭でやや欠損する。郭穴はやや不定形である。縁は明瞭でない。同じくⅢ層からは本土産磁器などが出土。

### 2. 平安山原A遺跡（第48図・図版48）

#### ・試掘 12（1997.10.08調査）

第45図－3は試掘No.12灰黒色砂質土層から出土した「洪武通宝」である。径23mm、郭穴や縁は表裏面とも明瞭である。初鑄造は明1368年で、赤味があり、鉄分を多く含むようである。

第45図－5はスプーン型の簪である。頭部の幅は幅12mmで深く、裏面は中央に稜が見られる。厚さは0.2mmと薄く、軸部はムディの最小幅は2.8mmを測り、横断面は六角形、軸部の先端部の最大幅は4.9mmを測り横断面は六角形を呈する。全体的には先端から32mmの所で僅かに屈曲し、先端はやや平らになることから使用のためと思われる。赤味があり鉄分が多いようである。

### 3. 平安山原B遺跡

#### ・試掘 54-B（1997.10.27調査）

第45図－6は試掘No.54-B淡灰緑色砂層から出土した青銅製キセルの雁首である。

火皿の径は18mm×16mmでやや楕円で、小口は6mm×7mmである。火皿とのジョイント部分は「R」字状で最も細いところは5mmである。全長は27mmを測る。火皿に付着物が確認される。

#### 4. 伊礼原D遺跡 (第49図・図版49)

・試掘 62 (1997.10.28調査)

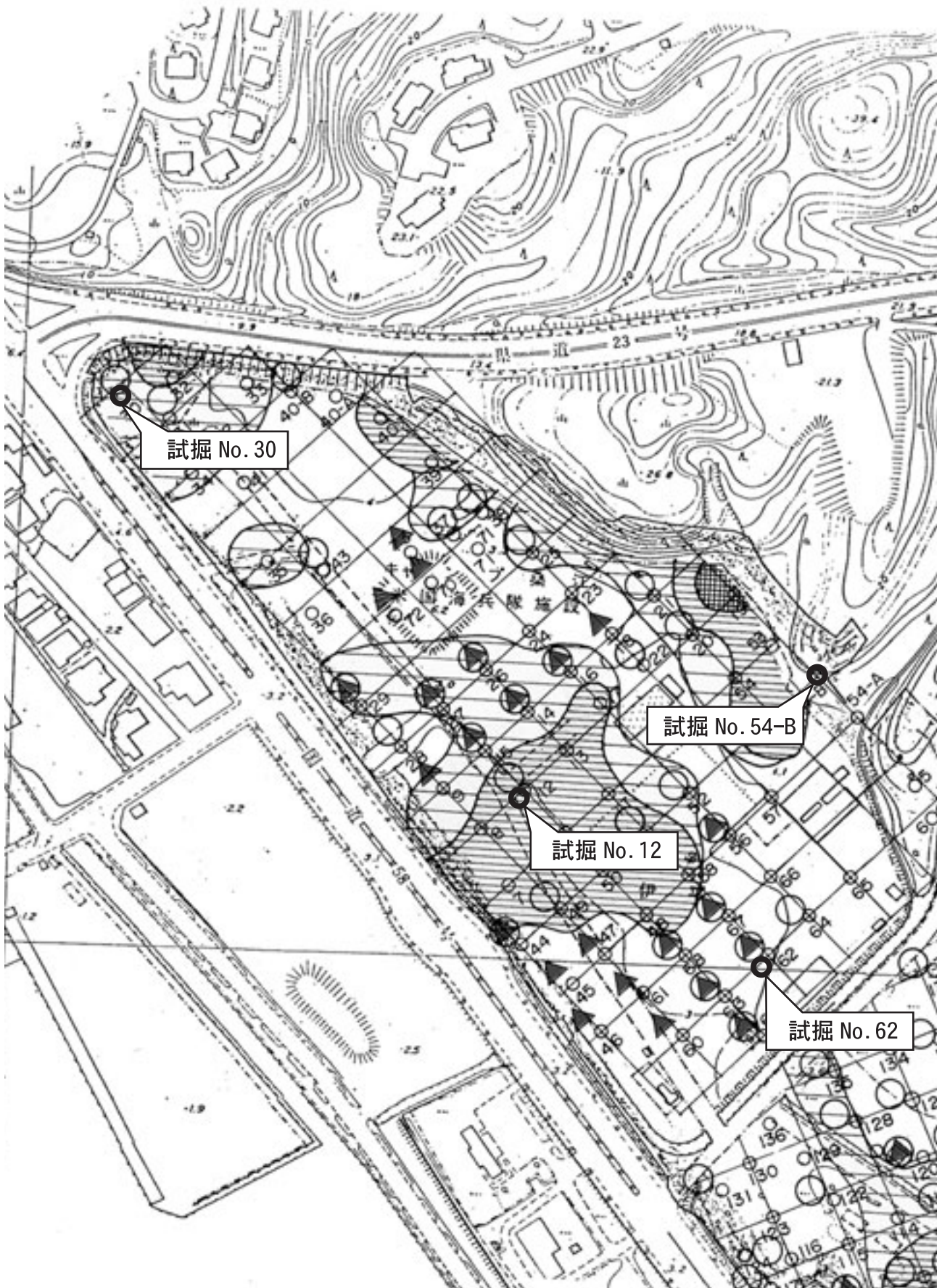
第45図－4は試掘No.62の灰褐色土層で出土した。Ⅱ層の旧表土と思われる。径は22mmで、郭穴はやや丸味がある。縁の表面はやや確認でき、裏面ははっきりしないが、状況から銘があったと思われる。

表32 銭貨観察一覧

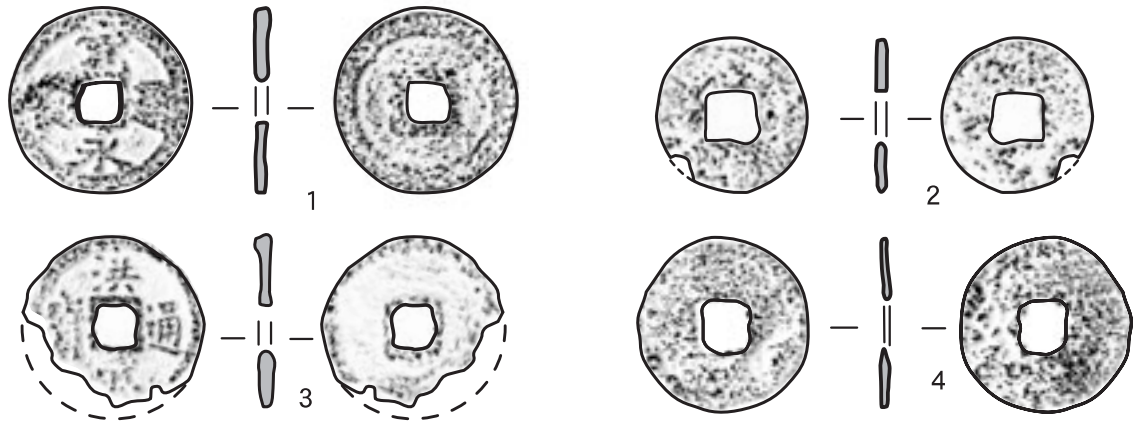
番号	銭文	残	背文	初鑄年	重量(g)	径(mm)	孔(mm)	出土地
1	寛永通宝	完形	無し	1636年	2.91	23.5	5	千原遺跡・1地区・No.30・淡灰色砂質土
2	無文	欠損	無し	—	1.2	19	7	千原遺跡・1地区・No.30・褐色土層
3	洪武通宝	欠損	無し	1368年	2.71	23	4.8	平安山原A遺跡・4地区・No.12・灰黒色砂質土
4	無文	完形	無し	—	1.85	22	6	伊礼原D遺跡・5地区・No.62・灰褐色土層

#### <参考文献>

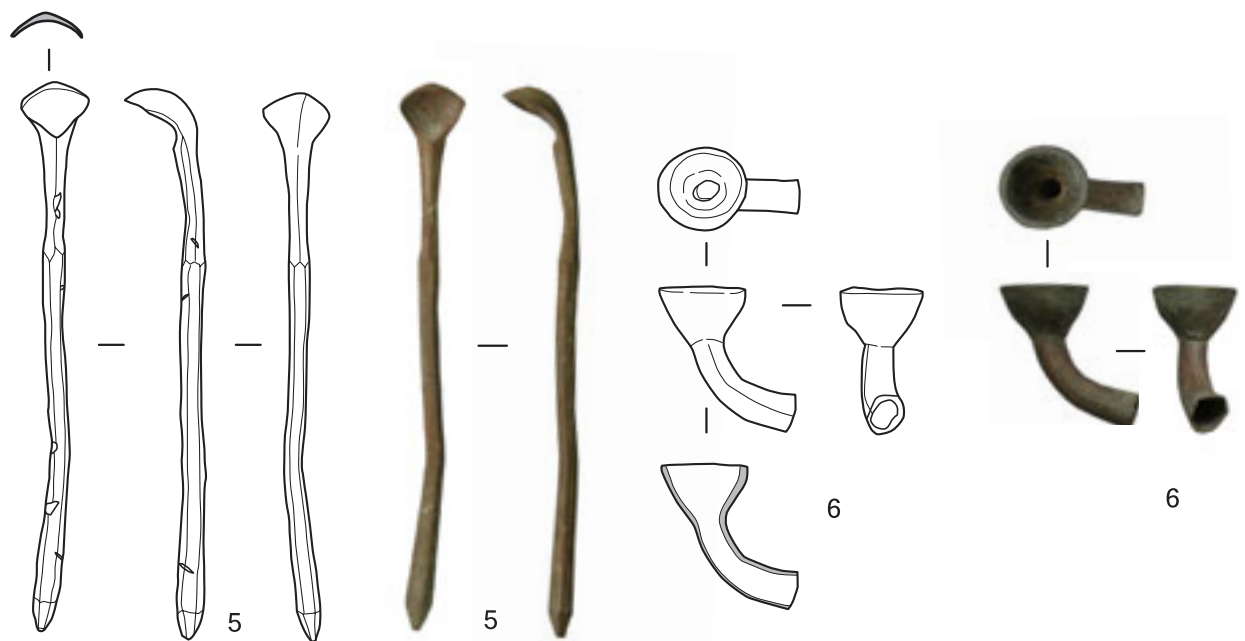
註1：中村愿・東門研治ほか『キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査』－伊礼原B遺跡ほか発掘調査事業－ 北谷町文化財調査報告書 第23集 北谷町教育委員会 2005年



第44図 試掘 No.12・No.30・No.54-B・No.64の位置

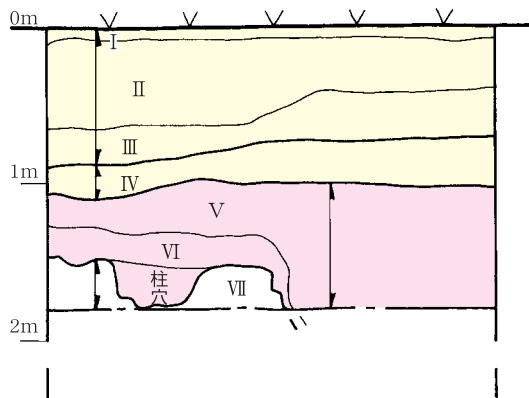


第45図・図版45 銭貨



第46図・図版46 簪・キセル

## 1 地区（千原遺跡）試掘No.30 （平成9年度）



第47図 試掘No.30 南壁

〈調査日〉平成9年10月15日

## 〈記述〉

1. 標高：3.90メートル
2. 層序：
  - I層：客土（10cm）
  - II層：淡褐色混礫土層（30～50cm）クラッシャー（客土）
  - III層：褐色土層（20～30cm）（攪乱）
  - IV層：暗茶褐色粘質土層（20～30cm）本土産磁器（砥部焼）、戦前
  - V層：淡褐色混砂土層（20～80cm）上位文化層、グスク土器、青磁
  - VI層：黒褐色混砂層（20～50cm）下位文化層、柱穴群 青磁
  - VII層：淡茶褐色砂層（表土下1.8m、以下不明）

## 3. 特記事項：

## 〈出土遺物〉

1. 層別
  - IV層：（本土産磁器（砥部焼））
  - V層：（グスク土器・蓮弁文青磁）
  - VI層：（グスク土器・泉州青磁）
2. 出土遺物
 

土器・青磁（蓮弁文 14C後～15C 泉州系15C）・白磁・染付・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・本土産磁器・カムイヤキ、天目・近代磁器・陶質土器。



図版47 試掘No.30 南壁

5 地区（平安山原A遺跡）試掘No.12（平成9年度）

〈調査日〉 平成9年10月8日

〈記述〉

1. 標高：2.9メートル

2. 層序：

I層： 客土（60cm）

II層： 灰茶色土層（50cm）

III層： 淡灰黒色砂質土（30cm）

IV層： 淡灰黒色砂層（30cm）

V層： 淡茶色砂層（30cm）粗い

VI層： 淡茶色砂層（30cm）細かい

VII層： 灰色小礫層（20cm）貝も含む

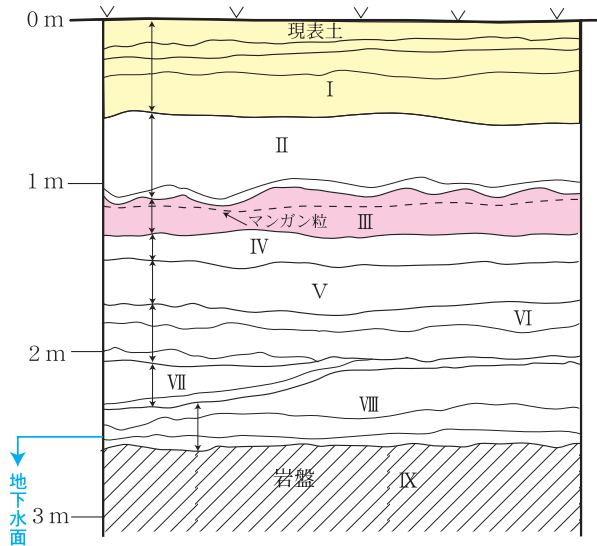
VIII層： 白色粗砂層（20～50cm）礫を少々含む

IX層： 岩盤

3. 特記事項：

〈出土遺物〉

III層： ジーファー・銭貨  
 グスク土器・青磁・白磁・染付  
 沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器



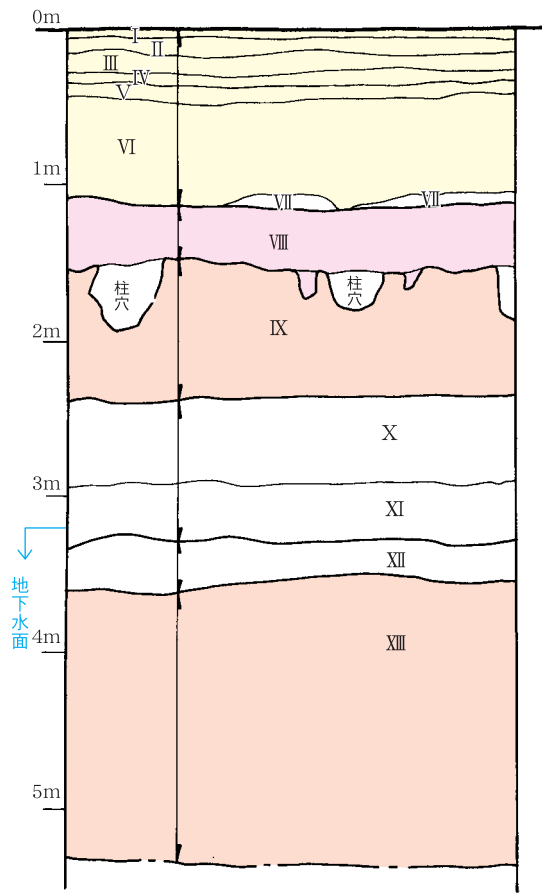
第48図 試掘No.12 西壁



図版48 試掘No.12 西北壁



5 地区（伊礼原D遺跡）試掘No.62 （平成9年度）



第49図 試掘No.62 東壁



図版49 試掘No.62 東壁

〈調査日〉平成9年10月28日

〈記述〉

1. 標高：4.2メートル
2. 層序：
  - I層～V層：（アスファルト、コーラル、クラッシュャー、バラス、コーラル）
  - VI・VII層：コーラル客土・赤土（80cm）
  - VIII層：淡灰褐色土層（40cm）下面に14個の灰黒色の掘込みあり
  - IX層：白色細砂層（80cm）
  - X層：灰色粗砂層（50cm）
  - XI層：白色粗砂層（40cm）地下水が湧く
  - XII層：ビーチロック層（20～30cm）
  - XIII層：白色礫層（1.8m）枝サンゴの海成堆積層

3. 特記事項：

〈出土遺物〉

1. 層別
  - VIII層：（後期系・大当原式・大当原式土器）
  - IX層：（後期系土器ローリング受ける）
  - XIII層：（後期系・大山式・荻堂式・伊波式・面縄前庭式土器）
2. 出土遺物：
  - 土器・青磁・白磁・褐釉陶器・沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・貝製品。

## 報 告 書 抄 録

ふりがな	はんざんばるいせき							
書名	平安山原B遺跡							
副書名	キャンプ桑江北側返還に伴う試掘調査							
巻次								
シリーズ名	北谷町教育委員会文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	東門研治・島袋春美・上地千賀子・秋本真孝							
編集機関	沖縄県北谷町教育委員会							
所在地	〒904-0192 沖縄県中頭郡北谷町字桑江226番地 TEL 098-936-3159							
発行年月日	2008年(平成20年)12月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はんざんばるいせき 平安山原B遺跡	おきなわけん 沖縄県 ちやたんちよう 北谷町 あざいへい 字伊平 こあざは 小字平 んざんばる 安山原	473260		26° 19' 19"	127° 45' 30"	2002.07 ～ 2001.03	300	キャンプ 桑江北側 返還に伴 う範囲確 認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
平安山原B遺跡		現 代	井戸遺構	現代磁器・陶器・沖縄産施 釉陶器				
		近 世	高床式建物址 溝遺構	土器・青磁・染付・炭				
		弥生相当期	落込み ジュゴンの頭骨	土器・石斧・くぼみ石・ 獣魚骨・貝				
		縄文中・後期		面縄前庭式土器・面縄東洞 式土器・貝製品				
要 約	<ul style="list-style-type: none"> <li>・戦前の集落跡</li> <li>・井戸遺構</li> <li>・高床式建物址</li> </ul>							

---

---

北谷町文化財調査報告書 第29集

**ハシザンバル  
平安山原B遺跡**

— キャンプ桑江北側返還に伴う発掘調査事業 (平成14・15年度) —

編 集： 北 谷 町 教 育 委 員 会

発行年： 2008年 (平成20年) 12月

〒904-0192 沖縄県北谷町字桑江226番地

TEL 098-936-3490

印 刷： 有限会社 金 城 印 刷

〒901-0305 沖縄県糸満市西崎町 5-9-16

TEL 098-995-0001

---

---